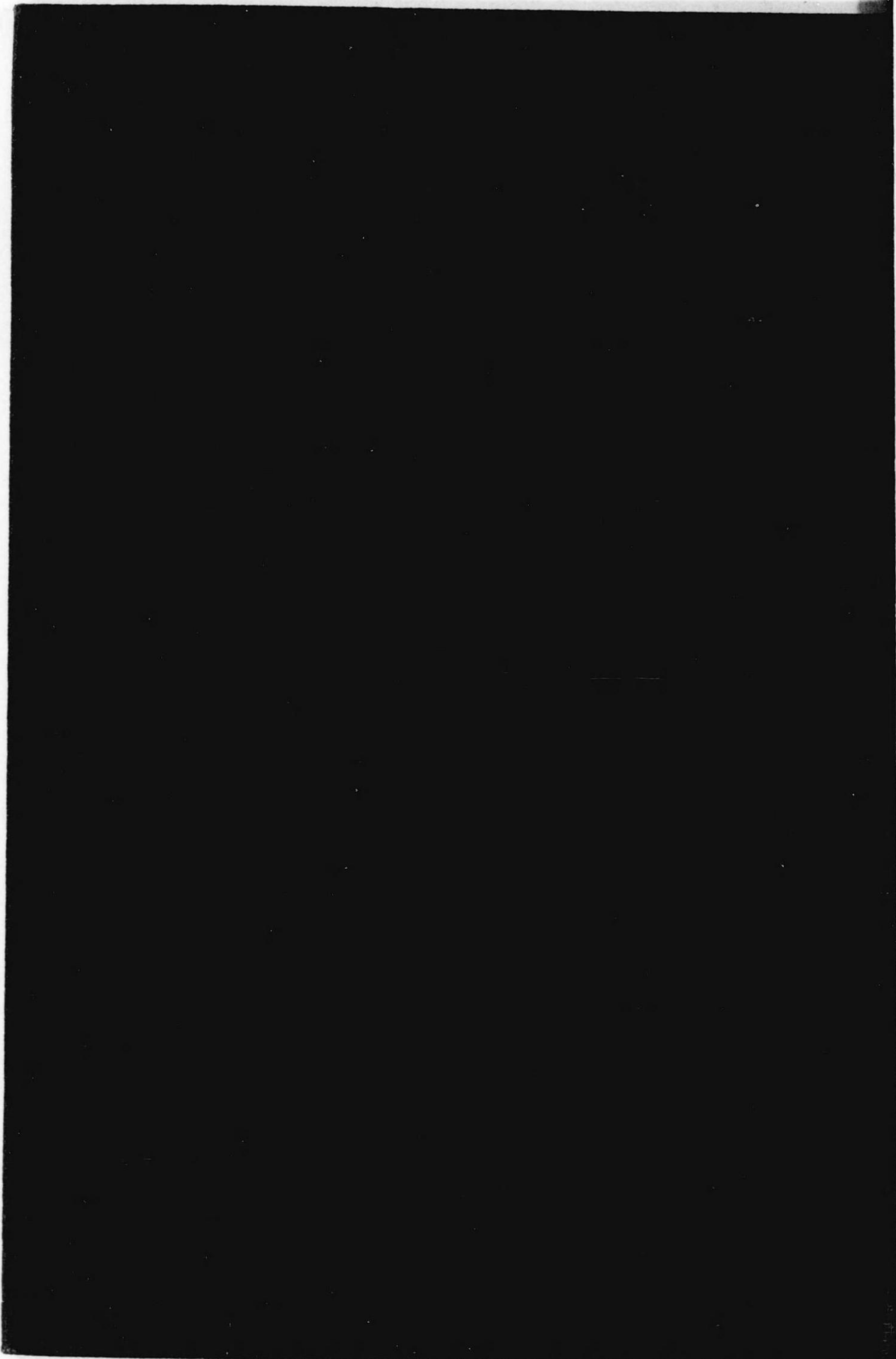
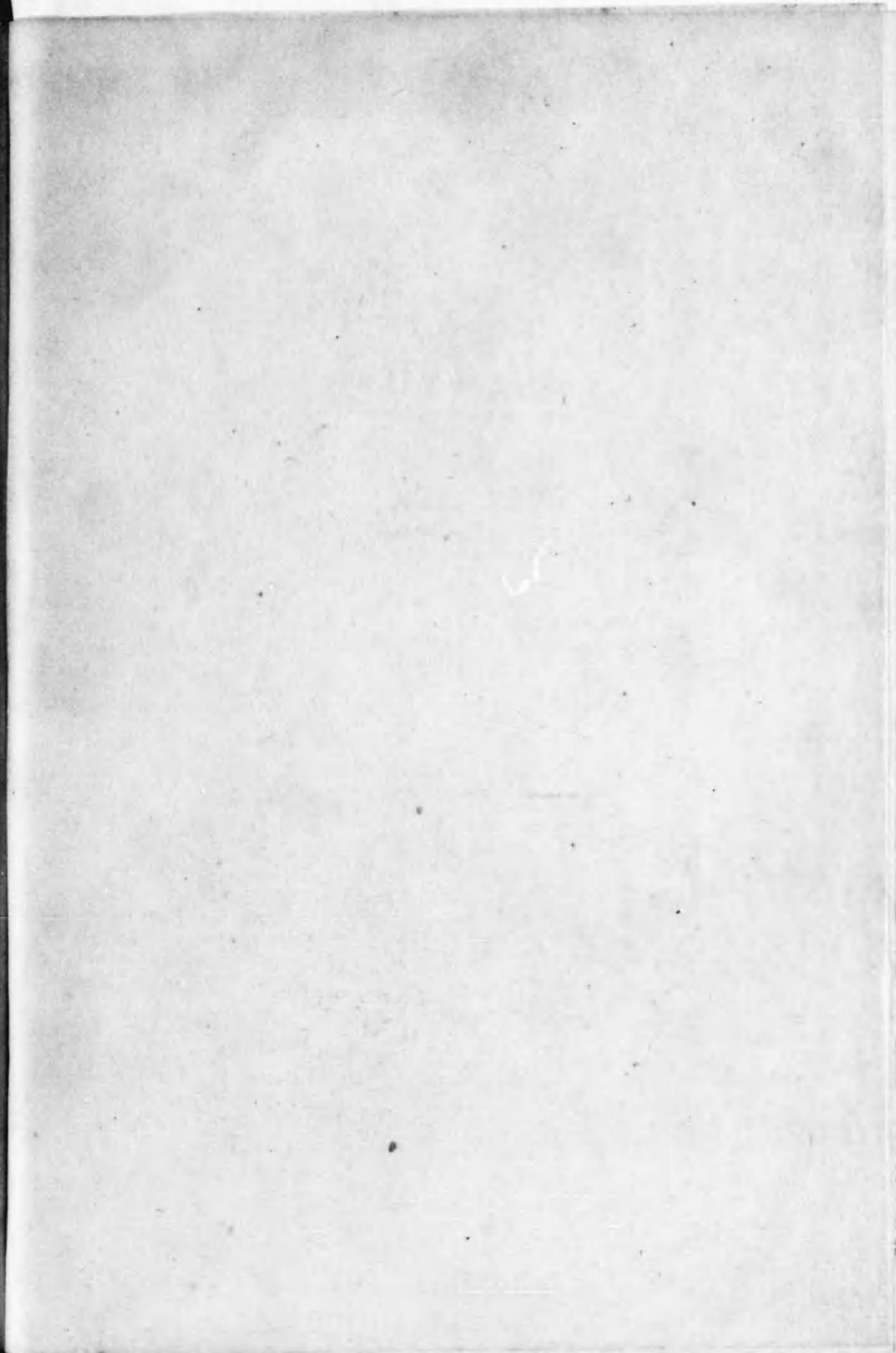


始



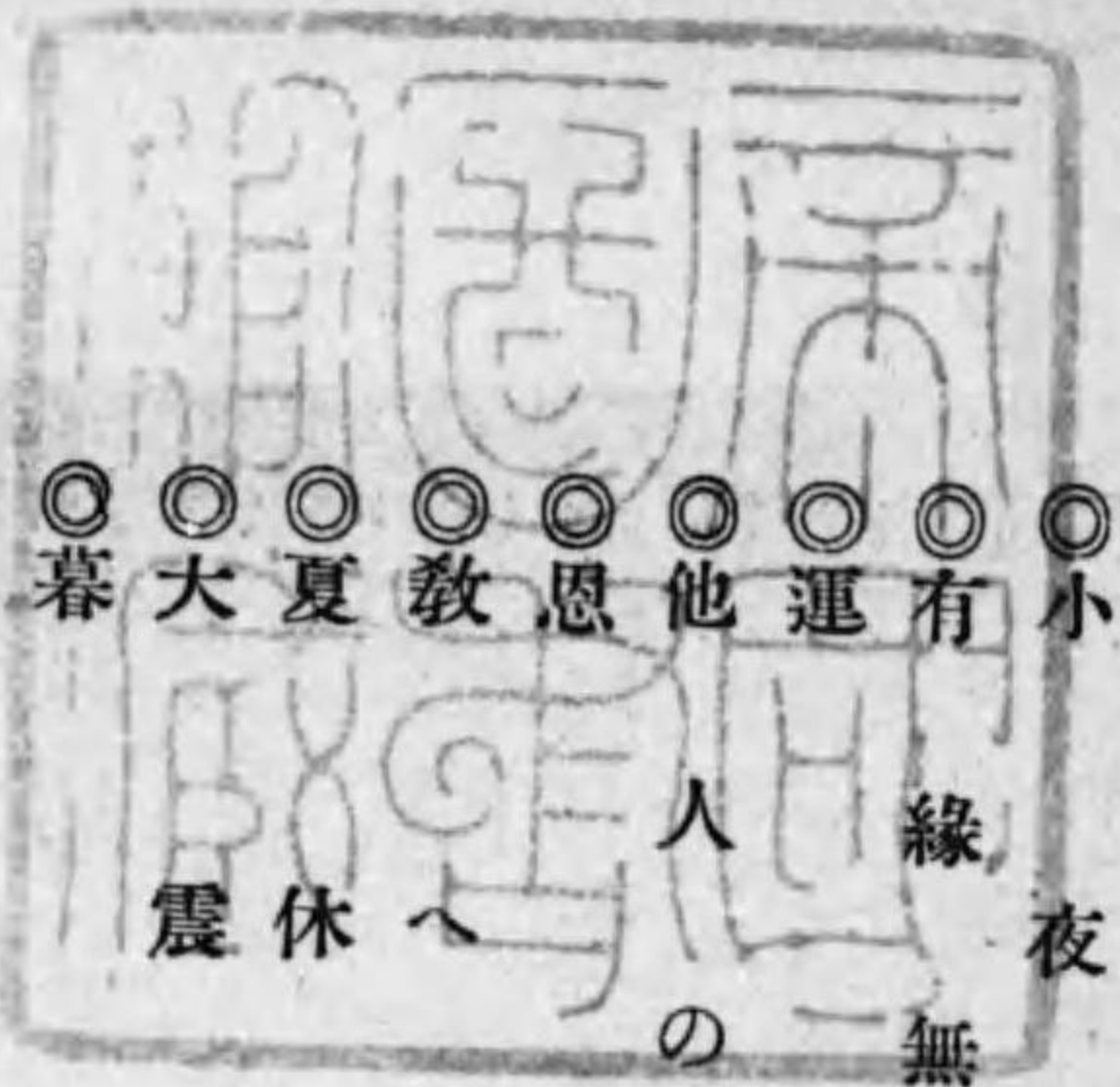


救世觀世音菩薩



宗教小説 天界地界目次 (後編)

天界地界



◎小	◎有	◎運	◎他	◎恩	◎教	◎夏	◎大	◎暮	◎日本	◎女	◎嫁	◎花
夜	縁	無	人	の	休	震	の	の	の	の	の	の
嵐	縁	命	花	義	草	み	災	秋	道	嫁	嫁	嫁
一	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六



影近者著

◎里	◎む	◎森	◎心	◎片	◎年	◎父	◎雲	◎惡魔	◎愛	◎清	◎退	◎神	◎永	◎夢	◎行	◎哀	◎手	
歸	ら	の	の	割		の	間	の	の	祈	か	か		の	者	別	向	
り	雲	囁	き	れ	頭	情	月	手	力	り	院	か	別	寺	嶽	詩	歌	
.....
二二八	二四六	二五九	二六九	二九二	三〇七	三三七	三三八	三四六	三五六	三七九	四三二	四四一	四七一	四九一	五〇四	五〇八	五三〇	

序

本書天界地界後篇は、昭和六年九月發刊致しましたが、當時全國の御國の華會員には、非常な禮讚歡迎を受けまして、一萬三千部餘を發行致しました。

その後再版する様會員から頻りに勧められました。止むを得ない事情がございまして、そのまゝ、八箇年を経過致しました所、昨年深く信する所がございまして、天界地界の前篇を再版して配本致しました所、又々全國會員から、非常な歡迎を受けまして、是非後篇も續いて發行せよとの御獎勵に依り、今春前篇に引き續いて後篇を發行致しました次第でございます。

著者が本書を書きました目的の、前篇と幾分趣きの異なる點は、最初から最後まで、現在社會の表面裏面に存在して居りまする、あらゆる姿を映しました事でありまして、その最も主眼とするところは、我が國の古來又現在に於ける、家族制度についてでございます。

この我が國の家族制度は、世界に誇るべき特徴を持つてゐるのでございます。それがために世界に類例のない様な、家庭的の教育美談等も、澤山ございますけれども、その反面には最も悲しむべき家庭悲劇が、至る所に繰返されて、幸福であるべき人生を破壊し、これがために愛する子孫をさえ、教育する事を誤つて世に怖るべき罪惡を犯したり、家をも身をも害ひ、祖先傳來の名譽地位財産を蕩盡し、君國にも禍ひして、不忠の臣となり、不幸の輩となつて、尊かるべき一生を、人に蔑まれ疎んせられながら、遂には心身を滅して行く様な結果に到らしめ

ます。

お互に若い青年處女は、結婚といふ事を、華やかな空想や幻影に描いて、聽てはそれが我が物として、掴み得る様に信じ、又それを憧憬れるものでございますが、扱ひよく結婚致しまして、家庭の人となりますと、前の想像や、幻影は跡方もなく消え去り、そこに残されたものは、不可思議な因縁によつて、親子となり兄弟としての縁を結んで、同じ家庭に生活する、舅姑小姑を對照として、嫉妬猜疑その他様々な、感情的争闘の波亂を起して、幸福な一大バラダイスであるべき家庭も、荒涼たる秋の野原の様なものになつて終つて、その半生又は一生を、涙で終つてしまふ様な人も、世の中には澤山ございます。

これは全く人間のお互同志が、唯現實の人間生活の姿だけを知つて、その誠の使命を知らず、又お互がこの世に生を享けて來た、形ある親様を知り乍ら、その

上に在します大悲大愛、全知全能にあらせられます、我が靈肉の御親にあらせられる、神佛の在し給ふ事を知り得ないために、此の世にあつて、血肉は分けられないにしても、そのもとは同じ靈肉を分けた同胞であり、又生みの大御親が總べての人類生物を、差別なく恵み慈しみ給ふ尊さを、悟り得ないために、我慾愛慾物質慾の煩惱に迷はされて、いはれなくして迷へる感情のために嫁を憎み、又舅姑小姑を怨み、罵り争ひ合ふと言ふ様な結果になりました、家庭に波瀾を起し、世間の物笑ひとなり、子孫の心身の融合を破壊し、その幸福を奪つて終ふ様な事になりますのは、眞に嘆かましい事でございます。

これは長い間の古來の因襲でした。

それでこれを一朝一夕に改善するといふ事は、却々困難な事でございますけれども、この習慣風習を根本から改善して、家庭を眞に愛の樂園心身の安息所と致

さなければ、今後の國民は信愛及び義勇奉公の道を、完全に盡し得る大和魂の所有者として、世界に輝く事は出来ません。

この因襲的悪習を、根本的に改善致しますのには、既に半生を超えて、老年期に入つた主婦に求めても、効果は甚だ渺いのでございます。

春の若緑のその如く、魂も身も自由自在に磨き育て、行く事の出来る、若き青年男女の人々に、眞の信仰的信念に依る、人生の意義とその目的を悟らしめ愛の王者正義の勝利者となつて、總べてを神の如く、佛の如き慈眼と慈悲の心を輝ける瞳を以て、總べての誤れる我慾煩惱を征服して、その魂を清めて、共に愛と、正義の實行主義者となつて、家庭を幸福の樂園とする事は、決して困難な事ではありません。

これを信じこれを念願するために、天界地界の後篇をこゝに發行する事に致し

ました。親愛なる愛讀者諸姉には、本篇を通じてよく神と佛と人類の生活が、有形無形の中に如何なる使命を得て、人は生れて人は逝くといふ事が、お分り下さいます事と信じます。

君國は當に創世以來未曾有の非常時に直面致しまして、之を打開するためには偉大なる國民の純真な精神力に俟たねばなりません。

願はくば總べての會員の方々が、迷信ならぬ眞の信仰を得られて、極端なる我慾物質慾の煩惱より救はれて、生き乍らその魂は、生死を超越して、平安な心持で自己の生來の使命に、心身を惜しみなく捧げ盡して、最も意義ある尊き一生を過されて、最後の日には共にその魂は、永遠不滅なる神の樂園にお歸りになる事の出来る様にと、只管念願して筆を執ります。

天界地界 (後編)

小夜嵐

慌しい年も暮れて、一夜明くれば初日の光が、東の空から朗かにさし昇つて、京の街は目覚めるばかりに盛装を凝らした人々が、門松を縫つて、あちらこちらと豊かに年始廻りをして居ります。

此處彼處には、千代を壽ぐ萬歳の鼓の音が、ボン／＼と聞えてゐます。

加茂川の水も今日は殊更に改つた様に、清く澄んで流れてゐます。

何處の家にも日の丸の旗が風に翻つて、和やかなお正月氣分を漂はせて居ります。

「正月や、昨日の鬼が禮に来る。」

といふ句も泌々と味ふ事が出来まして、昨日に變つて今日は、帳面や鞆を提げて、難しい顔をして、慌しく町を行く人も、自轉車で駆ける人もありません。

皆天眞爛漫餘裕綽々として歩いてゐます。

一日は總べての商家も表戸を閉ざして、主人も雇人も僅かに戸口を開けて出入りするだけで、全くの年始氣分に浸つて過します。

一夜明けて二日になると、各商店共に大賣出しで、朝の二時三時頃から初荷を運ぶ馬車自動車の音で、町は大騒がしでございます。

初賣りの店へ集る買初めの客が、ひつきりなしに、出入りして、昨日に變る賑やかさを呈して居ります。その騒ぎを他所に、午後の二時頃清水の瀧から、石段を登つて睦しく語り合ひ乍ら清水の舞臺へ登つて來た、一組の男女がありました。

男は二十八九らしく、洋服を着てステッキを手に持つてゐます。

女は二十歳前後で、色白の面長な眼元に涼しい様な愛嬌のある、目も覺める様な容貌の持主でございます。スラリと整つた體に、派手な豎縞のお召の上に、濃い紫の繪羽々織を着てらくだのショールを掛けた姿は、道行く人を皆振返らせる程の美しさ氣高さでございます。

二人は如何にも打融け合つて、睦まじさうには見えませんが、さりどて夫婦らしくは

見えません。

應て觀音様の前へ來ると、二人共帽子を取りショールを外して恭しく禮拜しました。そしてお堂を出た二人は、顔を見合せてニッコリ微笑むと、

「どちらから行きますか。」

と男の人が尋ねると、

「私、どちらからでもよろしうございますわ。」

と令嬢は淑かに答へました。

「このまゝすぐにお宅へ歸りませうか。」

「さあどう致しませう、私、どちらでもよろしいのですけれど……。」

「それではもう少し、そこら邊りをぶらついて歸りませうか。僕一寸貴女に、聞いて頂き度い事がありますから……。」

と言ひ乍ら、何故か男は今迄の晴やかな顔を、一寸曇らせました。

令嬢は審かしさうに、

「まあ、何の事でございませうか、改つて？」

「いや別に大した事はないのですが、一寸貴女に相談して、貴女の意見を伺つて見たいと思ふ事があるのです。」

「どんな事でございますの？ どうぞお話し下さいませ。」

「だけどこんな人の澤山ある所では、落着いてお話しも出来ませんから、何處か人の餘りゐない、静かな所でお話し度いのですが……。」

さう言はれると令嬢は、思はず顔を赤らめて、

「まあ、そんな秘密なお話でございませうの？」

「いや、秘密といふ程の事じやないのですが、僕一人で解決のつけられない問題で、此の頃中一寸悩んでゐる事があるものですから……。」

「そんな御心配な事つて？ どんな事でございませうか。」

早くお聞かせ下さいませ。」

と二人は清水の正門の方を下りて、山科街道の方へ歩いて参りました。

二三丁離れた所の、山の中の静かなお堂の所まで来ると、眞向ふに壯大な清水寺が見えて、澤山な人が歩いてゐるのが眼に映りますが、二人の立つ邊には、人影はあり

ませんのでその石段をハンカチで拂つて、そこに腰を下すと、令嬢は待ち兼ねた様に、

「此處なら誰もゐませんから、どんなお話をしてもいいでせう。」

と言つて男の顔を見て微笑むと、

「さうです、此處ならどんな話をしてもいいでせうね。」

「え、だけご貴方、改つてどんなお話でございませうの？ 私共の結婚についての

事でございませうか。」

この二人は言はずと知れた、宮崎春光と、その許婚のきぬ子でございませう。

きぬ子に眞正面から結婚についての事かと聞かれて、春光は顔色をさつと變へました、すぐに混亂したその精神状態を引き締めて、

「きぬ子さん、僕本當の貴女のお心が聞いて見たいのですが、貴女は僕を心から信じ

てゐて下さいますか。」

「勿論でございませう、今更どうしてそんな事お聞きになりますの？」

きぬ子は思はず春光の方に向き直つて、詰問する様に言ひました。

春光は少しあはて、

「別にどうといふ事はないのですけれど、貴女やお父様やお母様の、僕に對する本當のお心持が伺ひ度かつたものですから……。」

「まあ貴方は、今日は餘程どうかしてゐらつしやいますわ。」

貴方と私との結婚については、貴方も御承知の通り、父母も本當に喜んで、日ま

で定めてその準備に母なんかかゝり切つて居る程ではございませんか。

そんな事御自分で充分分つてゐらつしやいます癖に、そんな事を今更私にお聞き

になるなんて……、本當におひごうございますわ。」

と言つて、怨む様な眼をして、春光の顔をチラと見上げて俯向くと、春光はそのいち

らしい姿に思はず我を忘れて、きぬ子の右手を固く握ると、

「きぬ子さん、悪く思はないで下さい、僕はつまらぬ事をお聞きして、本當に悪かつ

た……。」

と只管詫びる様に言ひました。そして又深い嘆息をつくくと、深く首をうなだれて、又

黙つていつまでもく考へ込んで終ひました。

きぬ子は唯ならぬ春光の様子におどくし乍らも、情なさうに、

「貴方、本當にどうなさいましたの？ 貴方、貴方」

と春光の傍にすり寄つて、膝に手を置いて尋ねても、宮崎はそれには答へないで、尙

も深く惱まし氣に、苦しんでゐる様子でありました。

聽て突然春光は、我を忘れて大きな聲で、

「きぬ子さん、僕はどうすればいゝんだ、僕はこのまゝ生きてゐる事は出来ません。」

と言つて、右手を眼に當てるど、思はず打伏して男泣きに泣き出しました。

きぬ子は吃驚して、春光の膝に縋りついて、

「貴方、貴方、どうなさいましたの？ 貴方譯を聞かせて下さいませ。」

と烈しく膝を揺つて尋ねても、春光は一言の答へも致しません。

きぬ子は唯譯もなく悲しくなつて、溢れ落ちさうになる涙の目を押へ乍ら、

「貴方、私との結婚がお厭になつたのではございませんか、それならさうと、はつ

きりと仰有つて下さいませ。」

ねえ、宮崎さん、お互はまだ純潔ですもの、貴方の意志に叶はない結婚をして頂く

必要はございませんわ、お互に一生の大事でございませうもの。

ひつえう、

必要はございませんわ、お互に一生の大事でございませうもの。

ねえ貴方、どうぞはつきりと仰有つて下さいまし。」
と涙聲になつて、春光の耳に口を寄せて聞きましたも、春光は如何にも苦しさに堪えられないものゝ様に、大きく息をするばかりで、少しも口を利きません。

きぬ子は途方に暮れて、
「貴方、義理や人情にからんで、貴方の御意志でない結婚をして頂かうとは申しませ

ん。私ごんなに愚かな者でも、そんな無理な事を考へては居りません。
幾ら私や父や母が希望しました所で、御本人の貴方のお心に副はない結婚でしたら、私お断り下さいまして決してお怨みには思ひませんが。

私には諦めるだけの覺悟はつきますわ。

ねえ私、ごんなにお慕ひしてゐるか分らないのですけれど、そのために貴方をお苦しめするには忍びませんから、屹度諦めてお目にかけます。

ですからどうぞ、何も彼も私に打明けて仰有つて下さいませ。」

と言ひ終ると、悲しみに堪え兼ねてか、宮崎の膝に俯伏して、さめくくと泣き入つて終ひました。暫くすると春光は顔を上げて、涙を拭き乍らきぬ子を眺めて、いとしさ

うにその肩を抱き乍ら、

「きぬ子さん、誤解しないで下さい。」

僕が貴女を心から愛してゐる事も、慕つてゐるといふ事も、貴女が僕を思つてゐて下さる以上だと思ひます。僕は今まで貴女一人を得る事が出来れば、天地一切の幸福を得たよりも仕合せだと思つてゐました。

それがお父様にもお母様にも、公然と許して頂いて、婚約の間柄として心に隔りもなく交らせて頂いて、結婚の日まで定められて、その日を一日千秋の思ひで待つてゐた僕です、この心持を貴女は、よく知つてゐて下さるでせう。

その僕が貴女の本當の心持や、貴女の御父様御母様の有りがたい御心持を聞いて、喜ぶべきであるのに、その反對に悲しむなんて、本氣の沙汰ではありません。

けれども僕は……、きぬ子さん、今どうしていゝか、自分にも分らない苦しい立場に陥つて、心が狂亂する程悩んでゐるのです。

僕は今本當に、此の胸が破れさうに苦しいのです。」

それを聞くときぬ子は、驚きの目を瞠つて顔を上げ乍ら、

「まあ、その御心配といふのは？ 貴方、早く私に聞かせて下さいまし。」

「きぬ子さん、よく聞いて下さい。」

「僕はとても苦しくて、一人ではこんな悩みは持ち切れない。」

「貴女に一切を打明けます、そして貴女がお命じになる通りに、私は最後の決心を致しませう。ですから少しも遠慮のない批判をして、最後の命令を下して下さい。」

「私何だか貴方の仰有るお言葉が、怖い様な気が致しますわ。」

「けれども伺はないと尙更心配ですから、強い氣になつて伺ひますから、早く仰有つて下さいませ。」

「しかし僕は今、總べてを打明けて貴女にお話した後の結果を思ふと、何だか怖ろしい氣がして、お話する勇氣が出て來ません。」

「そんな事をいつまでも仰有つてゐないで、私の眞心を本當に信じて下さいましたら、早く一切の事情を残らずお話しになつて下さいませ。」

「では貴女は僕がどんな事をお話しても、愛想をつかさず、今迄通りに今後共、信じて下さる事を誓つて下さいませるか。」

「誓ひますわ、假令どんな事を仰有つても、貴方を何時までもお信じ致します。」

「それではお話しますが、貴女は決して吃驚しないで下さい。」

「僕は飛んでもない事をし出來して終ひました。」

「まあ、それはどんな事でございますの？」

「お話ししなければ分りませんが、貴女覚えてゐて下さるでせう。」

「昨年十月僕の従兄が天津の病院で病氣になつて、それを見舞ふために僕が行つた事がありましたね。」

「え、覚えて居ります、その従兄の方はお亡くなりになりましたわね。」

「え、亡くなりました、本當に可哀さうな事をしましたよ。」

「お氣の毒でございましたわね、お年はお幾つでしたの？」

「僕より一つ下でしたから、二十七だと思ひます。」

「まあお若いのに、奥様がありましたでせう。」

「え、あるのです、それは道枝といふのですが、この人は従弟が亡くなる前に、變な行き掛りから、無斷で東京を出て、瀬田の唐橋から瀬田川へ身を投げたのです。」

「まあ、そしてお亡くなりになりましたの？」

「いや、川へは入つたのですが、不思議な事に人に救はれて、大病院へ運ばれて、色々手當を受けたのですが、どんなに世話をしても息は吹き返さないし、さうかと思へば體は何時までたつても冷え切らないので、色々手を盡して世話をしている中に丁度二十四時間程経過した時、はつきりと生き返つたのです。

そして段々力がついてからの話によると、何だかその間に魂が、素晴らしく遠い所の美しい御殿の中へ行つて、色々な不思議な音楽を聞いたり、天人の踊りを見たり又、とても偉大な男女の神様が、生れぬ先の魂の親だと言つて、色々な話を聞いて聞かせて、再び此の世へ天人に送られて歸されたと思ふと、生がついたんだと言つて、まるで夢かたわごとの様な話だけれども、本人は大真面目で、幾度も同じ事を眼に見える様に語つてゐるのですが、従弟の勇といふのも、一寸哲學的の變り者でありますし、それに二人が結婚するまでの關係も、全く普通では一寸見られない様な、變つた友愛的の關係から、遂に結婚にまで進んだ様な譯で、可なり深く思想的に又信仰的に理解し、又信愛し切つてゐたのです。

さういふ氣持は僕等にだつて、想像はつくでせう。」

「はいよく分ります。」

「さういふ間柄ですから、結婚後も非常にお互が、信頼し合つてゐたらしいですからその妻が甦生してからの物語りなども、他の者が聞けば、何の意味もない寢言の様に思へるだけけれど、従弟はそれを眞面目に聞いて、それを信じ切つて終つたらしいのです。さうして二人は將來に、大いに活躍しやうと、大きな希望を持つてゐたらしいのですが、その道枝といふのが全快して、もう大丈夫といふ所で、今度は従弟が風邪を引いて寝込んでしまいました。

假初の風邪だらうと思つてゐる中に、段々と病勢が進んで、急性肺炎になり危篤状態に陥つたといふ知らせが、僕の所へも参りましたから、僕は吃驚して、すぐに見舞ひに行つたのです。丁度その夜の真夜中の事でした。

いよいよ病狀が悪くなつて、もう主治醫も最後を宣告して終ひました。

一同は周圍につき切つて、一生懸命世話してゐたのですが、不思議な事にはそれまで非常に苦んで、周圍の人の顔の見分けもつかず、口も利かれない病人が、眞

夜中にはすつかり病氣の苦しみを忘れた様に、その家内に何やら話かけておりました。

そのうちにお母さんや僕を呼ぶ聲が聞えたので、隣の室にゐた僕達が、みんなして病室へ入つて行くと、従弟は母に向つて、それまで心配かけて育て、貰つた禮を言つたり、山々の御恩返しもせずに、先に逝く罪を許して下さいといふ様な事を、はつきりと言ひました。

「まあ、それでは御自分でもう駄目だといふ事を、はつきり意識なさつたのですね。」

「しつかり意識してゐました、人間の最期といふものは、本當に嚴肅なものです。」

僕本當に驚いて終ひました。

「それでは何か御遺言でもございましたの？」

「さうですよ、その遺言のために、僕は苦しめられてゐるんです。」

「貴方にも御遺言がありましたの？ それはどんな事でございますの？」

「それが大變な事なですよ、きぬ子さん、驚かないで下さい。」

従弟は母親に暇乞ひをしてから、今度は僕の名を頻りに呼ぶものですから、僕は早速その顔を覗き込んで、その要件を聞きますと、従弟はばつちりと眼を開けて、僕の

顔を見ると大變喜んで、臨終の際に頼んでおき度い事がある、承知して呉れないか、と言ふものですから、僕は今命が終らうとする間際の従弟の頼みだから、快く聞いてやつて、出来るだけ安心させて、安らかに永眠させたいと思ひましたので、内容は深く考へず、どんな事でも誓つて聞くから、遠慮なく言へと言ひました。

従弟は念に念をついてから、僕が亡き後は哀れな妻の道枝と、その體内に宿つてゐる自分の命の片身を引き取つて、世話をして呉れと言ふのです。

それを聞いたきぬ子の顔は、見る／＼眞蒼になつて、聲をふるはせ乍ら、

「それで貴方は何とお答へになりました？」

「僕はこの意外な言葉に吃驚して、口も利かれませんでした。」

それと同時に貴女との事が頭一杯に浮んで來ましたので、一も二もなく僕そればかりは引き受けられないと、拒絶しますと、従弟の眼は鋭い色に變つて、厭さうのか厭なら厭でもかまはぬ、僕は君が承知しなければ、勝手に君の生命の中に生きて自分の念願を通して見せる、と言つたと思ふと、僕の體はるても立つてもゐられない程苦しく、體がふる／＼とふるへて、どうにもならない様な状態になりました。

僕はそのうちに無我夢中になつて、思はず従弟の手を掴むと、よし承知した、僕の總べてを投げ捨て、君の願ひのために生きて、道枝さんも又君の子どもも引取つて、萬事世話をするから安心せよ、と我知らず言つて終つたのです。」

「まあ 貴方は！ そんな事仰有つて！ それをお誓ひになつたのですか？」

「怒らないで下さいきぬ子さん、決して僕の本心で言つたのではない。」

僕の本心以外の何物かゞ、そんなに言はせたのですから…… どうかその事だけは貴女も信じて下さい。」

「だつて貴方、そんな事仰有つたさて、矢張りその従弟の方に、はつきりとお誓ひになつたのは、間違ひのない事實ではございませんか。」

それでその方…… 何と仰有いまして……？」

「従弟はそれを聞くと、さも安心したらしく、道枝さんと呼んで、これから先は宮崎を自分と思つて信頼して生きよと言つたのが最期の言葉で、眠る様に息を引取つて終ひました。」

その後で僕は取返しのかぬ事を言つて終つたと、後悔はしましたけれども、あの

場合あゝいふより仕様のなかつた僕の立場は、周囲の人も道枝さんも知つてゐるのだから、今臨終の際にある者の、あれだけの真劍の頼みを、無下に斷つたら屹度迷ふであらうから、後は事情を明らかにして話せば、總べては了解が得られるのだから、従弟の魂にだけは、安心させてよかつた、と軽い氣持にさえなつてゐたのです。

それが貴女との結婚の日取も定めて頂いて、その日を指折り數へて待つ此頃になつて、段々どあの時の事が思ひ出されて苦しくなり出したのです。

従弟は貴女との事を少しも知らないから、唯妻子を愛する餘りに、そんな事を僕に頼んだのです。僕達の事情さえ知つてゐたら、決してこんな事を言はなかつたらう事は、分り切つてゐます、さういふ僕の本心ならぬ他の心が、つい禍ひしてこんな事を、従弟に誓つた事のために、僕の本心は非常に悩んでゐるのですが、若し貴女と結婚後に僕の本心でないもう一つの心が、そんな思ひもよらぬいたすら心から、僕の本心を悩ます様な事がありましたら、貴女の強い愛と真心で強く抱擁し力づけ慰めて、迷へる心を拂ひ除けて僕を救つて下さい。

それだけを僕は貴女に、よく／＼お願ひしておき度かつたのです。」

と宮崎は一生懸命できぬ子に頼み入るのでした。

しかしきぬ子は何故か、段々深くうなだれて終つて、果ては宮崎の膝に顔を埋めて泣き入つて終ひました。宮崎は堪り兼ねて、

「きぬ子さん、僕の今言つた事が、氣に障つたのでしたら、どうか許して下さい。

このお願いが聞いて頂けないなら、僕はどんなにしても、あの時の事は努めてすっかり忘れて終ひますから……。」と両手を肩にかけて、優しく慰めるのでした。

けれどもきぬ子は、どうしても顔を上げません、宮崎は仕方なしに、無理にきぬ子を抱き起して、その顔を覗き込むと、きぬ子は唇の色まで變えて、體をふるはせ乍ら、

「貴方、私、お願い致します、どうか私の事はこれまでと諦めて、道枝さんといふ方を救つて上げて下さいませ、お願いです……。」

と言ふと、又も打伏してさめく泣き入りました。

有縁無縁

清水の事があつて後は、きぬ子は深い悲しみに閉ざされて、父母にもろくに口も

利ず、宮崎に對しても今迄の様に、親しみを見せないばかりか、宮崎が訪問しても逢ふ事をさえ、避ようとする様子が、宮崎にとつては堪らない切なさを感じさせました。

聽てそれは兩親も感づく所となつて、きぬ子は兩親からその事情を糺されました。

或る日宮崎は將來の舅として尊敬すべく、現在は自分の恩師として、信頼してゐるきぬ子の父西森陽三博士から、きぬ子との婚約破棄の宣告を受け、同時に宮崎が運命

の命ずるまゝに、勇の臨終の頼みを受け入れ、道枝とその子供を救つて、幸福にすべく努力して、故人に對する誓ひを果すべき必要のある事を、懇々と説かれ、又母なる人からも、きぬ子自身からも奨められて、一時は氣も狂はんばかりに悩み惑ひましたが、聽て徐々に冷靜な自己に歸ると、眼に見えない運命の力が、自分をさうした方面に導かせて行く様な、不可思議な衝動を、自分の心の何處かに感じて參りました。

宮崎は西森博士の家を出て、夢中で下宿まで來ると、部屋に入るなり仰向けに、ごろりと寝ころんだまゝ、じつと天井を見つめて居りましたが、誰に言ふともなく、

「運命、運命。」

と幾度か繰返して空虛の様に考へてゐました。

それから一時間も過ぎると、突然今迄とは別人の様にはね起ると、俄かに着物を着替へて、停車場に走りつけて、そこへ入つて来た急行列車に飛び乗ると、東へ向つて走りました。その翌朝宮崎は、獨りひよつこり中里村の野田家を訪れました。

思ひがけない珍客に、野田家の人達も、今は實家へ引き取られて歸つてゐる道枝も一時は驚き且又喜んで、下にも置かない程もてなしました。

野田家の人達はあれこれと、眞心を盡して歡待し乍らも、今頃突然何のために宮崎が訪問したのか、一寸想像がつかないので、審かしく思ひ乍ら良太郎は、

「御遠方の所をこんな山の中へ、よくこそお出で下さいました。

家内や俵や道枝からも、貴方の事を聞きまして、蔭乍ら感謝致して居りました。

色々御世話様になりました、眞にどうもありがとうございました。

今度は何かこちらへおついでの御用でもございまして、お寄り下さつたのでございませうか。」

と聞きました、春光は一寸居すまいを直して、

「全く私は深いゆかりもございませぬのに、突然にお伺ひ致しまして、甚だ失禮とは思ひましたが、是非一度御相談申上げて、お願ひし度い事がありました、急に思ひつきました、わざくお伺ひ致しました。」

「まあさやうでございませうか。わざくごうも恐れ入りました。」

「つきましては今日伺ひました要件を申上げ度いと存じますが、一寸複雑した事柄ですから、お差支へがなかつたら、お母さんや兄さん、道枝さんも此處へお出でを願つて、その席上で申上げ度いと思ひます。」

「さやうでございませうか、それならすぐに呼びますから、まあどうぞ御ゆつくりなすつて下さい。」

その中に母親も兄も道枝も、嫂のふさるもその席へ出まして、皆座につきますと宮崎はきちんと座り直して、落着いた調子で、

「實は前に一度の御知らせもしないで、突然御伺ひ致しまして、大變失禮を致しました、實は從弟の勇君が病院で亡くなります時、皆さんも御承知の通り、私も見舞に参りまして、臨終の時までついてゐたのでございませうか、その時に從弟が僕に對して、

意外な遺言をしたのでございますが……。」

「はあ、さうだつたさうです、が、その事を伴や家内が歸つてから聞きましたので、大變に貴方に御迷惑をおかけした事を、申譯なく思つて居りましたのですが、でも貴方がそこを要領よく慰めて、安心を與へて下さつたさうですから、定めし勇さんも心を残さず、安らかに極樂へ行かれた事と思つて、喜んで居ります次第でございます。」

「それにつきまして僕は、その晩餘り突然に勇君からさういふ事を言はれたので、さう言つたらよいかと、まごついて居りますと、勇君が言ひますのに、若し君が承知しなければ、自分は君の生命に住むなぞ、謎の様な事を言つて見凝めてゐる、その眞剣な眼の色を見ると、僕は堪らなくなつて、一種の底知れぬ怖ろしさ、え感じて、本當に無我夢中でお前の願ひ通り、道枝さんも其子供の世話も、君に代つて出来るだけ力を盡くしてやると、誓ふと従弟はそのまゝ、安らかに眠む様に行つて終ひました。

従弟の最後は全く言ひ様の無い、嚴肅なもので、僕も本當に深い敬虔な感に打たれました。」

「はあ、はあ、最後の時まで、しつかりして居られたと、家内も伴も感心して話しま

した。」

「全くあれ位最後までしつかりしてゐる事は、本當に多くはないですよ。」

「貴方が後の事は引受けたと仰有つて下さつた時、有りがたうと言つて、嬉しさうにニツコリして眠る様に息を引取られた時の姿は、何とも言はれない、尊いものでございました。」

とおみねもしみじくと言ふのでした。

「僕もあの時餘り突然でございましたので、私は他に結婚すべき人が定つて居りました、此の春式を擧げる事に日取まで決定してゐましたけれども、それを言ひ出す餘裕がございませんでした、ゆゑ、本當に何ともあゝ言ふより致し方がございませんでした一旦あゝした答をして、安心させたものゝ、私の許婚の父といふのは、私が大學で教へを受けた先生でございまして、話は三四年前からありましたので、お互に兄と妹といふ様な氣持で、始終私はその家へ出入りして居りまして、結納もすんで居りますので、唯式の日を待つばかりといふ状態になつて居りましたので、勇君の言葉には、非常に困りました、それですぐにその事を話して、その依頼は斷らうと思つたのですが

從弟がその暇を僕に與へずに、怖ろしい強い信念の力で、僕の感情の一切を征服して、眞心に喰ひ込んで來ましたものですから、僕はその力に壓倒されて、無我夢中で、『引受けた。』

「言つて勇君を、安心させてやりました。けれどもそれから後の僕の心は、どうしても治りませんので、随分苦しめられて參りました。」

「そりや貴方、それでは餘り眞面目すぎます。」

假令勇さんがそんな事を言はれたにしても、他の者はみんな貴方の事情も知つてゐますし、又道枝は一旦結婚して、こんな運命に落ちた以上、再び新しい無垢な方と結婚出來るなんて事は、考へても居りませんし、それに身には子供を持つてゐるといふ有様で、ごの點から申ししましても問題になりませんから、絶対にそんな事考へたりなごしては居りません。貴方が假令それを本氣にして、世話してやらうと仰有つて下さつても、怖らく御厄介になるとは申しますまいし、又私共もお願ひする譯には參りません。殊に貴方、さういふ立派なお宅のお嬢さんと、既に御婚約なさつてゐられるのですから、何の御心配もいりません。

「どうかこの事や、又勇さんの遺言なんていふ事は、少しもお氣にかけて頂く必要はありませんから、どうぞ御遠慮なく御結婚なさつて下さい。」

道枝もそばから、

「本當に主人があんな事を申しまして、貴方に飛んでもない御迷惑をおかけ致しまして本當に申譯もございません。」

貴方があの時に、あんなにまで仰有つて下さつて、主人の魂を慰めて、安心させて頂けましたので、本當に有りがたかつたご、常に感謝致して居ります。

主人はもう亡つてしまつて、この世にゐるのではございませんし、他の者では貴方が誓つて頂いた事を、誰でも本氣に思つてゐる者など、一人もございませんから、あんな事はあの場限りご、笑つてお流し下さつて、何時までもお氣に止めて頂かないでどうぞ貴方の御理想の道に進んで頂かなければなりません。

どうぞ決してそんな事を、御氣にかけて下さいません様に、それでないご私も本當に心苦しくてなりません。」

正雄も又、

「宮崎さん、そんな事は本當につまらない御心配です。あんな事何ともないではございませんか。あんな場合は、千人が千人、皆貴方の様に言ふのが當り前で、今息を取るといふ魂に逆つて、興奮させて迷はす事は、氣の毒と思へばこそ、當然の言葉です。」

そんな事は他の者がよく承知して居ります、今更そんな事を、御心配して頂く必要は更にございませぬ。」

おみねも口を添へて、

「さうでございますとも、貴方そんな事を何時までも心配して、こんな所まで御相談に来て下さるなんて、貴方様も餘り物堅すぎますわね。ホ、ホ……。」

私共は唯家へ歸つてからも、そんな事考へて見ても居りませぬ。

そんな事は決しておかまひなく、貴方はお許婚の方と御結婚なさつて、どうぞお仕合せになつて下さい。」

皆からさう言はれると、宮崎は如何にも心苦しうに、

「皆様のお言葉は、よく分つて居ります。」

僕も又あの事は軽く扱つて心に止めないで置かうと、随分努めたのですが、冷静になつて深く考へて見ますと、自分の心持の中に、一寸言ひ知れない變な感情が根ざして參りまして、あの事件を、その場限りの事として放つておいて、自分は自分で勝手に結婚する事は、出来ない様な心持が致します。

何故かと申しますと、氣狂ひじみた様なお話ですが、露骨に申し上げますと、一方には理性の力で、僕は純然と規定通りの方針で進んで行つて、差支へないといふ、はつきりとした判断力が働いてゐるかと思へば、又一方にはさういふ道に進む事は、絶対にいけない事で、無條件で道枝さんの將來の保護を、させて頂かねばならぬ様に、運命づけられてゐる様な心持がして、昨年の秋から毎日、さうした精神的の動搖に、絶えず悩まされて參りました。

それがために、随分苦しみましたけれども、三月になりましたと、最早結婚の日が近づいて居りますので、自分の立場を明らかにしなければなりませんから、こんな不可解な心持で結婚する事は、相手の両親なり又、本人を偽る事になるから、一應さうした事情を本人に打明けて、充分了解を得ておいてから結婚しやうと思ひまして、正月

の二日の日にその事情を、本人に打明けたら、その娘は非常に道枝さんの身の上に深く同情して、道枝さんを救つて上げて呉れる様にと言ひ出して承知致しません。

昨日僕は先方へ伺ひましたら、先生から直接婚約の破談をする事についての相談をされ、又勇君と誓つた事を、男らしく實行して、道枝さんを幸福にして上げる様に努力するのが、お前の義務だと懇々と説かれました。

娘もお母さんと二人で、その事について色々考へて話され、破婚した方がお互の爲だらうといふ事になつて、昨日立派に破約して参りました。

「まあそれは、少し先方が分らないのじやないでせうか。

貴方の心が變つたといふ譯ではなく、その場の行が上、さう言ふ事を言つて終つたので、何となく氣にかゝるけれども、秘密にしておくのも心が咎めるから、話だけしておく位の程度でお話になつたのを、本氣になつて取り合つて、折角それまで成り立した結婚を、破談にするなんて法はありません。

事實そんな事を仰有るなら、私達が伺つても、その當時の事情をお話して、圓

満にその御縁談を進めて頂く事に致しませう。」

「いや、別に先方の両親も娘も、僕の心持を疑つたり誤解したりして、さう言はれたのではありません。僕達の心持や將來について、よく考へて呉れたからの事ですから、僕としても却つてその方がよいと思ひます。」

「では一體どうなさると仰有るのですか。」

「どうもこうもありません、相談の上でもうすつかり婚約を破棄して終つて来たのですから、それで向ふの解決はつきりました。」

ですから僕は、運命の命するまゝに従つて、僕は従弟との誓約を守り、失禮ですが道枝さんのお世話をさせて頂かうと存じまして、その御相談に参りましたのです。」

父始め一同は、宮崎のこの意外の言葉に、驚きの眼を睜りました。

「それはいけません、そんな事は出来る問題ではありません。」

「それは貴方の全くの心得違ひです、そんな事出来る事じやない。」

「いや さう言ふ風に仰有るのは御尤もですが、私は充分決心して伺ひました。決していゝ加減な心持で参つたではありません。」

あの當時は變な工合に、心持が二つに別れて迷つてゐましたが、先方とはさうした風の解決がついて終ひましたから、今では幸從弟との誓ひを果すに、忠實であればよいといふ、本當の心持で僕はこちらへ伺つたのです。どうでせう、勇君の遺言を尊重して、道枝さんの將來を、僕に世話させて頂けませんでせうか。」

「そのお言葉は、本當に有りがたうございますが、親として私共は、お願ひする事は出来ません。」

道枝だつて御厄介になるとは申しますまいし、私達としてはそんな無茶な事をし、前途有望な貴方の將來を、葬つて終ふ様な事は絶対に願ひ出来ません。」

「いや、僕はこれによつて不幸になるとも、又犠牲になるとも考へて居りません。」

唯勇敢に運命に委せて、從順に又強く進もうと思ふだけであります。

道枝さん、貴女勇君の最後の言葉を、よく覚えてゐらつしやるでせう。

僕に代つて道枝と、自分の片身に遺る子供の世話を頼むと言つた言葉は、今になつてよく考へて見ると、その場限りの遺言ではなくて、確に勇君の魂は、僕の生命の中にはつきりと住んでゐる様な氣がしてなりません。

それがために僕は、貴女を是が非でも引受けて、幸福にしなければならぬ運命におかれてゐるのですから、この場合僕としては、貴女に承知して頂いて、僕と一緒に生活して頂かなければならぬと思ひます。」

「でも私はもう、唯生きてゐるといふばかりの、見る影もない哀れな、有髪の尼でございませぬもの、決してそんな事は出来ません。」

「それだからこそ言ふのではありませんか、有髪の尼として、見捨てゝおく事が出来ないから、引取り度いと申すのです。」

この際結婚などいふ問題は全然取り除いてお話しするのです。僕は從弟があれ程迄に、熱愛してゐた貴女を残して、永眠した心持に、たまたまなく同情するのです。

又從弟に別れた貴女のお心持と、將來を考へると、お氣の毒で堪らないのです。

それだから若し僕の手で出来る事なら、幸福にして上げ度いと思ふのですが、お互に愛も戀もない者同志が、無意味に結婚して見た處で、お互が不幸なばかりですからそんな事は絶対にしない事にして、第二の條件として僕は貴女に御相談したいと思ふのです。が如何でせう。」

「それはどんな事でございませうか。」

「兎に角勇君にあつて誓つた僕としては、その責任上貴女から生れて来る子供の父とならなければなりません。そのためには勇君との誓ひを果すために、貴女の夫にはならなくとも、子供の父にはなつてやり度いと思ひます。」

そのためには形式上は一度結婚した事にして、實際では兄妹として、一家の中に共同生活をして頂き度いのです。そして生れたらすぐ僕の子として、入籍して育て、行けば、完全に僕の子として自由に育つ事が出来ます。」

それが完全に出来たら、僕の義務は果せる譯だと思ひます。」

「そのお心持は眞に有りがたうございませうけれど、それでは貴方は子供や私の犠牲になつてお終ひになる譯でございませう。」

貴方の様なお若い、これから先世の中に出て、自由に御活動なさらうといふ方を、そんな犠牲にする事は出来ません。」

「いや決して犠牲ではありません、僕に對して天が與へた、最も意義ある生活です、勇君の最も心にかけて居られたのは、子供を育てる事についての心配が、何よりも大

きかつたのですから、子供が生れて立派に僕の子として籍を入れて、順調に育つ様になりましたら、貴女は又他に適當な人があれば結婚なさればよろしいし、僕も又誰か適當な相手を見付けて結婚します。」

戸籍なんかはごうにでも都合がつく事ですから、必要に応じて分ければよろしい。ですから此處二三年の間は、僕も貴女も他の事は一切考へないで、勇君の残された子供を、如何にして幸福に育てたらいかといふ事だけを、考へて行かうと思ひます。皆さん、僕の言ふ事は間違つてゐませうか、又何か無理な所がございませうか？」

「いゝえ、決して間違つてゐる所ではございませう。本當に勿體ない有りがたいお話で、眞の親兄弟でも出来ない程の御厚意に對して、涙がこぼれる程でございませう。」

しかし貴方が折角御親切に、そんなに仰有つて下さいますしても、そんな事は世間の手前も、又貴方のお宅の方々に對しても、申譯なくて出来る事ではございませう。

これは心だけで、本當に貴方の御厚意をお受けしておく方がよいと思ひます。」

と父親が言へば母親も、

「本當にさうでございませぬ、お世辭だけでもそんなに言つて頂けるのは、ごんなに嬉しい事が分りませぬ。今のお若い方で、こんなにまで言つて頂く、義理堅い御親切な人は、三千世界を尋ねてもあるものではございませぬ。」

貴方の御親切は、一生忘れは致しません。」

兄も感謝に満ちた面持で、

「全く宮崎さん、ごういふ事情にしたところが、それまでに決心してお出で下さる事は、並大抵の御心配ではなかつたと思ひます。」

そのお心持は非常に感謝致しますが、貴方にそんなに仰有つて頂けば頂く程、私達の方としては心苦しくて、お願ひする事は出来ませぬ。

道枝の事は勿論ですが、宅もかうしてごうやらこうやらして暮してゐますから、又子供が生まれましても、家の子供同様に、出来るだけは一人前に、教育してやらうと思つてゐますから、これ等の行く末の事は、御心配下さいませぬ、貴方は貴方で、何かして折角お纏りになつてゐた許婚の方ども、もう一度お話を決めてなつて、御結婚なさつて、幸福に暮して頂き度いと思ひます。」

「しかし今更それは出来ませぬ、一旦私も決心して來ました以上、命を賭けてゞも最後のお願ひだけは、御承諾願ひ度いと思つてゐますから、少し禮儀に外れた言葉かも知れませんが、僕の誠意を信じて、道枝さんを妹として、僕に當分の間お世話させて頂く様に、枉げてお願ひ致します。若しこの願ひが聞いて頂けません様なら、僕は何時まででも、此處を去らせて頂く事は出来ませぬ。」

宮崎の此の強い決心と、今は何と言つても動かす事の出来ない態度を見ると、一同は顔を見合わせるのみで、一口の言葉も出ませんでした。

道枝は唯疊に頭をすりつけて、すゝり泣いてゐました。

その翌日道枝は、宮崎と共に我が家を出で、母と嫂の房枝に村はすれまで見送られて參りました。

道で逢ふ村の人達は、皆心安さうに言葉をかけ乍らも、見慣れぬ宮崎を見ると、審しさうに振返つては、眺めて行き過ぎるのでした。

運命

宮崎ごきぬ子との婚約が破れて、行き掛り上宮崎は、無理に道枝の兩親兄弟や道枝を説き伏せて、自分の手許に引き寄せて、純真なる妹として親切に、保護しつつ暮して居りました。

その中四月になると、玉の様な男の子を、道枝は安々と生み落しました。何も事情を知らない産婆は、産衣を着せ乍ら

「まあ お父様そつくりの、可愛らしい坊ちやまでございますよ。」
と言ひました、宮崎は

「僕に似てゐますか。」

「はい、よく似てお出で遊します、ねえお坊ちやま。」

さあ一度お父様に、だつこしてお貰ひなさいませ。」

と言つて着物をきちんと着せると、宮崎の方へ向けて差出しました。

「どれ、抱いて見ようか、やあ目を開けてゐる、可愛らしいもんだなあ。」

「本當にお可愛らしうございませう、坊ちやまも大きくお成りになつたら、御父さんの様に又先生に御成りなさいませわね。」

「アハ、ハ、ハ、坊ちやま先生になるかい。」

と無邪氣に愉快さうに笑つてゐるその姿を見ると、實家から來てゐた道枝の母のおみねも、床の中に寝てゐる道枝と顔を見合せて、思はず微笑みましたが、その笑顔の中の瞳には、何時とはなしに涙の露が光つて居りました。

その翌日春光は、自分の名前の一字を取つて光男と命名して、すぐに自分で出産の届出に行きました、その戸籍面では自分を父とし、道枝を母として、光男は正當なる長男に入籍をすまずと、平然として歸つて參りました。

それから後の春光の生活は、朝夕家にゐる間の半分以上は、光男を膝の上に抱いて遊ばせるのが、無上の幸福の様に見えました。

若し道枝が春光を兄さんとかえ呼ばなかつたら、誰が見ても睦じい夫婦として、出入りの者も羨しがる程の、圓滿な家庭生活が續けられました。

聽て月日に關守なく、半年と過ぎ一年と暮れる中に、光男は段々と大きくなつて、早や一人立ちが出来る様になりました。光男は廻らぬ舌で、春光が學校から歸つて、玄關に入つて来る足音がすると、すぐに喜んで飛んで行つて、

「お父ちゃん お父ちゃん。」

と縫りつきますので、春光も靴を脱ぐとすぐに

「坊や、さあ抱いて上げるよ、おとなしく遊んでゐたかい。」

と言ひ乍ら暫く遊んでからでなければ、二階の自分の書齋へも入らない有様です。

この頃の春光の心持は、眞實の父としての情愛が注がれて、自分の日常生活の中に、光男がなくては、生きてゐられない様な心持がするのです。

さうかと言つても、光男の生みの母である道枝に對しては、言ひ知れない親しみを感じて、今では塵程も心に隔りがなく、その趣味も性質も理解し合つてゐながら、そこには何やら、大きな壁によつて、隔てられてゐる様に、兄妹としてより以上の心持で、親しみ寄るといふ事は、どうしても出来ません。

朝夕下の座敷で、愉快に一緒に睦しく食事をする以外には、餘りに道枝の室へも入

つた事はありませんが、光男が生れてからは、時々二階の自分の部屋へつれて行つて、寢床の中へ入れて抱いて寝せたりしては、泣き出すと仕方なしに、道枝が迎へに来ない中に自分が抱いて下りて行つて、

「お母さんへ行つてお乳を貰つてお出でよ、この泣き蟲坊主。」

と言つて、頭を撫でゝおいて、自分の部屋へ行つて寝て終ひます。

道枝は田舎から雇つてある、やすといふ十五になる子守を相手に、春光の身の廻りの世話や拭掃除、食事の支度などを一通りすまして、春光の出勤を見送つた後は、子供の世話は一切やすに言ひつけて、晝間は近所の娘達に、裁縫や手藝又は生花やお茶お琴などの、遊藝を教へて居りました。

かうして日が立つて従つに、近所の奥さんたちとも交際が深くなつて、お互に往き來する様になり、世間のつき合ひも廣くなりました。

毎日通ふ教子達も、世間の總べての人達も、道枝達の家庭の詳しい内情を知りませんから、親しさに亂れない圓滿な家庭として、皆尊敬して居りました。

× × × × × × ×

かくて二年の月日は事なく過ぎて、櫻咲く彌生の春が参りました。

或る麗かな日の午後、春光は一日の勤めを終へて、光男のにこやか顔を目に浮べ乍ら、足許も軽く歸つて参りますと、二通の招待状が届いて居りました。

その差出人は一つは昔同じ大學の同級生として、長年一緒に親しく學んだ、高岡國彦といふ卒業後學術研究のために、三年間英國に留學して、昨年歸朝した友人からでありました、この高岡は歸朝するに先づ、母校の助教に任命されて、勤めてゐたのでありますが、此の度きぬ子との間に婚約が成立して、四月の十日に加茂川ホテルで結婚の披露をするので、是非臨席して呉れといふのでありました。

もう一通は西森家からで、同じ意味の招待状でありました。

宮崎は豫てからその事は聞いてゐましたから、その日の来る事は豫期して居りましたが、この手紙を見た瞬間、忽ち顔色が蒼ざめて、今日ばかりは光男と遊ぶ氣もしいので、すぐに二階の書齋へ上つて行つて終ひました。

道枝がお茶を入れて、二階へ上つて行つて見ますと、春光は自分で布團を出して床を伸べて、夜着の襟で顔をかくして終つて寝て居ります。道枝は驚いて、

「何處かお加減がお悪うございますか？」
と尋ねました。

「いや、少し頭痛がするので休みましたが、心配する程の事ではありません。」

「お薬を持つて参りませうか？」

「薬などいりません、直きに治れば起きますから。」

道枝は心配し乍ら下へ参りましたが、その心持を察すると、それは皆自分の罪であり、自分に責任のある事だと思ふと、胸を鋭い刃物でえぐられる様に感じて、自分の室に入つて、人知れずすゝり泣くのでした。

夕方になると春光は、何事もなかつた様に元氣な顔をして、二階から下りて来て、光男と遊び乍ら、機嫌よく夕食を撮りました。

その翌日からは又、何時もと少しも變つた様子もなく、平常通りの生活が續きました。十日の日は丁度日曜に當りますので、春光は朝からうちに居りましたので、午前中に床屋へ行つて顔も剃り、お風呂にも入つて、午後からはきぬ子と高岡との結婚披露會に出席するために、モーニングを着て出かける事になりました。

道枝の心盡しで、靴下から、ワイシャツ、カラやネクタイも、皆流行の新しいのに取り換えて、ごんな人にも引けを取らない様に、充分な身支度が出来ました。

今日は折悪しくやすが、昨日在所から母が病氣だと言つて呼びに来たので、行つてまだ歸りませんので、光男を守りして呉れるものがないので、次から次へと悪戯をし、てるのを眺め乍ら、靴も念入りに磨き、帽子もステッキもちやんと揃へて出して、春光が玄關へ出かけるぞ、

「ではどうぞ、お大事に行つてゐらしませ。」

「ありがたう、行つて来ます、餘り遅くならないつもりですが、やすがるから、坊やをよく氣をつけてゐて下さい。」

と言ひ残して、門を出てコッ／＼と遠ざかつて行く後姿を見送ると、道枝はごうしてよいか分らない様な、堪らない悲しさ苦しさ、胸が一杯になつて終ひました。

「あんなに平氣でお出かけになつたけれども、今日のお心持はごんなだらう。」

心では屹度深く／＼苦しんでゐらつしやるにきまつてゐる。

いつも強い事を言つてゐらつしやるけれども、心ではきぬ子さんを、ごんなに深く

愛してゐらつしやる事だらう。そのきぬ子さんが、今日外の方と御結婚なさるのだもの、兄さんのお心の中は、ごんなにかお辛い事だらう。

それのみか、その席へ御招待されて、御祝ひにゐらつしやらなければならぬとは、何といふ世の中は皮肉なものだらう。

高岡さんは御存知ないにしても、西森さんは何も彼もよく御承知のくせに、今日御招待なさるといふのは、餘り冷酷ではないだらうか。

それを又拒みもしないで、眞面目な顔をして御出席になるのは、兄さんの心がどれだけ寛大なのか、又は意志の力がお強いのか、私には一寸想像がつかない。

二年間も一緒に暮してゐても、兄さんの心は一體ごんなのか、分つた様で分らない。男の人といふものは、皆あんなものであらうか。

それとも兄さんだけがあんな性格なのだらうか。

勇さんにもあつた所があつたらうか、いや／＼違ふ、全然性質が違つてゐた。

勇さんは徹底して一つの事を思ふと、傍から見ると、氣狂ひかと思はれる程思ひつめる人だつた。それだから私はあの人に勝てなかつた、完全に負けて終つたのだ、

しかし兄さんの性格は全然私には分らない。

あの方は何事にも徹底出来ない人か知らず、きぬ子さんの結婚が破れて、その翌日私を迎ひに来て下さるなんて、餘程面白い性格である。

あの時のあの眞剣な態度……、私達が承知しなければ、死んでも動かないと言つて坐つてゐらした事など思ふと、矢張り何處までも徹底した様な所もあるし、それから後の生活でもさうだ、本當に私の實家でお誓ひになつた通り、この二年間妹として親切の限りを盡して下さつた。

實の兄さんだとして、あの様に眞心から親切にして下さる事は出来ないだらう。それを思ふと、本當に有りがたい事だ。

光男の事についてもさうだ、勇が言ひ遣したからだとは言へ、又血統を分けた従弟の子供だからとは言へ、眞實の子でない光男を、あんなに親切によくも出来たものだ、誰が見たとして、本當のお父さんと思はぬ人はないだらう。

光男も本當のお父さんと思ひ切つて、私よりもお父さんによくなつてゐる。だけれども、この子が段々大きくなつて、物心がついて來ると、私達の生活を

んな風に見るだらう。それがために折角の幸福が破れて、此の子の心持に、拭ふ事の出来ない、大きな痛手を負はせる様な事はないだらうか。

ではそれかと言つて、一體どうすればいゝのだらう。

兄さんは本當に神の如く、身も心も清らかな、清淨無垢な方で、その前途には大きな希望が輝いてゐらつしやる。

私は身も心も世に有り甲斐のない、有髪の尼同様の身である以上、昔の純潔であつた處女時代を取返す事が出来ない以上、ごうする事も出来ない身の上である。

この上かうして兄さんに頼つてゐて、兄さんの將來の幸福を、根本から破壊する様な事は出来ない。私も今迄は唯、運命に委せて、夢の様に兄さんの親切を受けて來たけれど、これを動機に、一時は兄さんの感情を害しても叱られても、強くなつて兄さんの將來を救ふために、光男を連れて身を引かなければいけない。

二人位の生活なら、何とか自分の力でも出来るだらうし、實家でも面倒を見て下さるだらうから……、早速私はこの家を出る事にしよう。

かうした日が一日でも長く續けば續く程、あの方を不幸にするばかりだ。

本當に私は何時も考へてゐた様に、今度は必ず實行する事にしよう。」
と茶の間へ来て、長火鉢に凭れ乍ら、無心に遊んでゐる光男を見凝めて、さう固く決心すると、唯冷い涙が、膝の上にホロ／＼と、止め度もなく落ちるのでした。

他人の花

ホテルでは今しも、盛装した二百名ばかりの男女の客が、定めの席に着きました、その時後のドアが開いたと思ふと、目覚める様な美しい花嫁姿のきぬ子が、英國仕込みの態度も床しい、髪を七三に美しく分けて、きちんと體に合つたモーニング姿も楚々とした如何にも凜々しい新郎と相並んで出て来て、設けの席に着きますと、仲人の中山僊三氏が立つて、新郎新婦を紹介致しました。
廳で宴も半ばを過ぎる頃になると、招待された全體の客を代表して、二三の人が祝辭を述べ、花婿花嫁の將來の幸福を祈り、兩家の親密と、社會に對して圓滿なる交際の出来る様に祝すると、皆一緒に新夫婦の將來を祝福するため、乾盃しました。それから數々の餘興があつて、一同歡を盡して壽ぎました。

その中に獨り春光は、始終蒼白な顔をして、人々とも餘り口を利かないで、沈み込んで居ります。前からの事情をよく知つてゐる二三の友達は、からかふ様に又真心から同情する様に、

「宮崎君 どうした、元氣を出せよ、君の心持はよく分つてゐるが、此處まで来て終つたのだもの、萬事お終ひじやないか。」

しかしこの席へ君が来て呉れた事は敬意を表するよ。

だが一旦決心して、總べての行動を取つたのだから、今更未練な事を何時までも思はないで、すつかりと氣持よく、高岡に彼女を呉れて終へ。

あんな女なんか、何の未練がある、もう今は他人の花だ。

何處で咲かうが實が成らうが、おかまひなしじやないか。」

「君、そんな大きな聲で、そんな事言つて呉れては困るじやないか。」

僕はそんな事、何にも思つてゐないんだ、又そんな事を思ふ位なら、今日こんな席へ出て来やしないんだ、誤解しないで呉れ給へ。」

「誤解でありやあ結構だよ、是非さうあつて欲しいと願つてゐるんだ。」

そんなら元氣を出して、新郎新婦の將來を祝して、大いに飲もうじやないか。」
「僕も大いに飲まうと思つて來ただけれど、どうも二三日前から、頭痛がするので困つてゐるんだ。」

「矢張り招待状を受取つてからだらう、ちやんと顔に書いてあるよ。」

白狀して終へ、さあ白狀してさつぱりとして、大いに飲むのだよ。

と皆に勧められて、コップに二三杯重ねると、段々のぼせて來て、胸が苦しくなり、眩暈がして倒れさうになりましたので、風の通る廊下へ出やうと席を立つて、見るともなしに花嫁の方を見ると、今迄ちつと俯向いてゐたきぬ子が、少し顔を上げてこちらを眺めたのと、眼がぱつたりと合ひました。

きぬ子はあはて、眼を伏せると、前より一層深くうなだれて終ひました。

それは本當に人の目には立たない程の、瞬時の出來事でありましたが、宮崎にはきぬ子の心持の一切を読み取る事が出來ました。

暫くの間廊下から庭園に出て、冷たい風に當つて、幾分のぼせが治り胸が落着くと、勇氣を出して最後まで、招待された客としての責任を果さうと決心して、又宴席の方

へ行かうと致しますと、向ふから五六人の人達に送られて、花婿と花嫁が出て來たのと、ぱつたりと出會ひました。

宮崎が思はず「はつ」と思ふと、きぬ子もぱつと顔を赤らめました。俯向いたまゝ何氣なく、新郎の後に淑やかに續いて、玄關の方へ出て行きました。

宮崎は新婚旅行に出かけるのだといふ事を悟りましたので、見送りだけしやうと思つて、後から静かについて行きますと、二人はそこに待つてゐた自動車に乗り込みました。心を落着けて宮崎は、自動車の方を見ますと、きぬ子は新郎と竝んで、クツシミンに腰をかけて居りましたが、いよく自動車が動き出すと、きぬ子はつと顔を上げて誰にといふ事もなく頭を下げましたが、その目は宮崎の眞心を射抜く程の力をこめた眞心からの無言の挨拶である事を知らせました。

宮崎は決してその眼の動きを見逃しませんでした。

あの美しいきぬ子の眼は語つてゐた。

「許して下さい、貴方との因縁がなかつたのですわ、お互に幸福な夢を見たゞけでした、今は貴方との夢から淋しくさめて、又外の夢の世界へ參ります。」

これで貴方どの事は、何も彼もお終ひです、貴方は私の行動を咎めないで、どうぞ許して下さい、貴方の心持を將來幸福にするためには、かうなるより仕方がないのですもの、貴方は強く生きて下さい、さうして仕合せになつて下さい。

貴方の御幸福を、私は本當に祈つて居ります。」

あの唇はさう言つて動かなかつたけれども、あの目は完全にさう言つて、最後の暇乞ひをしたのだ。あゝ何も彼もおしまひだ、これで一切が終つたのだ。

今日からはあの人は、心も體も高岡君の所有になつて終つたのだ。

本當に他人の花だつた。何も彼も運命なのだもの、どうなるものか。

僕は潔く思ひ切つて、貴女達二人の幸福を、心から祈ります。

と宮崎は心でさう叫んで、玄關脇に腰掛けたまゝ、何時までもくじつとして動きま

恩 義

家を出て行く時は、早く歸ると言ひ残した春光が、夜の十一時になつてもまだ歸つ

て参りません。

町は段々と人足が杜絶えて、たまに自動車や自転車が通るだけでございます。

光男の寝て終つたあと、しーんとした茶の間の電燈の下に坐つて、道枝は春光が歸れば直ぐにお茶が出る様にきちんと準備をして、婦人公論をじつと読んで居りましたが、次第に時間がたつにつれて、いつとはなしに雑誌から眼を離して、考へることもなしに、色々の事を思ひ耽るのでした。

鐵瓶の湯はちん／＼とたぎつて、盛に湯氣が立つてゐます。

道枝は今日の宴會の様子を想像して、春光の心持を思ひやつたり、晝間濟んだ筈の宴會の歸りが、こんなに晩くなるのは、ごちらへ廻つたのであらうかなど、あらぬ方面まで想像すると、段々色々に空想が擴つて、遂には様々な幻影となつて目の先に現れて参ります。道枝はあはて、それを打ち消しては、

「そんな馬鹿な事があるものか、あんな真面目な方が……。」

とはつきり意識して、我れと我がはしたない妄想を解き乍らも、又後からくど湧いて来る、取り止めもない雑念を、どうする事も出来ませんので、幾度か表まで立ち出

て見ましたが、足音一つも聞えませんが。

又引き返しては、淋しく火鉢の傍に坐るのでした。

私はその方が、どんな考へからどんな事をなさうとも、それに對して彼是と口出の出来る身分ではないのだ。

それを承知してゐながら、何うしてかうした苦しい氣持に悩まされるのであらう。

私の心の奥には、淺間しい嫉妬心が潜んでゐるのではないだらうか。

それにしても私が見えさんの行動に對して、嫉妬心を起さうな道理はないではないか、私はその方に對しては、唯恩義と感謝があるばかりで、戀愛なんてそんな間違つた感情は、塵程も持つてゐない、又有つてはならないのだもの。

それなのに私は、何故こんなに胸が苦しいのだらう、自分の心は一體どうなんだらう。自分で自分の心が少しも分らない。

道枝は心でさう言つて、獨りじつと考へ込んで居りますと、何時とはなしに枕時計は、早や淋しく十二時を指してゐました。

「あゝ、もう十二時。」

と言つて、道枝は時計の方を振り返ると、その時丁度表に自動車の止つた音がしました、するとゴツ／＼と言ふ靴の音が聞えました。

道枝は胸を躍らせ乍ら、急いで、玄關まで出迎へると、宮崎は元氣よく入つて来て、

「おい、道枝さん、運轉手に貳圓一寸拂つて下さい。」

「はい。」とすぐに道枝は引き返して、財布から貳圓出して拂つて、

「どうも御苦勞様でございました。」

「はあ、どうも有りがたうございました。」

と運轉手が歸つて行きますと、道枝は門の潜り戸を閉めて、錠を下して家の中に引返して來ると、宮崎は最早や二階へ上つてゐましたので、すぐに二階に上つて、

「どんなにかお疲れで御座いましたでせう。」

と苦しい心持をこらへ乍ら、無理に微笑んで言ふと、

「心配して下さつただらう、僕はすぐに歸らうと思つただけで、友達に嵯峨の夜櫻を見に行かう、誘はれて嵯峨へ行つて、遊び過ぎてこんなにおそくなつて、御心配かけてすみません。餘り心配かけてもいけないと思つて、途中から自動車に乗つて、

飛ばして来たんですよ。」

「まあさうでございましたの。そんな事はちつとも存じませんから、ごうなさいましたのかと、大分お案じ致して居りましたわ。」

「さうだつたでせう、しかし僕が悪い友達に誘はれて、つまらない所などへ遊びに行つたり、カフェーへ入つたりしてゐると思つて下さらなかつたでせう。」

「まあ、そんな事、少しも思つてゐませんでした。」

「そんならまあいゝ、嵯峨の夜櫻はどてもいゝですよ。一度貴女もつれて行つて上げるといゝと思つた、あゝ、今夜は本當に飲み過ぎて、ひごく酔つ拂つて終つた。」

「それは結構でございましたわ、それなら私も來年はつれて行つて頂きませう。」

「來年？ 來年なんて言ふと鬼が笑ふよ、二三日の中に行つて來よう。坊やをつれて行つて、船に乗せてやつたら、どんなに喜ぶだらう、あゝ、本當によく酔つたもんだ……。坊やはよく寝てゐますかね。」

「はい、よく眠つて居ります。」

「やすはまだ歸つて來ませんか。」

「お母さんが餘程悪いのか、今日はまだ歸りませんでした。」

「こんな話をしながら、春光は服を脱ぎ捨て、和服に着替えました。道枝はそれを一方の方へ片付け乍ら、

「貴方、すぐお寝みになりますか。」

「さあ、今日は少し飲み過ぎて、頭の工合が悪いから、下へ行つておいしいお茶でも飲んで、少し酔をさましてから寝ませう、お湯は沸いてゐますか？」

「はいよく沸いて居ります。」

「それは有難い。」

「と快活に言ふと、道枝と一緒に茶の間へ下りて參りました。道枝が煎茶を入れて勧めるど、如何にもおもしろさうに、三杯もつゞけて飲みました。道枝は何となく、春光の心は腫れ物にでも觸る様で、怖ろしい様な氣が致しましたけれども、ちつともその話に觸れないのも、却つて悪いと思ひましたので、

「今日の御披露は如何でございましたの？」

宮崎は思ひ出した様に、

「あゝ、今日の披露は却々盛大でしたよ。」

きぬ子さんも立派なお嫁さんでした、宴會がすむとすぐ新婚旅行に立つといふので、すぐ自動車で歸つて行かれましたよ。」

「左様でございますか、随分御奇麗でございましたでせう。」

「女は色々な風に飾れば、平常よりはよく見えるものですね。」

「まあ、簡単な事仰有つて、ホホホ、、、きぬ子さんがお美しくおなりになつて、他の方と御結婚なさつたのを御覽になつて、兄さんは何とお思ひになりましたか？」

「何と思ふものですか。今更ごうにもならない事だもの、元々僕には縁がなかつたんだから、唯二人の前途が幸福である様に祈つて上げるばかりですよ。」

「本當に兄さんは、よくそんなお心持になれますこと。外の方ではとても出来ない事でございますわね。」

「でも僕は、これでさつぱりとして、肩の重荷が下りた様に嬉しいんですよ。」

「何故でございますか。」

「さあ何故といつて、説明は出来ませんが、此の二年間といふものは、何とも言ひ様のない氣持が、僕を支配してゐて、二重の責任を自分は負はされてゐる様な氣がしてな
らなかつたのですが、きぬ子さんもあゝして、立派な主人を持つて、將來は幸福に過
すだらうと思ふと、もうあの人に對する責任感、奇麗になくなつて終つたのです。
もう残つた問題は、自分達だけの事を解決すればいいのです、ねえ道枝さん。」

春光にさう言はれると、道枝は急に顔を曇らせて、

「その事で今日一日考へまして、漸く決心がつかれましたから、貴方がお歸りになりま
したら、お願ひしてみようと思つて、お待ちして居りました。」

「何を一日中もかゝつて考へたのです、改まつて何を願はうつて言ふのです。」

「それは外ではございませんが……、兄さん、こんな事申上げて、お叱りにならない
で下さいませ。」

「何も叱つたりなんかしません、何の事ですか。」

「外ではございませんが、私達は長い間、貴方のお情に縋つて、お世話して頂いて
來ましたけれども、かうして何時までも、貴方のおそばで、御厄介になつてゐますと

貴方の御出世の妨げになりますから、丁度こんな時を動機に、私は坊やと一緒に何處かへ別居させて頂き度いと思ひます。」

宮崎はそれを聞くと吃驚して、目の色まで變へて、

「別居するんですつて？ 貴女がさうして僕から離れて行つて、どうしやうといふのですか？」

「只今ではその事まで考へて居りませんが、一生懸命努力しましたら、光男と二人の生活位は、出来ようかと思ひます。」

若しそれが出来なければ、實家でも多少の世話はして呉れるだらうと思ひます。」

「すると僕はどうなるだらうね、此の先は。」

「兄さんは何處からか理想のお嫁さんをお貰ひになつて、幸福に暮して頂き度うございますわ。私兄さんの今日までの御厚意に酬ゆるために、きぬ子さんよりも、もつとお美しい立派な方を探して上げようと思ひます。」

「貴女は何といふつまらない、馬鹿な事を考へてゐるんです、そんな事を言つてゐるより今夜は少し真劍になつて、お互の將來の事を定めようじやありませんか。」

「でも私には、何度考へ直して見ても、それより外に道はないと思ひます。」

かうして一日でも長く御厄介になつてゐれば、それだけ貴方を餘計に御不幸にするばかりですもの。」

「誰が不幸になりました、貴女と一緒にゐる様になつてから、一日でも不幸だと思つた日なんかありませんでした、いつも幸福に暮して来たではありませんか。」

「でもこれから先を、御不幸にしてはなりませんから……。」

「その事を言ふんですよ、これから先を不幸にするのも、今迄よりも幸福にするのも、貴女の心一つではないか……。」

「でも私には、そんな力はございません。」

「そんな事言はないで、貴女はこの機會に、僕と結婚して呉れないの？」

尤もそれは外の事とは違ふから、強制的に言ふわけでは決してないんだが……。」

かうして不思議な因縁から、こんな生活を二年も續けてゐる間に、貴女は僕の性質も人柄も、残りなく知つて呉れたらうと思ふ。

僕も貴女を充分に知る事が出来ました。僕はかういふ變な人間で、見る通りですけ

れども、これ以上に我儘も道楽も何もないのです。

貴女がこんな人間は信頼が出来ないと思ふなら、是非もない事だけれども、従弟も臨終の際にあれ程頼んで、僕が承知しなければ、僕の魂に住んで、貴女と子供を守ると言ひました。

その真剣な心持に感激して、僕は今迄貴女の世話を、自分から進んでさせて貰ふ事になつて、折角婚約までしてあつた人までも、人に奪はれて終つたけれども、僕は決してそんな事を、口惜しいとも何とも思つては居りません。坊やも生れない前から、自分の子供だと思つてゐたのですから、今でも決して他人の子だとは思つてゐません。貴女に對しても始めは、先に言つた通り、愛もなにもなかつたのです、唯お氣の毒なごいふ同情と、従弟に對する誓ひを果すために、自分から進んで、迎へに行つて来て来て頂いたのです。

こうして段々と一緒にゐて頂くうちに、本當の妹に對する様な親しみを感じて居りましたが、それが又段々日がたつに従つて、さうした感情より深い心持が、僕の心の奥に芽生えて来た事を、僕はずつと前からよく感じて居りました。

けれどもそれは僕の立場から、或る時期が来るまでは、絶対にそこまで進んではならないと思つて、自制して居りましたが、丁度その時が来て、きぬ子さんの方の解決もつきましたし、貴女からもさうした言葉が出ましたから、これを動機に僕は貴女に本當の心持を打明けてみやうと思ふのですが、ごんな風に話してよいものか、僕には一寸分らないのですがね。

尤もこれは僕がさう思ふから、貴女にも同意して下さいといふものではありません。今日までの行き掛りで、義理や人情や意地といふ様なものゝために、止むを得ず同意して下さいといふ様な事では、貴女も僕も將來不幸だから、そんなものは取り除いて、本當に信頼出来ると思つて下さつたら、僕の申出に同意して下さい。

貴女はこれに就てごういふ風に考へて下さるんですか、遠慮なく言つて見て下さい。道枝はそれを聞くと、思はず涙をホロ／＼と膝に落したのみで、何とも答へません。宮崎は堪り兼ねて、

「道枝さん、僕の言ふ事が間違つてゐましたら、間違つてゐると言つて下さい。貴女に、そんな意志のないものを、無理に同意して下さいといふのではありません

外の問題と違ひます。貴女の心持を充分伺つておいて、此の際お互に、將來間違ひのない道を進み度いと思ひます。僕の申上げる事が、貴女にお分りになりませんか。僕の氣持ちが分つて頂けないのですか。」

道枝は涙にうるんだ眼を上げて、怖れる様に又遠慮する様に、又恥ぢらふ様な腫で宮崎の顔をちらと眺めて、

「貴方の仰有つて下さる事も、お心持もよく分ります。」

本當に勿體ないと思ひますわ、けれども私にはそんな事は、お願ひ出来ない様に思ひますの。」

「さうですか。貴女は同意が出来ないといふのですね、貴女の本當の心持がさうであれば、僕はこれ以上進んで申上げません。けれども今まで僕は、貴女は必ず同意して下さいるものと、信じ切つてゐたんですが……。」

「私その貴方の御厚意は、有りがたくも又勿體なくも思ひますけれども、幾らそんなに仰有つて頂いても、私それに同意させて頂いては、あまりにも無責任に思ひますもの。」

「それはごういふ意味でせうか。」

「私には全然その資格がないので御座居ますもの。」

貴方はまだ一度も奥さんをお迎へになつた事もない、純真な清浄な方でございますから、ごんな方ごでも御自由に御結婚が出来て、前途は希望に幸福に輝いてお出でになりますのに、私は何も彼も一切を失つた、有髪の尼の様な女でございます。

私が此の世に生きてゐる意義は、唯々光男の母としての責任のために、あらゆる力を盡して行くのが、本當の使命と思つて、一切を観念して居りますから、それに貴方……。」

と言ひ續けようとする、その言葉を押へる様に、

「道枝さん、その先は言はないで下さい、貴女の心持はよく分つてゐます。」

貴女がそんな事を心配して、僕と一緒に暮らす事を悩んでゐるなら、かういふ事に約束しませう。

勇君が亡くなる時に言つた通り、僕は今から總べての身も心も、勇君に貸し與へて眞實の勇となり、貴女も昔の道枝さんに還つて、過去の事は、一切忘れて終ひ、新し

理想に生きようではありませんか。

さうすれば死んだ勇君の法名を唱へて、泣く必要も供養する必要もありません。

勇君が現在生きてゐて、光男も二人の間に出来た子と思へば、それでよいではないですか。僕は義理や恩義から貴女に、そんな事を言ふのではありません。

此の頃では本當に本心から、勇君と同じ様な心持で、貴女を愛してゐます。きつと僕は貴女をも光男をも、將來幸福にする事が出来るといふ事を、誓ひ得るのです。」

さう言つた時、寢床にすや／＼と眠つてゐた光男が、むつくりと起上つて、

「母ちゃん、母ちゃん。」

と呼びました。

道枝がすぐに立ちかけると、

「よし僕が行つてつれて来る。」

と言つて立ち上ると、つか／＼と道枝の部屋へ入つて、

「坊や、お目々をさましたの？ お父ちゃんが抱いてやる、さあお出でおいで。」

と言つて、抱き上げると、光男は眼をくり／＼し乍ら、喜んで抱かれて出て参りました。

た。春光はそれを抱いて、火鉢の向ふに坐り乍ら、まる／＼と肥つた頬べつたに口づけして、

「坊やはいゝ子だね、何處へも行くのではないよ。」

何時までもこゝにゐるのだよ、お父ちゃんの大事の坊やだから……。」

と言ひ乍ら、あやしてゐる姿を見ると、道枝はたまらなくなつて、

「本當にさうなつて頂けたら、坊やも私もどんなに救はれるか知れませんか。」

故郷の父も母も兄弟たちも、どんなに喜んで呉れるか分らないのですけれど……。」

「そんなら問題はないじやないか、誰一人反對する人もなく、喜んで下さるのならそんな結構な事はないじやないですか。」

事實さうなれば、亡くなつた勇君も、どんなに喜ぶか分らない。いやさうではない、僕が勇君になつて生きるのだつた。それなら貴女も、これ以上言ひ分はないでせう。」

と言つて、光男の頬べたをつゝき乍ら、少女の様に首から耳の邊りまで、眞赤になつてゐる春光の横顔を見ると、何處ごなしに心のせいにか、本當にそれが勇の姿に見える様な氣が致しまして、一入の懐しさど又勿體なさを感じました。

餘り有りがたい様な、勿體ない様な、冥加に盡きる様な、様々な感情のために、又言ひ様の無い涙がこみ上げて来て、道枝は思はずわつと大聲を上げて、疊の上に泣き伏し、いつまでもくぐり泣いて居りました。

時計は静かに午前二時を報じました。

光男は春光の手に抱かれたまゝ、何時の間にかすやくと寢入つて終ひました。

教へ草

それから二年後の春光は、京都の中學の教授を止めて、家族と共に名古屋へ移りました。豫て久しい間理想を立てゝゐた、女學校を経営したいといふ望みが叶つて、春光の父や道枝の實家からの後援に依つて、相當の資金も提供されたので、名古屋市の東端の閑靜な土地に、校舎を建築して、名稱も聖華高等女學校と認可を受けて、四月開校致しました。

それまでの宮崎の生活は、最も眞面目なる公僕として盡す様な氣持で、義務責任に生きて行き、又道枝は學生時代に學んだ學科の實地研究と、趣味半分に生きて參りましたが、愈々自分達の事業として、一切の責任を以て開校して、教へ子達を預つて見ますと、益々その責任の重大な事が、骨身に答へる程深く感じました。

自分達の方針一つで、此の春の若緑の様な、純眞な乙女達を、善惡何れへ向つても、要素を伸ばすのである、又自分達の學力人格の強弱によつて、總べてが教へ子の心身の發達に影響すると思ひますと、彌が上にも緊張せずには居られません。

今迄の様に唯家庭の幸福のみに、浸つてゐる譯には參りませんので、既に教育上必要な方面に向つて、知徳常識を得るために、間斷なく活動を續けて行かなければなりません。多少學校の存在が認められて、生徒の募集に困難を感じなくなりまして、第二の計畫に移つて、學校の特徴を作り、その實力を生徒に得しめ様と思ひますと、職員にも實力人格共に、優れた人を得なければなりませんので、さうした方面にも力を盡さなければなりませんから、却々一時間として、私事に心身を勞してゐるといふ様な暇はなくなりました。

それだけに、自分達の事業としての骨折であるだけに、人知れない樂しみもございますが、春光は以前は淡白な天性を持つ、中學生を扱つて居りましたゝめ、さうし

た方面には相當経験を有して居りますが、自分が校長となつて、女生徒を取扱つた経験は、始めてあり、職員の過半数は女子でありますために、その性格は男子とは全く正反對で、それまでは夢にも想像しなかつた様な、様々の女子特有な體質性格感情又、學業に對する長所短所等を、實際に知るにつれて、非常な驚きと又、深い興味が湧いて參りました。道枝は又學生時代に想像してゐた、それと實際の教育とは、大變な隔りのある事を始めて知りました。

道枝は自分が女學校時代も専門學校時代にも、教育といふものゝ姿を、非常に簡單に見て居りまして、女學校の先生位、氣樂で面白い職業はないと思ひました。

第一勤務時間は、僅か一日に五時間か六時間だし、日曜や祭日はお休みになるし、冬休みや學年末の休みも有り、又夏休みには相當に長い期間休暇があつて、それだけの間、自由な行動が取つて休めるし、比較的手當ては多く、仕事が上品であるために、衣服等も痛まず、そして毎日天真爛漫として、元氣溢れる少女達に對して、自分が既に習ひ覺えた事だけを、形式を辿つて、教へてさえ行けば、今日まで何も知らなかつた生徒達が、自分の指導によつて物知りになつて行く、知識が伸びる、情操が發達す

る、毎日さうした教へ草の花園に、朝から晩まで楽しく生活して行けるのだ。

世の中に先生程意義あり仕合せな、生き甲斐のある生活は、あるまいと思つてゐました、それがために自分の一身を、獨立で生活を立てる場合は、何處かの先生になつて、力一杯働いて、その働きに生きようと思つてゐました。

幸ひ自分が中等教員の免許状を下附されてゐる事から、さういふ風に考へるのは、自然の成行きであつたのでございます。

それが現在自分の事業として、自由に特徴を發揮して行ける立場であれば、法規に反しない限り、社會人類のため、教へ子の將來のために、必ず必要であり幸福であると思ふ正義道徳を中心とする教育であれば、假令他の一般學校とは内容を異にして、自由な立場にあるのだから、眞剣で努力すれば、必ずそれだけの効果は、忽ち生徒に現はれ、又社會に輝くものと信じ切つてゐました。

結婚後三四年間は、成す事もなく幸福に、光男の下に政敏、治子の二人をもうけて唯夢の様に空しく過して來た道枝も、此處で始めて自分の眞の甦生の使命を發見したといふ喜びのために、非常な決心と覺悟を以て、着手したのでございますが、實際に

その仕事に當つて見ますと、學生時代に自分が想像した様な事とは、まるで違つて思ひもよらない困難が、教育事業にはあるといふ事を發見して驚いたのでございます。

先づその一例は、同じ年齢で同じ様な恰好をして入學した生徒が、表面から見ると少しも變つてゐない様でございまして、いざ實際に教育しやうとなりまして、能力も性格も、全く十人が十人別々に變つて居りまして、氣の短いのもあれば又、極度に呑氣なものもあり、粗忽なものもあれば丁寧過ぎるものもございまして。

清潔を好む者もあればだらしない者もあり、又學科につきましても、體操を好むもの嫌ふもの、音樂繪畫手工裁縫等を始め、それ／＼の學科に好き嫌ひがありまして、そのために眞剣で教へても、進む生徒と進まぬ生徒とが出来て、大變な差を生じます。何學科にしましても、その學科の得意な生徒は、ぐん／＼成績が上りますから、従つて先生をも一層よく慕ひ、教授にも力が入り徹底致しますが、その反對に得意でない者は、先生がどれ位眞剣で教へても、生徒が眞剣になりませんために、少しも成績が上りません。

さういふ風で、何事をするのにも、總べての生徒が舉つて賛成して、ぐん／＼順調

に進むといふ様な事は、先づないのでございます。

かうした性格趣味感情能力といふ様なものゝ差別が、色々な形になつて表れて、どれ程公平な先生でも、多少は非難を受けたり、時には先生の人格問題迄も引き起す様な、蔭口も利くといふ様な事があること、又職員の中にはたまには、自分の趣味感情等のために、實際に生徒の取扱ひや、指導法が傾く事があつたりして、教育的効果を理想的に舉げて行く事が、出来ない様な人も折々はあります。

又生徒の家庭の父母の教育、身分、性格等が、生徒に及ぼす影響も、實に大きいものであるに加へて、一般社會の人々の實際生活は、學校で行ふ教育とは、正反對で學校で親切、正直正義を説いて教へても、實際の社會の大方が、正義と正直では通つて行かれない場合が多く、要領よく渡らうと思へば、大抵の事は外觀は形式だけで胡麻化して嘘八百で行かなければ、正直者は馬鹿を見る場合が大變に多いのでございます。正義や道徳を重んじて居れば、人に出し抜かれて終つて、一生頭が上らないといふ様な始末で、

「情に棹さしや、流れて終ふ、……理窟で行けば角が立つ。」

といふ言葉の通り、世の中は本當に、どうして渡つてよいのか分りません。

學校は實際の社會へ出るための、準備である以上、世の中へ出てから一向役に立たない様な教育なら、骨を折つて教へて見た所で、又習つて見た所で、骨折り甲斐のない事でございます。教育といふ以上、何處までも實際の世に役立つ人間を、作らなければならぬと思へば、唯理窟や形式や空想で机上の研究だけでは何にもなりません。さうなつて來ますと、實際の責任者は大變です。

思つたより難かしい困難だからと言つて、途中で止める譯には行かないし、進むのにはそれだけの、充實した力を備へなければなりません。

それがために春光も道枝も、始めて實際の教育に目が覺めて、更にもとへ歸つて、自己の體驗を以て、總べての事柄を研究しなければならなくなりました。

道枝はこの實際の社會の體驗を得るために、三人の我が子を乳母に托し、春光の許しを受けて、人知れず全國の各地を廻つて、その土地の人情風俗を研究し乍ら、あらゆる階級の家庭の内容を探るために、或時は女中となり乳母となり、家庭教師として住み込み、又或時は製絲工場紡績會社の従業員とも變装し、又舎監や舎母に入社して

あらゆる立場に入つて研究し、短くとも一週間長ければ一箇月餘りもその階級の人々と働きつゝ、その職業から得る體驗と、又それに従事する人々の感情思想能力の程度又その仕事より受ける心身の勞苦を知り、又あらゆる商店における、商賣上の取引、商品に對する、取扱上の秘密、中流上流の家庭における生活の状態や思想等、残る方なく實際に研究するために、三年間の月日を費しました。

尤もその都度、我が家へは絶えず歸つて、家事を見たり又教室へも出て、生徒の教育にも當り家庭の主婦として又子供の母としての務めも出來得る限り果しました。

かうして三年の苦心空しからず、漸く道枝が、社會の實際生活のあらましの状態を研究して、我が家庭とその學校に落着いた時に、道枝が我が校の將來の教育方針の神髓として、迷なく大磐石の如く、その進むべき方針として、摺んで歸り打込んだ柱は正義と眞心、これを人間生活の根本として、最も正しい明るく清き、強い大きな魂を作り、肉體を強く鍛へ、それを土臺として知能を積む事、これが眞の教育であり、人生の輝きである。眞心と正義を武器として進む社會に、向ふ所敵なし、眞心は人間生活の王者であつて、正義は最後の勝利者である、といふ事を、はつきりとその魂の

神髓に受け入れて歸りました。

これによつて學校の教育方針は、始めて改革され、職員も立派に正しく組織が出来て、道枝の理想の教諭を迎へて、理想教育の第一歩を踏み出しました。

しかし歐洲大戰の好況のため、その影響を受けて、俄かに成金風に陶醉した一般社會の人心は、極度に浮かれて、奢侈に又贅澤に流れ、一切が利己主義に陥り、金力萬能主義に溺れて、眞心は麻痺して終つて、三千年此の方根強く、植え付けられて來た宗教までも、唯一遍の職業的形式化されて、眞の信仰の力は、灰色の雲に被ひ隠された太陽の如く月の如く、光が弱く薄くなつて、ごちらを見廻しても、大方は神も佛も見返られて居りません。

山にゐて山を知らず、海にゐて海を知らず、子と生れて親を知らず、人間としてその心身の一切の生みの御親である、全知全能の神佛の存在さえ知らず、そのために心はたゞ、現實の肉眼に映る、物質慾と愛慾のために、心が迷つて終つて、血眼になつて、争闘を續けて居ります。

信仰の信念もなければ、従つて感謝報恩の生活も、出来る道理はありません。

機械文明は次から次へと發展して、自然と幸福を破壊して世の中は矢鱈に忙しく、慌しく突端を行き、突端を走る。

外來思想は善惡の區別なく、太平洋日本海を渡つて、押し寄せて來る。

過激なる思想は全世界に渦巻いてゐる。

世の中はまるで思想と經濟の、大混亂な時代に於て、眞劍で正義や人類愛を振りかざして、聲高らかに叫んで見ても、振返つて見る人は、馬鹿と嘲笑ひ、時代おくれと罵つて行く、賣名だ偽善だと非難して、大概の者は相手にしないばかりか、善道の叫び等は極度に憎んで、撲滅しようとして強硬な迫害を試みる……。

これが現在の社會相である。

正義は岸へ岸へと押寄せられて、時代の潮流のみが蕩々として流れてゐる。その瀬に逆つて、最後の目的にまで押切つて行かうとしても、大勢の力で押流して行く。

かゝる世相に臨んでは金力で惡も通れば不正も通る正義の光は黒雲で覆はれてゐます。かゝる世に人間の力では、この念願を達し得ない事を觀念すると、始めて道技はこゝに判然と悟る事が出來て、全知全能の神佛のみ胸にかへり、その一切の靈肉を、

神と社會人類に捧げて、將來の眞使命を果すために、教育方針及び組織を立直して、その教育の道を信仰の門に求めて、進んで参りました。

道枝は最早や入學者の多少や、世間の風評や人氣は一切問題にせず、一生の間に假令五人、否三人でも、又一人でもよいから、眞實の日本婦人として、完全なる資格を備へた母性を造り上げて行く事、それが眞の使命である事を、悟つて進んで参りました。道枝がかうして、思ひ切つた活動を、自由自在にする事の出来るのは、春光が海の如く、深く廣い愛を持つて、その心を抱擁し指導して、宛ら幼兒が母の懷に抱かれて、搖籃の歌を聞く様な、大きな力が陰に陽に、道枝の心を慰さめ勵まして、絶えず力を注いでゐるからである事は言ふまでもありません。

大正六年の三月、道枝の實家の兄の長女の好枝が、小學校を終ると女學校へ入るために、叔母である道枝の家へ預けられる事になりました。

實家では叔父叔母の經營する、學校でよいと言ひましたが、それでは餘り肉親の心安さのために、緊張味が缺けて、しつかりした教育が、出来ない様ではいけないからといふので、相談の上縣立の高等女學校へ入學させて、叔母の家から通學する事にな

りました。そして好枝は晝は嚴格な學校へ、朝夕は叔母の家に寄宿生と同様の生活をして、天真爛漫とした生活の中に、四年間無事に學び終えて、大正十年の三月目出度く卒業を致しました。そして道枝の計らひで、それから又東京の専門學校へ入學して専ら家事科を學ぶ事になりました。

それは別に將來先生になるといふためでも又、その學問で獨立するといふ様な目的でもなく、相當の年齢に達し、心身も常識も、一人前の婦人として、充分に備るまで修養させ、結婚して後の幸福を得しめ度いといふ考へからでありました。

かくして好枝は、總べての人から、天使の如く愛され慈しまれて、何不自由なく、不幸といふものゝ名も姿も知らず、何時も世の中を、十五夜の月を見る如くに明るく又清らかな美しい圓やかなものだと思ひ切つて、幸福に満ち溢れて、只管學びの道を修めて居りました。世の中の反面を知らず、唯自分の純眞な心から満ちて来る、眞珠の様な眼から眺めると、隅田川の水の流れ、上野向島の春の櫻、龜戸の藤、目に觸れるものゝ總べてが皆美しい姿に映り、自分の日日接してゐる總べての人は、皆幸福に満ち溢れてゐる様に思へるのでした。

夏 休 み

平和な大正十二年も早や半ば過ぎて、七月の半ばからは都會の學生が、ぼつくと暑中休暇を利用して、山へ海へと出かけます。

好枝も七月末に田舎の實家へ歸つて、青葉茂る下蔭の、冷い山水に足を浸し、咽喉をうるほして、心ゆくまで蟬の鳴聲を聞き乍ら、楽しい夏休みを過して居りましたが八月の末には再び學校へ歸る事になつてゐましたので、名古屋の叔母の家へ寄つて行くために、八月の廿八日に母の房枝に送られて家を出ました。

房枝は好枝を道枝の家まで送つて來るのには、それだけの理由がありました。

聖華高等女學校に入學してゐる、三年生に河村さき子の母のときゑは、豫てからその性格理想等の總べてが、道枝と相通する所から、何時の間にか姉妹同様の親密さに近づいて、その家庭に絶えず往き來してゐるといふ關係から、好枝の事もよく知つてゐるので、何時の頃か雑談の中に、好枝の結婚問題が持ち出されて

「私今度稻澤の、山田さんといふお宅から、是非一人適當なお嫁さんを、世話して

呉れと頼まれましたが、先生適當なお方はないでせうか。」

「さあ、幾らでもある事はあるでせうけれど、そのお宅にびつたり合ふといふ、丁度適當な條件の備つた方といふのは、却々ないものでございますよ。」

「さうでございますわね。幾らでも世間には有り餘つてゐる様に見えても、さあと言つて探すと、却々ありませんものですね。」

「どこのおうちにでも夫々、その家庭に向く様な理想・條件といふものがございますから、千人候補者を擧げて見ても、これならといふのは、見付からないものでございますわね。」

「本當にさうでございますわ……私頼まれましたけれど、困つて居りますの……。」

「その山田さんと仰有るのは、どういふ様なお宅でございますの？」

「商賣は何もなく、全くの無職で、氣樂なお宅でございます。」

「それでは何によつて御生活なさつてゐらつしやいますの？」

「そのお宅は、最早や五十代も前から續いてゐるおうちで、代々系圖の正しい家だものですから、相當に田地や宅地を持つて居られました、小作をさせてゐらつしやいま

すが、今の御主人は、山田昭博と仰有いますが、その方は大變な學者でございませうが、お若い頃から官吏になつて、方々日本中の縣廳にお勤めになつて居られましたか、今ではお止めになつて、御自由な生活をなさつてゐらつしやいます。

さういふ方ですから、大變お金を持つてゐらして、公債とか株とかと相當おありになるし、恩給も澤山取つて居られます。

毎日遊んでゐらしても、樂にやつて行けるお宅でございませうか。

「それではもうお役所はお止めになつて、お宅にゐらつしやるのでございませうね。」

「はい、まだつい一昨年お止めになつて、今のお宅へお歸りになりました。」

それまでは留守居をおいて、ゐらつしやつたのですが、お歸りになつてから、すっかりおうちの造作もなつたり、御庭のお手入れも立派になつて、高尚なお宅でございませう。それに奥様は昔から評判のしつかりしたお方でございませうから、御家庭は一寸他では見られない程上品でいらつしやいます。

「左様でございませうか、お年はお幾つ位の方でございませうか？」

「さうですね。たしかな事は存じませんが、御主人は六十越してゐらつしやいます。」

が、奥様は五十にはまだなつてゐらつしやらないかと思ひます。

お美しい方ですから、まだ四十前位にお見受けする事もあります。」

「さうでございませう、それではお嫁さんをお貰ひになるごいふ御子息は、御長男でゐらつしやいますの？」

「はい、御長男でございまして、今東京の慶應大學にお出でになります。」

來年の三月御卒業になると、すぐにお勤めになる所も、御交際が廣く色々手蔓がお有りになるので、ちやんと定めてお有りになります。

それで御卒業祝ひと一緒に、お嫁さんを貰つて身を固めさせておかないと、會社の方で信用がないからと仰有つて、随分と方々へ頼んでお出でになります。

私もあのお宅のお嬢さんを、一年程教へさせて頂いた事があるものでございませうか、よく奥さんも宅へお越しになりましたし、私も山田さんの所へお伺ひした事も、

二三次ございませうので、大方の事情は存じて居ります。」

「左様でございませうか、御子様はお二人でゐらつしやいますか。」

「いゝえ、お兄さんは俊夫さんと仰有つて、二十六におなりになりますか、その次は

和子さんと仰有つて、二十四のお嬢さんがありますが、その方は三年程前に鳴海の黒瀬醫院といふ、お医者様の所へお嫁入りになつて、もうお嬢さんがお一人お出来になりました。その次が幸夫さんと仰有る方で、今年の三月第一高等學校を卒業なさいまして、帝大の理科へお入りになりましたが、俊夫さんも大變頭が優れてゐらつしやいますが、弟さんの方はもつとおよろしくて一高時代もずつと一、二番で通してゐらつしやいましたさうでございます。

「まあ、それは皆お揃ひでお出来がよろしくて、何よりお仕合せでございますわね。お兄様の方は何科でゐらつしやいますの？」

「商科ださうでございます。」

「さうでございますか、それで會社の方へお入りになるのでございますね。」

「さうなのでございますよ。お兄さんの方は、お父さんや弟さんとは性質が違つて、如才ない社交的と申しますか、まあ實業的の柔かい様な、又才智に長けた様な方でございます。」

脊丈もすらりとして大きいし、何處となく男らしい中に、上品な所があつて、風采

なごも人並より、すつと優れて立派な方で、誰にでも好かれる型の人でございます。」

「さうでございますかそんなにお立派な方でゐらつしやいますか、そんな方でしたら私も心當りがございましたら、又お探しておきませう。」

「本當に御願ひいたします、それにつきまして私、こんな事申上げて失禮かも分りませんけれども、實はお宅のお嬢様……、あの東京の學校へ行つてお出でになります好枝さんを、若しかしたら上げて頂けないかと思ひましたのでございますが……。」

「あの好枝をでございますか。」

「はい、實は私十日ばかり前に、山田さんの奥さんにお目にかゝりましたら、何處かにないか〜と仰有るものでございますから、色々考へました末、ふと好枝さんの事が心に浮びましたので、若しかと思ひましてこれ〜の方があると申しました。」

そしたら一度寫眞が見度いと仰有るものですから、冬休みにお歸りになつた時に、頂いておきましたのをお目にかかけましたら、奥さんが大變お氣に入つて、私はかういふ顔立ちの人が好きだ。如何にも眼がぱつちりとしてゐて可愛い人だと仰有つて、是非一度御主人にも見せたいからと仰有つて、持つてお歸りになりましたが、一昨日

又お出でになつて、息子さんにもお見せなさいましたら、大變お氣に召した様で、若し頂ける様な事にならぬとも限らぬから、一度お話しして見て呉れど、餘り熱心に仰有るものですから、まあ兎に角お尋ねだけして見ませうと御約束しましたので、今日お伺ひ致した様なわけでございますの。」

「まあそんなでございませぬ。」

「私ちつとも存じませぬものですから……。」

河村夫人は、風呂敷包の中から、可成り大版の寫眞を出して、

「これが向ふの息子さんのお寫眞でございます。御覽下さいませ。」

と手渡されたのを開いて見ると、大學の制服制帽をつけた、面長な鼻筋の通つた眉毛のきりつとした聰明さうな學生の寫眞でございました。

「却々立派なお方でございますね。」

と道枝はちつと全體を見凝めて居りました。

「先生、如何でございませぬ、一寸立派な方でございませうか？」

お實家の方とよく御相談願へませんでございませうか、私には是非共ごいふ位の意

氣込みで來たのでございますが……。」

「ありがたうございます。」

あの子も來年は廿歳になりますから、もうそろ／＼何處かへ貰つて頂かなければならない年頃でございませぬけれども、本人もまだそんな事、てんで考へて居りませんで子供らしい氣分でございませぬし、實家でも卒業したら、お前の學校でも當分手傳はせて、その中に適當な所があつたら、嫁がせて呉れてもよし、よい人があつたら姉嬢だから、養子を取つて分家させてもよいと言つて居ります。

さうなれば相當の分け前もやると言つて、大した事はありませぬけれども、壹萬圓位はつけてございませぬ。それで必ずお嫁にやり度いといふでもなし、又強つて養子を取らなければならぬといふ理由もございませぬから、ごちらでも本人の希望に委せて、將來幸福に暮させる事が出来れば、それでいゝのださうでございませぬ。

主人に一度話しまして、よく相談致しました上で、實家へも相談する事に致しませう、その返事によつて、貴女の方へ御返事させて頂きます。」

「はい、どうぞお願い致します、頂けるか頂けないか分りませんが、何も御因縁でこ

「ございますからね。」

「さうでございます、何處にどんな因縁が結ばれてゐるか分りませんから……、御因縁のあるものなら、ごんな事申しましたつて、貰つて頂かなければならない事になりませんからね。」

「本當にさうでございますよ、それでは此寫眞を、當分お預け致しておきませうか。」

「それでは暫くの間、拜借致してよろしうございませうか。」

さうした二人の話があつて後、道枝は春光にその話を致しますと、春光は

「それなら一應先方の家庭の様子や、血統や信用や資産、息子の品行とか成績などよく調べて見て、大丈夫と思つたら三河の方へ相談する事にしやう。」

と言つて、暇々に調べて見ますと、河村夫人の言葉と一つも違つた所はなく、資産は不動産の總べてを集めて、拾萬圓餘り所有してゐるといふ事も分りました。

妹娘の縁家も相當の資産のある醫者で、圓滿に治つて居り、弟も却々出來がよい事も分りましたし、本人は品行も治まり、成績もよく親孝行な申分のない青年である事も、はつきりと分りました。

お母さんは若い時から、才智の優れた夫人で、到る所で婦人會の會長や幹事などを務めて間に合ふ人で、今では表向きに活動はしてゐないけれども、婦人會の顧問や相談役をして、相當に信用のある事も分りました。唯一つの缺點としては、本人の俊夫が酒や煙草を嗜むといふ事で、これは春光よりも道枝の方が、それを聞いて

「それは面白くありません、酒や煙草は、生活の必需品ではありません。害のみ多くて、一つも益のないものですから、酒や煙草を好む人は、全然問題にしない方がよろしい。」

と申しました。春光はこれに對して、

「それは、他の職業の者にはなくてもかまはないものだけれども、實業界の方で活動するものは、交際上どうしても酒も煙草も好でなければ、成功して行けないさうだ。

だからその息子も、初めの中は酒も煙草も嫌ひだつたさうだが、將來のためだと言つて、クラスの學友達に勧められて、努めて好きになる様にしてのみつけたら、幾分かづゝのめる様になつた位の程度ださうだ。

だから本來の性質は嫌ひなんだから、呑む事は呑んでも、それは必要な場合だけの

事だ。家庭にゐる時や必要のない時は、絶対に吞まないさうだよ。」

「酒や煙草を吞まなければ、成功して行かれないなんて、そんな事があるでせうか。それにしても本當に嫌ひなものなら、何と言はれたつて吞めやしないんですけれど、元々吞めば吞める性質があるからでせう。」

「だけごお前、おつき合ひで仕方なく、人前だけで一本や二本の煙草を服む事や、少し位 盃を受る位の事は、出来る男でなけりや、活氣のある仕事は出来やしないよ。」

第一それじや人が相手にしないから、信用がなくなつて終ふ、實業家はね。

酒も煙草も成功する武器として、用ひるといふ程度なら、決して問題にする程ではないよ。」

「それはそうでございますけれど……。」

「要するに酒や煙草を服んでも、吞まなければいゝのだよ。」

「ですけれども、お酒といふものは、少し吞むと言へば、必ず澤山吞むものでございます。それがどの程度に少しなのか澤山なのか、様子が分りませんから……。」

煙草はまあ仕方がないとしても、お酒を召上る人だけは私絶対に厭なんですから……。」

「ますけれど……。」

「でもお前の兄さんもお父さんも、皆吞んで見えるのだから、ごういふ風に考へられるか分らぬから、一應手紙を出して相談だけして見たらごうだらうね。」

勿論お前の希望条件も書き添へてやる方がいゝが……。」

「貴方がさうお思ひになれば、兎に角一應手紙を出して見ます。」

と道枝は委細を書いて、借りておいた寫眞をつけて送りました。

すると十日もたゝない中に、返事が参りました。

その文面では、何れは結婚させねばならないのだから、申分のない家庭であれば、差上げてよいと思ふが、何分本人もゐない事だから、夏休みに宅へ歸つた時に、そちらへ本人をやるから、それとなく一度、先方の人達にも見て頂いて、好枝も承知する様だつたら、話を進めて呉れてもよい。

酒や煙草を嗜むといふ事については、大酒を吞んで身を持ち崩す様では困るが、交際のため幾分吞むといふ程度であれば、却つて酒も煙草も吞まないでゐる人より、さつぱりしてゐていゝと思ふ。

といふ様な事が書いてありました。

道枝もそれによつて、自分の主義を捨て、俊夫の酒と煙草は認める事にして、河村夫人が仲に立つて、色々骨を折つたため、八月三十一日に鶴舞公園で見合をするといふ所まで運び、大體の時間の打合せまで終つて居りました。

それは好枝にだけは秘密にしてありましたが、房枝は我が子の大切な將來のために充分に相談もし、先方の母親や本人の性格も知り度いといふ考へから、好枝をわざわざ送つて来たのであります。そんな問題が起つてゐることも、夢にも知らない好枝は、母と共にニコ／＼として、叔母の家へやつて参りました。

それから三日目の三十一日に、突然の様に河村夫人が訪ねて参りまして、一時間程雑談してゐる中に、房枝とも心安くなり、

「一度皆さんと揃つて、公園へでも散歩に行きませうか。」

と問ひかけると、道枝はすぐに賛成して、

「さうでございますね、これから参りませうか、家にばかりゐても、暑くて仕方がありませんから……。姉様も御一緒に参りませう、好枝も一緒に行かうよ。」

「え、参りますわ、お母さん、行つて参りませうよ。」

と賛成して、好枝はすぐに母を促し立てる様にして、着のみ着のまゝの姿で出掛けようとし、道枝は何心ない風で、

「好枝、私達はいゝ年をしてゐるからかまはぬけれども、お前の様に若い人は、少しは身振りもかまはないといけませんよ、人が目を付けて見るからね、

一寸髪を結び直して、着物でも着直して行かなければ、駄目ですよ。」

「そんな事しなくても大丈夫ですわ、私このまゝで結構ですもの。」

「お前が結構だと言つても、若い人は誰でも目をつけるから、ちつとは身なりをしつかりして行かなければいけません。」

お前位の年になれば、人に言はれなくても、其位の事は氣がつかなくちや駄目だよ。それが一番大切な、身だしなみといふものですから……

又それが女としての禮儀です、よく考へて御覽なさい、誰でもニコ／＼として美しい花の様な娘さんに逢ふと、何となく言ひ知れない明るい輝かしい心持がするものです。それと反對に、身なりもかまはず、顔も手入れしないで、着のみ着のまゝで、平

「まあ厭ですわ、叔母さん、そんな事考へてゐたら、散歩も自由に出来ないじやございませぬの？」

「まあそんな理窟を言つてゐないで、今日はお前いつもより、日焦けがして顔が黒くなつてゐるから、少し顔を洗つて、薄くお化粧でもしてゐらつしやい。

ねえお姉様、いつもより何だか今日は、色が黒く見えますね。」

「田舎へ行つて、餘り毎日日向へ出て、苺簀なんか歩くものですから、すつかり日焦けがして終ひました。」

叔母さんの仰有る事をよく聞いて、少し身ごしらへをしつかりとしてお出で。」

「お嬢さん、本當に若い時は花でございますから、成るべく御奇麗にしてお出で遊ばせね。お母様や叔母様が、吃驚遊ばす程、お奇麗にお化粧してゐらつしやいませ。

何ならお手傳ひ致しませうか。」

「あら！ 河村さんの叔母さままで、いやでございますわ。皆さんで私をおからかひになるのですもの。」

そんな事仰有るなら、ごうぞお三人でゐらして下さいませ、私お留守して居りますから……。その代りお土産はごつさり頂き度うございますわ おほ、ほ、ほ。」

道枝は房枝や河村夫人の顔を見て、笑ひ乍ら、

「お前そんな事言つてゐないで、さつさと支度をするんですよ。」と言つて、髪を結び直させ、着物を替えて、帯もきちんと結ばせて、四人で家を出ました。

途中で松坂屋へ寄つたり、晝食をすましたりしてから、鶴舞公園へ約束の時間までに参りました。

こちらは山田家の夫人茂子は、すつきりとした絹の單衣に、一つ紋付の黒の紗の單羽織を着て、上品な丸鬘姿で、二人の息子と花の様に着飾らせた女の子を抱いた、顔立ちのよい美しい和子を伴れて、約束の時間より三十分も前に、泉水のほとりの藤棚の下まで参りました。

俊夫も幸夫も二人とも、白緋にセルの袴を穿いて、ステッキを持って麥藁帽を冠つてゐますので、一寸見ると幾分着物の柄が違つてゐるだけで、脊恰好が同じ位で、ごちらが兄か弟か、一寸見分けがつきませぬ。四人は藤棚の下で立止つて、

「まだ来て見えない様じゃないか。」

と茂子が言へば和子は、

「お母さん、向ふは約束の時間より、十分や二十分は屹度遅れて来ますわ。」

だつて、女の方が先に來てゐるのは、體裁が悪いんですもの。」

「さうね、だけど河村さんの話では、本人に見合といふ事を知らせると、若し纏まらなかつた時に可愛想だから、知らさないで置く事になつてゐると言つてゐらしたから、本人はそんな事は少しも知らないから、何時もの様に顔も洗はず髪も結はず、着のみ着のまゝの、無造作な恰好をして來るから、その事をよく承知して見て頂き度いこのお話でしたよ。」

すると幸夫が、

「そりやその方がいゝ、女は化粧なんかすると、平常よりも倍位よく見えるから、後になつて有りのまゝを見ると、人が違ふかと思ふ程悪く見えます。」

兄さん、有りのまゝを見た方がいゝんだから、そのつもりでよく注意して御覽なさい素顔で見て、人並に見える様な人なら、一寸造ると、随分奇麗ですからね。」

「さうかなあ、僕は人を見る事なんか、分りやしないよ。だから

お母さんや和子やお前が見て、これならいゝと云へば、僕それでいゝ事にするよ。」

「冗談じゃない、兄さんのお嫁さんじゃないか。」

「そりやさうだけど、僕の家内といふだけじゃなく、結婚すればお父さんやお母さんの子供になるんだし、お前達には姉さんに當る譯だから、お前達が第一に氣に入つて呉れなけりや、問題にならないよ、

皆が氣に入る女なら、僕は喜んで貰つて一生大切にするよ。」

「兄さん、そんなうまい事を言つて……、さあとなると又何とか彼とか文句を言ひ出すんじゃないですか。東京でも現に二度ながら僕に恥をかかせたじやありませんか。」

「そりや仕方がないさ、二度とも全く僕の理想とは、かけ離れてゐたからなあ。」

「又今日もこんなに大勢引張り出しておいて、骨折り損の草臥れもうけをさせやしませんか。」

「そんな事は分らないよ、だがまあみんなが氣に入つたと言へば、大概なら僕は讓歩するつもりだよ。」

「だがねお母さん、僕達はごういふ風にしてゐたらいいでせう。」

「さうですね、四人もこんな所に待つてゐるのも變だし、先方に氣づかれてもいいけませんからお前達は向むのベンチに行つて何氣ない風に掛けてお出でよ。そしたらいい時期を見て、私が呼んで紹介するから……。」

ね、さうした方がいゝね和子。」

「え、それがいゝわ、兄さんや幸夫は離れてゐる方がいゝわ、お母さんや私が先によく見るから……。」

「そんならお母さんや姉さんが、よく見てそれで氣に入つたら呼んで呉れるんですね僕達を。」

「その方がいゝじやないの？」

「では氣に入らなかつたらごうするんだ。」

和子は笑つて、

「氣に入らなかつたら、お母さん呼ばない事にしませうね。」

「可愛想な事を言ふじやないか。しかし本當は、お母さんや和子が見て駄目だと思つ

たら、それつきり僕を引き合せて呉れない方が、罪がなくていゝよ。」

幸夫は笑つて

「さうだ、さう定めておかう。」

「それじや、ぼつ、向ふへ行くとしやう。」

二人は睦じく、七八間離れた池の端のベンチに腰を下して、雑談に耽つて居りました。間もなくそこへ四人が歩いて来て、藤棚の下のベンチの前まで来ると、河村夫人は二人の姿を見て、如何にも吃驚した様に、

「あらまあ、山田さんの奥様ではございませんか、まあ和子様も御一緒にいらつしやいますの。」

と言葉をかける、向ふも驚いた様に立ち上り、

「河村さんの奥様、お久しぶりでございますこと。お變りはございませんか。」

その後は失禮ばかり致して居りますが、

「私の方こそ、一度お伺ひしやうと思ひ乍ら、遂失禮致して終ひまして、皆様お變りはございませんか。今日は御散歩でございますか。」

「はあ、子供が長い間夏休みで歸つて居りましたが、二人とも明日東京へ歸ると申しますので。丁度昨日和子がお客に參つたものでございますから、皆揃つて買物に行つて来ようと言ひまして、お父様と女中に留守を頼んで、家内中に出て參りましたの。おほ、ゝゝゝ。」

「まあ、左様でゐらつしやいますか、俊夫さんも幸夫さんも御一緒でございますの？」

「はい一緒に來ましたが、あちらの方へ參りました様でございます。」

「左様でゐらつしやいますか、それは水いらすの御散歩で、お楽しみでございますね。奥様、一寸御紹介致しますが、この方は聖華高等女學校の校長先生の奥様でゐらつしやいます。あの先生、此のお方様は私がお心安くして頂いて居ります、稻澤の山田様の奥様でこの方はお嬢様の和子様と仰有います。」

と紹介を受けると、山田夫人はすかさず、

「お初めまして、お目にかゝります、私は山田の家内の茂子と申す者でございます、今後どうぞお心安く願ひ致します。」

續いて和子がにこやかに、

「私山田の娘の和子でございます、どうぞよろしく。」

と言つて、丁寧にお辭儀を致しました、道枝は靜かに、

「申し遅れましたが、私は宮崎道枝と申す、どうぞよろしく御願ひ申上げます。」と挨拶を致しました。その次に河村夫人は如才なく

「奥様、それからこちらのお方が、先生の御實家のお嬢様と、そのお嬢様の好枝さんと仰有る方で、只今東京にまだ御在學中でございます。」

房枝は二足三足進むと、

「これは、御初めて御目にかゝります、どうぞ今後共お見知り置き下さいます様にお願ひ申上げます。」

と山田母娘に言葉をかけました。二人も夫々丁寧に挨拶の言葉を述べましたが、好枝は別に言葉は出さず、唯にこゝし乍ら、靜かに丁寧にお辭儀だけ致しました。

山田家の二人は挨拶し乍らも機敏に、よく總べてを觀察して、

「さあどうぞ、こゝが涼しうございます。こゝへおかけ遊ばしませ。」

「有りがたうございます。」

河村夫人は要領よく、

「奥様、折々こちらへお散歩に御出かけでございますの？」

「いゝえ、何分うちが出られませんので……、夏になりましたから、こゝへは初めてでございますの。」

何気なく話をし乍ら、和子に茂子がちよつと眼配せすると、和子は静かに立ち上り、

「奥さん、兄さんや幸夫を呼んで参りますわ。」

「さやうでございませうか、それでは長らくお目にかゝりませんから、一度御挨拶させていただきますませう。」

和子は膝に抱いてゐた子供を、母に預けると二人を迎ひに行きました。

二人がそこへ来ると、河村夫人は時候の事や一別以来の挨拶をしてから、道枝の次に房枝と、好枝を引き合せました。二人は帽子を取つて、簡単に初對西の挨拶をしますので、好枝も唯何気なく、かすかに微笑み乍ら、丁寧にお辭儀を一度だけ致しましたが、それでも相手の二人が男性で、しかも年若い學生であるだけに、幾分氣遅れがして、その瞬間首の邊りから耳の邊りまで、少し赤くなりました。

それから暫く雑談をしてから、一緒に動物園に入つて、自由に見て廻りました。

その間に幸夫は好枝の傍へ近づいて、

「貴女は何時東京へお歸りになりますか。」

「私今晚の七時の夜行で、行く事になつて居ります。」

「今夜お立ちになる？ それにしては今頃散歩なんかなすつてゐて、随分呑氣じやありませんか。」

「叔母が餘り誘ふものですから、遂出て参りましたの。」

「さうですか、學校はどちらですか。」

「東京女子専門の方でございますの。」

「さう、寄宿舎にゐらつしやいますか、それとも御通學ですか。」

「初め二年程寄宿に居りましたが、色々他に學び度い事もありますので、只今では神田の御徒町に下宿して居ります。」

二人の話はそれ位の、簡単なものでありました。

孔雀のゐる前まで来ると、今度は俊夫が突然に

「貴女のお宅は、田舎の方ですか。」
と尋ねました。

「はい、山の中でございます。」

「涼しいでせうね、山のある方だと景色はい、し、空気はきれいだし……。」

「はい、土地が高うございますし、人が少ししか住んで居りませんから、町の事を思ふと、随分涼しいでございます。でも今年は特別で田舎でも大變暑うございましたわ。」

「さうでせうね、町は尙更ひどかつたですよ、僕達は夏中ボートの練習をし乍ら、大方水の上で過しました。お蔭で大分黒くなりました。」

こんな事を話し乍ら、一同は極めて自然に、又ボツリ／＼と歩き出しました。

その頃から、むし／＼として重苦しい様ないきりがして、空模様が變になつて參りました。その中にゴロ／＼と雷が鳴り出し、時々濕り氣を帶んだ風が、烈しく吹いては、木々の枝葉を揺つてゐます。河村夫人は突然、

「何だか空が曇つて參りました、雨が來そうでございますから、もうお別れして歸る事に致しませうか。」

と言ひますと、茂子は

「ね河村さん、こんなに皆様とお近づきになつて頂いても、お別れすると又御目にかゝつてゆつくりとお話するといふ事も、出來悪うございますから、御都合がお悪くなかつたら、御一緒に何處かで、お夕食でも頂いて、お別れする事に致しませうか。」

「さうでございますわね。先生の御都合は如何でございますか？」

道枝は

「結構でございます、是非お供させて頂き度う存じます。」

と答へました。

「それでは雨が降つて來ると、歩くのや電車は大變ですから、タクシーでも呼びませうか、幸夫、一寸お前呼んで呉れませんか。」

幸夫はすぐに電話を借りて、タクシーを呼びました。

公園の出口へ來て見ると、早やそこへ二臺の自動車が來て待つて居りました。

丁度その時大粒の雨がバラ／＼と落ちかけて來たので、河村夫人は前の車に茂子と

和子と、房枝と道枝を載せるご、

「貴方がた、早くお乗なさいませよ、お嬢さん、お召物が濡れますから早く。」
と勧めましたが、好枝はつゝましく、

「どうぞ。」

と言ひ乍ら遠慮してゐますので、

「では御免下さい。」

と言つて先へ乗りましたので、俊夫も

「お先に。」

と言ひ乍ら續いて乗り込みました。

その後から幸夫が入つて、前の腰掛を下して、後向きに掛りましたので、好枝は仕方なく俊夫と竝んで腰を下しました。

一同は明治食堂で車を下りて、愉快に話し乍ら食事しましたが、その間に外は物凄い程雨が降り、風は吹き暴れて凡そ二時間程も外に出る事もならず、雑談し乍ら、風の止むのを待つて居りました。懸て午後八時頃になると、漸く雨が止んで風も少し和ぎましたので、そこを出ると別れて、お互に我家へ歸りました。

このために好枝は豫定が狂つて、上京が出来ませんでしたので、翌日の午後の汽車で上京する事にして、その夜は楽しく語り乍ら寝みました。

翌日晝食の支度が出来て、皆揃つて箸を取らうとした時に、突然怖ろしい地震が起りましたので、皆驚いて表へ出ました。

春光は萬一を氣遣ふと、静かに重要書類だけを、きちんと鞆の中へ入れて、抱えて参りました。二三回物凄く續けざまに揺れますと、町中の人は皆飛出して、

「大きな地震だった、震源地は餘程近い様だが、どこだつたんだらう。」

「あらく、まだ揺れてる、怖いごうしやう。」

と口々に言ひ乍ら戦々恟々として、家の中へ入る者はありません。

暫くすると、漸く鎮まりましたので、皆こはく乍ら家へ入つて、食事をしました。

好枝は今日こそは上京しやうと、支度も萬端調つたので、午後の四時頃道枝や母や光雄や女中に見送られて、驛まで行つて見ますと、驛の入口の正面に、大きな紙を貼つて、

「本日の地震は關東が震源地にして、その被害甚大のため、駿河驛以東は列車不通に

付、乗客は出發を見合はされ度し。」

「いふ、告示が出て居りました。」

「え、つ？ 關東が震源地ですつて？ 汽車が駿河驛以東は不通ださうじやありませんか。」

「まあ、どうしたといふんだらう。」

「本當にそんなにひどかつたんでせうか。」

乗客は驛に一杯満ちて、口々に騒いでゐます。

驛長室へ詰めかけて、その様子を糺してゐる人もありますが、驛長は、

「只今では通信も杜絶して、さつぱり様子が分りませんが、各務原から唯今飛行機が視察に行つてゐますから、それが歸りませんと、實際の事は分りません。」

兎に角餘程大變な事になつたらしく思はれます。」

と言ふだけで、一向に要領を得ません。

乗客の中には、病人危篤やら死亡やら、その他一刻の猶豫もなく、行かねばならぬといふ、火急の要件の人達も澤山ありましたが、絶対に乗せませんので、顔色を變へ

て、まるで半狂亂の様に騒いで居ります。町から町へこの不安な怖ろしい噂が傳りま

すので、皆戦々恟々としてゐますと、翌朝未明に號外が出ました。

關東は大震災のために、東京始横濱その他大火災を起し、えん／＼として空を焦し

帝都は宛ら修羅の巷と化し、市民の救ひを求め、阿鼻叫喚の聲空に響き、實に凄慘

の極に達す。」

と報じ、第二第三の號外は火は宮中に及ぶと知らせ、國民をして驚愕せしめました。

さうした息づまる様な不安が、刻々と増して參りますと、關東の同胞を救へ、罹災

者を救へと、各方面では期せずして、救護品募集の大活躍が始められて、停車場は救

恤品慰問品が山と積まれて、關東へ／＼と送られました。

その中に焼け出された罹災者たちは、命から／＼焦土の都を脱れて、親戚知己を頼

つて田舎落ちをするため、汽車は避難民を満載して、各方面へ／＼と送り出しま

す。慰問品救護品發送のために、各團體が出張して活躍するのと、避難民救助のため

に臨時救護所を驛前に出して、その任に當る等のために、宛ら停車場は戦時の様な有

様です。東京や横濱は大半以上焼き盡されて、數百年以前の武藏野原に還り、唯残る

のは僅か市の一部分と宮城のみであり、震災地には全部戒嚴令が布かれて、物凄く有様であること、新聞紙は報じて参りました。

人々の驚きの中にも、好枝は母校を思ひ、恩師又多数の學友の安否を氣遣ひ、自分の宿の人々達の事を思ふと、ゐても立つてもゐられない程の心配のために、二三日は夢中で過しましたが、四日目には帝都の母校も宿も焼失して、最早や影も認めない事を知ると、餘りの悲しみのために、泣き倒れて終ひましたが、町の人々が慰問品の募集を始め、道枝達も日用品や食料品等を買ひ集め、職員生徒と共に慰問品の荷造りをするのを見ると、學資金にと父から渡されて、持つてゐた百圓のお金を出して、「これだけのお金全部、慰問袋を造らせて下さい、東京へ私も行つて居ればこのお金も私と一緒になくなつて、焼けて終つてゐるのです。

あの晩叔母さん達と散歩に行つたお蔭で、時間が遅れて行かなかつた爲に、私は助つたのですから、せめて焼け出されて困つてゐる人達を、慰めて上度いと思ふます。この言葉に、道枝も房枝もすぐに賛成して、「本當にさうですわね、あの晩行けば間違ひなく命はなかつたのだ。

行かなかつたからこそ、命が助かつたのです。それを思へば本當に、慰問袋を作つて送る位當然の事ですよ。

お前はこれのお金がなくても、着る事にも食へる事にも困りはしないのだから、充分學校の様子が分つて、何とかきまりがつくまで、此處にゐなきやいけないよ。」さう言つて、道枝は全部慰問袋を作つて送らせました。

大 震 災

そして慌しい日が二十日程過ぎると、漸く中央線から行けば、東京へ行けるといふ事が分りました。

道枝は母校を慰問するかたぐ、帝都の震災後の状況を見るため、好枝を伴つて出かけました。汽車の中では色々、帝都の状況を空想に描いて参りましたが、愈々飯田町へ着いて見ますと、想像以上に焼き盡された帝都の有様に、道枝も好枝も言葉も出ず、唯涙ばかりが、無限に流れて落ちます。

あちらこちらを彷徨つても、昔の面影はなく、しるべの家を尋ねるのにも、その手

が、りもありませんので、漸く母校の校長先生の本宅が、焼失を免れて居りました。め、焼出された職員も生徒も、殆どその本邸へ引取られて居りましたので、尋ねて行つて慰問する事が出来ましたが、扱二人は宿るべき家もありませんので、湯島天神の境内のベンチの上に腰をかけたまま、一夜を過して、避難民で埋つてゐる不忍の池の邊りを通り抜けて、上野公園へ参りましたが、こゝも避難者で一杯で、腰を掛けて休む所もありません。

漸く西郷隆盛の銅像前まで来て、東京の市街を見渡しますと、焦土と化して終つた凄惨な町の中にも、慌しく復興を急いでゐる目覚ましい光景が、手に取る様に見えます。

「叔母さん、これで東京はどうなるのでせう。」

「東京の人は意氣が烈しいから、復興するのは間もないでせうが、でも前通りの東京とするには、五十年や六十年はかゝるでせうね。」

「では私達が生きてゐる中には、昔の東京にはならないでせうか。」
「さあ ならないと思ひますね。」

本當に考へて見ると、世の中は夢の様なものぢやないか。ねえ好枝。

一日の午前十一時頃までは、眼のさめる様な町を、自動車や電車が走り、淺草や銀座なんか、暑中休暇が終つて歸つた生徒で埋つてゐたゞらうにね。

そして活動に入つてゐる人も、お芝居を見てゐる人も、みんなが不安な感じなんか夢にもなくて、思ひ／＼の事を考へ、思ひ／＼に楽しんでゐたのに、僅か一分間や二分間の地震で、生命を失つて終つた人もあり、何も彼も焼けて終つて、親子も別々に生き別れ死に別れして、一生取り返しのつかない悲しみのどん底に投げ込まれてゐる人もあるし、こんな有様を見ると、人間の力なんて言ふものは、本當に小さいものぢやないか。十年も二十年もかゝつて、何百萬圓と金をかけて、築き上げた建築でも、木葉微塵に焼盡されて終ふんだもの。

自然の力は恐ろしいものはありませんね。」

「本當にさうですわね。叔母さん……。私何だか世の中に生きてゐる事が、心細くなりましてわ、こんな有様を見ると、親だつて兄弟だつて、叔父さん叔母さんだつて、本當に最後まで信頼の出来るものはありません。」

何時いつどんな事ことになるか分わかりませんもの。

「どんな力ちからでも奪うばふ事ことの出来できぬ、大きな力ちからに頼たよまらなくては叶かなひません。」

「好よ枝え！ お前まへ本當ほんたうに心こころからさう思おもふの？ 本當ほんたうにお前まへの言いふ通とほりですよ、現實げんじつの社しゃ會かいは夢ゆめの様ようなものだから、それに頼たよつてゐたら、一生せいしやう心の安あん心しんは出来できません。

「だから絶對ぜつたいに動うごかない、大きな力ちからに頼たよらなければなりません。」

「叔母おばさん、そんな力ちからがありませんか。」

「あるごも、それは信しん仰やうですよ、信しん仰やうは自然しぜんの力ちから、自然しぜんは神かみ様さま佛ほとけ様さまと言いつたつていゝんです、その自然しぜんは無む限げんの力ちからを持つてゐるのだから、此この力ちからに頼たよつてゐたら、絶對ぜつたい的に安あん心しんして生いきられるのです。」

「だつて叔母おばさん、私わたしにはその事ことが分わかりませんもの。」

自然しぜんといふ事ことは分わかつてゐるのですけれども、神かみ様さまか佛ほとけ様さまか言いふ事ことが、實際じつさいあるかないかと、少すこしも分わかりませんのよ。」

「お前まへには分わからないでせう。けれども分わからなければ信しんずる事ことは出来できないから、一いっ番ぱん分ぶんり易やすくお話はなしして上げやうか。」

「こんなひどい震災しんさいや火災くわさいで、みんなが苦くるんでこんなみじめなものになつてゐても自然しぜんは何なんともないですよ。昨きのう晩ばんもいつもの様ように空そらにはお月つきさんが出でてゐたでせう。」

星ほしもキラ／＼と輝かがやいてゐましたね、今いまも御覽ごらんあの太陽たいやうは、こんな有あり様さまも見みてゐるかゐないか知しらない様ように、輝かがやいてゐらつしやるだらう。」

あれ程ほど大自だい然ぜんは偉わい大だいなのです、假令たとへこの地球ちきうは愚おろか、三千世せかい界かいが一度いどに消滅しょうめつして一切さいはん萬物ぶつが滅ほろびて終しまつても、自然しぜんは悠々いゆうくとして動うごかないのです。」

お前まへよう考かんがへて御覽ごらん。」

日本にほんの人ひとだけじやない、世界せかい中ちゆうの人ひとが大抵たいていさうだけぞ、みだりに自分じぶんが／＼と言いつて、自分じぶんの體からだを始め、食たべ物もの着き物もの住居じゆうきよ、日常にちじやう使用ししようするものから、田畑たはたの野山やま草木さくもに至いたるまで、皆みな自分じぶんの物ものといふ、人間にんげんが勝手かつてにつくた規則きそくを盾たてにして、それを所しよ有いうする權けん利りを持つと、自分じぶんの物ものだ／＼と思おもつて、他たの人ひとが一いち寸すん手てを觸ふれても、一尺しやくか一寸すん地所ぢしよを動うごかしても、まるで氣狂ききやうひの様ようになつて騒さわぐけれども、それを本當ほんたうに自分じぶんのものだと思おもふのは、間違まちがつてゐる迷まよひだと思おもふよ。何故なぜかと言いふと、考かんがへて御覽ごらん、人ひとが生うまれて來くる時ときに塵程ちりほどのものでも、此この世よへ持もつて來くるだらうか。何なにも持もつて來くないでせう。」

そして自分の體だつて、一滴の血だつて一本の髪の毛だつて、自分の勝手に作ったのじゃない。

生みの親だつて、勝手に造れるものじゃない、皆自然の力によつて、天と地の力で作り出される食べ物や、色々の成分でお母さんの體を通じて、子供の血になり骨になり肉になり、その他の成分になつて生れて來るのじゃないか。

さうして見れば、生みの親と言つても、親だけの力じゃない、その元は不思議な自然の力が、その人をこの世に生かすため、親を選んで生ませて下さるのです。

それだから人が一生を終つて、死んで行く時には、肉體は土に還つて、魂は自然の宇宙に歸るでせう。解決は本當に嚴肅なものです。塵一本でも俺が／＼の慾に迷つてゐたものも、命が終れば何も持つては行かれません。

今度の震災で東京は十萬人近い人が亡つたさうですが、皆さんの話に聞いたでせう家が倒れて焼け出されても、慾に離れる事が出來ず、色々の品物を持出して逃げた人は、そのため助からないで焼け死んだといふ事ですが、品物を投げ出して裸同様に逃げた人は、辛じて助かつた人が多いといふ。

丸裸で逃げても、助かりたいと希つた人も、遂逃げ遅れて焼けて終ふと、肉體は灰に還り土にかへつて、元の姿は何も残さない。

眼に見えぬ魂だけが残るのです、その魂は何處へかへるでせう。

魂は幾億萬あつたとて、形がないのだから、邪魔にはならないでせう、けれども決して死んではゐないのですよ。

體が生きてゐる中に、色々の事を考へ慾を出して、騒いでゐたのは肉體じゃなくてその魂なのです。その魂が迷つてゐて、大きな罪を造つたり、人を困らせたり虐めたり、嘘を言つたりして、死んでも離すまいと思つて、嚙がみつゐたものを、持つて行く事の出來た例があるだらうか。

そんな事は決してないでせう……皆夢じゃないか。

人が色々の事を言つて、威張つてゐるけれども、眼に見える一切の物は、塵一つだつて人間の作つたものじゃないんだものね。

何時の世の事か知らないが、全知全能の神様がお造りになつて、そこへ人間を造り色々の動物や鳥草木などもお作りになつたのだから、絶えずに神様がそれを御支配し

て、その生命を扱つてゐて下さるのだ。

「どんな事が地上に起つても、自然に來る力は神様の御心なんだから、それに對抗の出來る力は人間にはありません。」

それだから人間は、肉體を持つて生きてゐる以上、衣食住が必要なんだから、餘り無慾になつて終つても、生きられないのだけれど、身分相應に暮して、衣食住に不自由しない程度なら、それで満足して、人の物も強慾に奪はず、困らせもしないで、お互に助け合ひ慰め合つて、幸福に生きて、總べての生きるに必要な、衣食住その他のものも、神様から生きてゐる中、お貸し下さつたものだと思つて大切に、それに對しては毎日、報恩感謝の生活を續けて、生きる生命のお約束の日には、何時でも喜んで天國へ歸つて行ける、心の準備をし、おいて、豊かにのんびりとした心持で生きてゐれば、どんな時でも、こんな事が起つて、今猛火に包まれて命が終らうとする刹那でも、神佛様の御名を呼んで、合掌してニッコリとして、安らかに永遠不滅の天國へ歸れますけれども、自我の慾に魂が迷ひ切つて終つて、信仰がないと、臨終の際までも生への執着のため悶え苦んで、その魂が迷つて、汚れた亡念のために天國へ

も歸れないで、悪魔界煩惱界亡念界に彷徨つて、永遠に人類の幸福を呪ひ、又禍ひして争を起させたりする様な者になつて終ひます。

かう言ふ悪い亡念や悪魔が、地上にこだはつて、人や動物や鳥類の生活にまで交はつて、禍ひをするために、本心は清らかなものでも、色々な迷ひが雲となつて包みま

すから、何時の世が來ても、みんな苦しまなければならぬのです。

私はさういふ事を思ふと、自分が今この地球の上に、生きてゐるゐないといふ様な、小さな問題ではなくて、どうしたらこの地上の悪魔の亡念を征服して、總べての人の本當の善良な魂が、自由自在に伸び榮えて、お互に人間ばかりではない總べての者が、助け合ひ慈しみ合つて、幸福に暮して行ける様な事は出來ないかと、そんな事ばかりを考へてゐる。」

と宛ら他の世界にゐる様な心持で、語り續けてゐるのを、好枝ばかりでなく周囲の人

も、ちつと耳をすまして聞いてゐましたが、誰も彼も皆異様な眼をして、道枝の顔を見つめるだけで、何とも言ふ人はありません。

「叔母さん、よく時々そんなお話を、今迄も聞かせて頂きましたが、その時はそれ程

に思ひませんでしたけれども、今日は本當によく分りました。

本當に叔母さん、人は信仰に生きなくちやなりません。

私は神様ごか佛様ごか言ふと、遠い所にでもお有りになるといふ様な風に考へてゐましたが、それは違つて居りましたのね。

自分が相對してゐるもの、皆神様でございます。

私自身も神様がお造り下さつたもので、借りものなのですから、神様と信じて良い譯だと思ひます。それだから、どんなものに向つても、手を合せて心から拜んでもいゝと思ひます私自身の姿を拜んでも、いゝ事になるでせう。

總べて他に向つても、自身に向つても、勿體ない有りがたいと、心から拜んで暮して行ける清らかな、魂を持つて生きたらいいんですわね。」

道枝は思はず好枝の手を掴んで、

「好枝！ お前本當によく言つて呉れた。

本當にさうです、外を拜むだけじゃない、自分を拜める人、これが佛様で言へば即身成佛、神様から言へば、居ながら神の位に住めるのです。

世の中のすべての人が、そこまで本當に悟られると、迷ひはなくなり、争ひはなくなり、本當にみんなが幸福になれるのです。

せめてお前だけでも、今の言葉を守つて、その氣持で一生清らかに、豊かに生きてお呉れ。」

「叔母さん、私此處へ来て、こんな話を叔母さんから聞かせて頂かうとは、夢にも思ひませんでしたわ。本當に私救はれました、此の話を半年前に私が信じてゐましたら、亡くなつた、澤山な友達にも聞かせて上げて、救つて上げるのでした。」

「本當にさうだつたわね、その刹那に苦んだ人もあるでせうが、安らかに天國へ救はれた方も、澤山あるでせう。

要する處は唯信仰だけだから……信仰と言つても、形式じや駄目よ。

泰山も移し變へるといふ、確固たる信仰でなければ駄目なの、その信仰のある人は、宗旨は何であつても、立派に救はれて、淨光界へ歸つて行けるのです。」

二人がこんな話をして、現實の世界を離れて、無形の天國の有様を夢みてゐる時、突然に、

「貴女は野田さんじゃありませんか。」

と聲をかけた人がありました。はつとして顔を上げると、好枝は、

「あら！ 貴方は瀧澤さん、まあ何時こ、へお越になりましたの。」

「僕よりも貴女は、どうしてこんな所にお出でになりますか。」

よく御無事でゐらつしやいましたね。」

「私三十一日に東京へ歸る筈だつたのが、都合で一日遅れたものですから、震災には會はないで助かつて、昨日叔母と二人で東京へ参りましたの。」

けれども泊る所がないので、昨晩は湯島天神のお宮で夜を明かして、今朝漸くの事でこゝまで参りました。

これは私の叔母でございますの。

叔母さん、この方私がよくお話ししました一番仲よしの瀧澤さんのお兄様ですの。」

「これは叔母さんでゐらつしやいますか。」

「まあ、色々この子が御厄介になりました、有りがたうございます。」

とお互に簡単な挨拶を致しました、好枝は瀧澤に向つて、

「あの瀧澤さん、千代子さんは如何でゐらつしやいますの？」

瀧澤は、かう問ひかけられると、如何にも哀愁に満ちた顔で、

「貴女はまだ御存知ないのですか、あれはどうくやられて終ひました。」

「え、つ！ 瀧澤さんが？」

「あんなに仲よくして頂きましたが、あれは三十一日に歸りました、めに、一たまりもなく死んで終ひました。」

「まあそれでは、瀧澤さんは亡くなつてお終ひになつたんですか。」

「私どうしよう……。」

瀧澤は暫くは眼を閉ぢて、口も利かれずに、打沈んで居りましたが、

「本當に可哀さうな事を致しました、僕残念でたまりません。」

それを聞く道枝は、何とも言ひ様のない悲しい表情をしながら、

「まあ、本當に貴方の御妹様が、此震災でお亡くなりになつたのでございますか。」

好枝は泣くく顔を上げて、

「叔母さん、この方瀧澤進さんと仰有いまして、千代子さんの本當のお兄様ではない、

許婚の方でございませぬの。

只今外國語學校の方に、御在學中でゐらつしやいますが、折々下宿の方へゐらつしやいまして、よく一緒に遊んで頂きましたから、私よく存じて居りますの。

それにしても、千代子さんが亡くなつてお終ひになるなんて、本當にどういふ事だつたんでせう、私……どうしても本當とは思はれませぬわ。

本當に夢じやないのでせうか……。

「貴女がお驚きになるのも御尤もです、僕も夢であつて欲しいと、今でも思つてゐるのですが、夢ではない現實なんです。それも現在僕は、一緒にあの時居り乍ら、救ひ得なかつたのが、如何にも残念でなりません。」

「まあ貴方、その時一緒にお出でになりましたの？」

「さうです、僕は暑中休暇中、北海道の方へ遊びに行つてゐましたから、信州へは歸りませんでした。千代子は信州の實家へ行つてゐて、三十日に宿へ歸つて來ましたから、實家の方から僕の所へことづけて來たものもあつたものですから、それを受取るために、一日の晝前に千代子の宿へ行きました。」

色々話をしてゐるうちに、お晝食時になつたので、一緒に御飯を食べようと言つてお膳を出して貰つた所へ、あの地震だつたものですから、吃驚して僕は千代子を引き摺る様にして出やうと思つても、二階の廊下は長いし、梯子段を下りねばなりませんし、その間に續けざまに、ガタ／＼揺れるので、立つては轉び轉んでは立つて、漸く夢中で玄關へ出ましたが、瓦が上から／＼と落ちて、とても危険で出られません。どちらを向いても、悲鳴の聲ばかりが聞えます。

兎に角家の中にては危険ですから、表へ出やうと思つて飛び出して、丁度あの門の所まで來ますと、又グラ／＼と大きな地震が來ました。そしてあの門がグラ／＼としたと思ふと、怖ろしい勢で倒れて、千代子はその下に押へつけられて終ひました。僕は思はずその門の柱を脇へ退けて、千代子の體を救ひ出し、抱き上げて二三間走つて道まで出たのですが、その時はもうひどく體を押へられた、めに、正氣を失つて終つて居りました。」

「まあ、お可愛さうに、……。」

好枝は身悶えして泣きました。

「僕は夢中で千代子の名を呼び乍ら、どんな事をしても助け度いと思つて、焦りました。その中に少し意識を取り戻したので、千代さんく大丈夫だ。氣をしつたかり持つて……、と呼びますと、ハイとかすか乍ら返事を致しました。

私はしつかりと抱いたまゝ、尙も名前を呼びますと、聽てばつちりと眼をあいて

『兄さん、私の事は捨て、おいて、逃げて下さい。早く〜。』

と言つて、僕の膝から下りようとしてもがきます。

無我夢中で居り乍らも、危険が迫つてゐる事は、はつきり意識したらしいのです。

さうして僕を救ひ度いともがいたのです。

僕はしつかりと離さないで、千代さんしかつりしなくちや駄目だ。僕は死ぬのも生

きるのも貴女と一緒にだ。千代さん獨りをおいて行きはしない。

僕にしつかり縋りついてゐなけりや駄目だ。と力強く言つては見ても、邊りは物凄

く揺れて、倒れた家の中から救ひを求め、悲鳴の聲が聞えるばかりです。

その中にあちらからもこちらからも、火が出て怖ろしい勢で燃えて参りました。

それのみか息づまる様な土埃と煙のために、眼が眩み呼吸が苦しくて、生きてゐら

れない様な苦しさです。

何とかして千代子を抱いて、逃げようと思つて、二三間無理に抱えて走つて見まし

たが、自分の力は盡きて苦しくなるし、千代子も段々力がなくなつて、顔色は全くな

くなつて終つて、最後が迫つて來た事を知りましたから、僕はその上苦しませるには

忍びないで、ごうしやうかと思ひ惑つてゐると、千代子がかすかに「水……水」と言

ふではありませんか。

鐵管は破裂してしまつて、そこにはおろか、東京中には水一滴もないのです。

僕は困りました。

しかし「水……水……」と言つて呼んでゐる千代子に、やらない譯にはゆきません。

夢中で自分の體を掻き廻してゐると、ポケットに水を呑むアルミのコップと、果物

ナイフが手に觸れましたから、いきなりナイフで此の腕を切りました。

幸動脈を切つたために、可成り多く出血しました。

それを僕はコップに受けて、

「千代さん、水だよ。」

と口の邊りへ持つて行くよ、千代子はまるで氣狂ひの様に、それを貪る様に呑みました。二口三口呑んでから、水でない事に氣がついたのか、

「兄さん、これなに？」

と言つて、微かに眼を明いて聞きますから、僕は

「千代さん、水は一滴もない、勘忍してお呉れ、それは僕の血だよ。」

僕の全身を流れてゐる血なんだよ、僕が眞心こめて汲んで上げた水だと思つて辛抱して呑んでお呉れ。」

と耳に口を寄せて言ふと、その時千代子はそれでも、ニツコリと如何にも嬉しうにほゝろみました。本當に心から嬉しうに笑つて呉れました。そして、

「兄さんありがたう、私は幸福でした、最後まで兄さんの手に抱かれて……私も天国へ歸らせて頂きますから、兄さんは早く逃げて下さい。」

と言つて、僕の胸にしつかりと強く縋りつきましたが、後はがつくりとしたと思ふと、それで息は絶えて終ひました。

僕はその時は、千代子と一緒に死なうと決心して、千代子の死骸を抱いて、進んで

火の中へ入らうと思ひましたが、腕つ節の強い消防の人達が二三人來て、いきなり僕の手から、千代子の死骸を奪ひ取ると、僕を引き摺る様にして、引つ張つて行つて終ひましたので、僕はもう仕方なく、千代子の死骸をそこにおいたまゝ、心ならずも猛火に追はれて、上野の方へ逃げて終ひました。

それから後は毎日々々、あすこへ行つては、せめて千代子の骨だけでも拾つて、故郷へ歸り度いと思つても、それが却々見付からないので、困つてゐるのです。

かうしてゐても僕はまだ、夢を見てゐる様な心持がして、眞實だとはどうしても思はれません。千代子はあゝして死んで終つた、僕だけ助かつて生きてゐていゝのだから、この先僕はどうして生きて行くんだ、と思ふと、實にたまらないのです。

僕はまだこの廿日間、ろくに食物を攝つた事ありません。本當に僕に取つて、こんな不幸な事はないのです。

僕の心は暗黒になつて終ひました。」

と終始一貫たゞ泣き乍ら、瀧澤の話を聞いてゐた好枝は、突然立ち上つて、

「瀧澤さん、それでもよく貴女は、千代子さんの最後に、それまでにして上げて下さ

いました。千代子さんは本當の水を頂いたより、百千倍の喜びを感じ、一生の幸福を一時に集めた程の喜びを持って、貴方の愛と真心を、深く胸に魂に抱いて、天國へお歸りになつた事でせう。

あの方は本當に、信仰がお深かつた。

いつも日曜には教會へおらつしやる事を、お缺きになつた事はありませんでした。

お亡りになつた事は、お可哀さうでございますけれど、本當に千代子さんはお仕合せな方でした、千代子さんは最後まで、貴方の真心の中に生きて、死ぬまで貴方を離れないで、喜びの中に天國へお歸りになる事が出来ました。

お心の中ではどんなに嬉しく思つてゐられた事でせう。

さう言つて好枝は、又さめくくと泣きました。

瀧澤は握り拳で涙を拂ひ乍ら男泣きに泣いてゐます。

道枝はその話を聞くと、眼を開けて瀧澤の顔を見るに忍びない様に、固く眼を閉ぢて、いつまでも合掌して居りました。

暮 秋

あこがれし都の夢はそれならで

昔にかへる武蔵野の原

道枝と好枝は、廢滅の都の痛ましき様を、目の邊りに見て、身も魂も疲れ切つて名古屋へ歸りました。

今までは自由に幸福な生活を續けて、平和に育つて來た爲に、世の中の事は大方は自分の願ひ通りになるもの、様に考へて、唯自分の身近くの現實の世界だけ眺めて居りましたのが、今度の大事件によつて、始めて大自然の前には、親子兄弟夫婦も、金も財産もその他のものも、何一つ最後まで頼りにならないものであるといふ事を知りますと、何となく總べての物が頼りなく思はれまして、どの様な力によつても、動かす事の出来ない、大きな力にびつたりと絶り度い氣持になりました。

現實を離れて不滅の力、それは何であらうか。

唯一人瞑想して深く考へて行くこと、何時でも叔母に上野公園で浸々と聞かされた、

自然の世界に歸つて参ります。小さな現實の世界の一切を支配するものは、無限に大きな自然の中にある、天國であるのだ。

其處は三千世界の一切を作り、又支配なさる親様のお出でになる、その天國の掟は正義と愛だと叔母様がよく仰有る。それだからこれは、有限の世にも通ずる眞理だから、如何なる場合にも正義は必ず最後には勝つ。

愛は一切を生かし救ふものである。しかしその半面には悪魔の世界があつて、相當に強い力を持つて、神の尊き御業を妨げ、様々の誘惑を試みて、人々の魂を迷はせ五慾の煩惱を起させて、その魂を様々に弄ぶ爲に、生來の聰明さを失つて、言はれもなく迷ひと感情のために、色々の罪を造つて、地獄極樂といふもの、天國魔界といふもの、人の生命を終つて、後の世に來るものではない。

現實の世に絶えず愛と憎み、正義と邪惡が、様々の姿になつて現はれて、悪魔は根強く眞理の神に反抗を續けてゐる。

それがために正しい者が見下げられたり、零落れて苦んだり、又悪人が榮えたりするのは、一時的に悪魔が勝利を占めるのであるけれども、それを現實だけの迷ひで最

後には正義が勝ち、愛が一切の支配するものであると、度々仰有るのを聞いてわたが上野公園であの話聞かせて頂いた時は、本當に、果しもない廣い世界に天國が見え地上の幸福を破壊する、怖ろしい悪魔界の姿が見えた。

今も靜かに目を閉ぢて考へると、それがはつきりと見える。本當に私は迷つてはいけない、必ず強くなつて、世の中の總べてに、打ち克たなければならぬ。

雷にも地震にも、雨にも風にも火事にも、強盗にも病氣にも塵程も恐れない。死に直面しても、微笑んで天國へ還れるだけの、魂を持つて、迷ひなく純眞な愛

に正義に、生きなければならぬと考へながら、目を閉ぢると、猛火に包まれた阿修羅場の中に、未來の夫として信頼する瀧澤に抱かれて、末期の水に代へるべく、その全身を流れる生血を與へられて、世界一の幸福者と感謝し微笑んで、愛人の胸に縋つたまゝ、安らかに魂の天國へ還つた、千代子の有様を想像すると、堪らなく美し

い心持が致します。

何物にも代へ難き誠の喜び、それは世の中の一切のものを離れた、眞心の力でなくて何であるものぞ。若し將來に自分にも、人の妻とならなければならぬといふ、運

命が與へられるならば、總べての條件は顧みないで、唯真心の人を選び求め、自分も真心を持つて、其の人を絶對的に幸福にしやう。

夫だけでなく、親様も兄弟もその他の人々も、自分の真心によつて、幸福にして上げよう、それが求められない、又自分が捧げ盡し得られない位なら、一生結婚などしない、と固く心に誓つて、心秘かに永遠不滅に輝く、真理への道のみを心に求める様になりなりました。そして九月も過ぎ、十月も半ばになつて、野も山もいつとはなく、秋色を帯びて參りました。

或日突然河村夫人が訪れて、關東の震災の騒ぎで、何時となく忘れた様な形になつてゐた、俊夫と好枝との結婚問題について、その當時山田家の俊夫も幸夫も二人とも宿つてゐた下宿が焼けて終つたので、當分は夢中で過して來たが、三十一日見合をするために、上京を延した事が仕合せになつて、二人共命が助かつたといふ事から、これも何か、深い前世からの因縁だといふので、山田家の兩親も大變に力を入れて、國元の方の身元調べを致しました所、總べての點に言ひ分がないといふので、是非共頂ける様にと言はれるので、お願ひに上つたのだと言ひました。

道枝はその事を聞くと、早速春光に相談致しました。

春光もすぐに賛成したので、好枝の心持を尋ねて見る事になりましたが、何事も初めで總べての事は、父母や叔父叔母の意見に、委せるであらうと思つてゐたのが、意外にも好枝は

「外の事とは違ひますから、表面から拜見して、ごんなお立派な方でも、又ごんな結構な條件の備つてゐる方でも、本人の方の本當の人格と、お心持とを知るまでは、私は貰つて頂く事は出来ません。」

ときつぱりと答へましたので、道枝は一時は吃驚致しましたが、すぐに自分の過去に於ける、結婚前後の氣持を思ひ浮べ、自分達が勝手な考へから、半ば命令的に承諾させやうとした、無理解を恥ぢて、好枝の希望を河村夫人を通じて、山田家へ傳へて貰つて、双方の諒解を得て、結婚問題には觸れず、唯お友達といふ立場から、當分の間自由に交際して見て、その結果を待つ事に致しました。

俊夫も好枝の心持をよく理解し、自分としてもその方が、將來のために良いと信じましたので、快く屢々宮崎家を訪ねて、雑談に時を過したり、又時には光男と一緒に

に好枝を誘つて、散歩に行く様な事も二三回ありました。

かうして會見し、相接する機會が重つて行く中に、總べてに對するお互の人格性格常識趣味感情といふものも、双方共知り合ふ事が出来、心と心が歩み寄つて居るといふ事だけは、周囲の者にも分りましたし、俊夫自身にもそれは信ずる事が出来ましたのと、父母が

「何時までもそんなに、曖昧な態度であつてはいけないから、相當兩方の性質や思想や其他の事も分つて、結婚してもよいといふ事が、お互に思はれたら早く話を纏めた方がよい。」

と頻りに焦りますし、幸夫からも和子からも、喧ましくせき立てられます。

尤もそれにはそれ相當に、大きな理由があつて、一日も早く俊夫の婚約を結んで終ひ度かつたからでもあります。俊夫は兩親や兄弟から、餘りに促されますので、深く決心する所があつて、好枝の本當の心持を、直接聞き糺すべく、道枝の諒解を得て、初めて唯二人だけの散歩に、好枝を誘ひました。

日本ラインのほとり

満山唐紅に燃ゆる紅葉の錦が水面に倒さに映る繪の様な姿を眺め乍ら静かな水の流れを溯つてラインのほとりを、靜かに不老の瀧の前を通つて、人通りの少い栗栖の里の方に向つて、俊夫と好枝は語り乍ら歩いて行きます。

不老の瀧の邊りまでは、遠足に來た小學生や、秋の一日の行樂のために、ラインを舟で上り下する人達で、可成り人足繁く、賑やかでございましたが、此處まで來ると全く人影もなく、山の麓をポートで勇しく下る青年や、悠々と漕いで行く遊船、又後などが、繪の様に見えるのみであります。

日本一の景勝地として、世に知られてゐるだけに、流れる水の色、それを圍む岩の姿も、一種言ふべからざる奇勝又、壯觀を表はし、その左右を圍む山々は、宛ら千枚屏風を立て廻した様に連つてゐます。

「ここまで來ると、本當の山の美しさを感じます。どうですこの偉大な景色は……。」
「本當に綺麗でございますわね、紅葉は今が盛りでございますませうか。」

「さうです、もう盛りです、秋のライン下りは、大變良いといふ事を、僕も話では聞いて居りましたが、こゝまで来たのは初めてです。」

貴女はゐらした事がありますか。」

「いゝえ、私犬山までは来た事ございますけれど、こんな方まで来たのは、初めてでございますわ。」

「では船上つた事も、下つた事もないのですか。」

「はい、ございませんの一度も。」

「さうですか、じや歸りは船で犬山橋まで下りませうか。」

「はあ、結構でございますわ、船で下りましたら、此處で見るとより又、一層美しうございませうね。」

「え、それは又格別ですよ。」

と言ひ乍ら、又暫く歩いてから、

「好枝さん、僕が今日貴女の叔母さんから、お許しを受けて、貴女に御一緒に来て頂いたのは、外ではありません。少し貴女に伺つて見度い事があつたので、お願ひして

御一緒に来て頂きました。無遠慮にお尋ねしてもよろしいでせうか。」

それまで朗らかな心持で歩いてゐた好枝も、俊夫にそう言はれると、はつとして幾分顔を赤らめて、變に胸のときめきを感じ乍ら、努めて冷静に

「ごんなお話でも、お伺ひ致しますから、御遠慮なくおつしやつて下さいませ。」

とはつきり言ふと、今度は俊夫の方がござまぎして

「貴女にそんなに真面目に言はれると、お話がし悪くなりますけれど、貴女も御承知の通り、この間中から僕達は、親しくおつき合ひさせて頂いてゐるのですが、お互に二人の間柄には、友達としてのお交り以上に、立ち入つておつき合ひしてゐる譯ではないのですが、かうしてお親しくして頂く事になりました原因は、双方に理解が出来ましたら、結婚の約束をして頂くための、御交際であつたといふ事は、貴女も御承知の事だと思ひますが、此の間中からのおつき合ひで、僕も貴女といふ方を、大體知る事が出来ました通り、貴女も僕をある程度までは、理解して下さつた事だらうと思ひますから今日は貴女の本當のお心持を、聞かせて頂き度いと思ふのですが……。」

「私の心持と仰有いますと……」

「解りよく申しますと、御覽の通り僕は、こんな人間で現在の所では、これ以上良くも悪くもなれない、至つて平凡な人間です。けれども貴女は僕を理解して、將來苦樂を共にするといふお心持になつて頂けるかそれとも、そんなお心持にはなつて頂けないか、その事について僕はお伺ひ致し度いのです……。」

餘りに俊夫から卒直に、露骨に言はれたので、好枝は顔を眞赤にしながらか、
「でも私……そんな事まだまだ考へて居りませんから……。」

その横顔をじつと見凝め乍ら、俊夫は

「何故考へて下さらないのです。」

最初からそのお約束で、おつき合ひして頂いたのではありませんか。」

「はい、さうでございますけれど、まだおつき合ひさせて頂く様になつてから、二月もたちませんもの、貴方に私の我が儘も、缺點もその他全部、まだ充分分つて頂けないと思ひますから、せめてもう半年か一年、現在の様につき合つて頂いて、その上で本當に二人の趣味や性格が、一致致しましたら、その時こそおつしやる儘にさせて頂き度いと思ひますけれども、今では私、何とも御返事が出来ない様な氣が

致しますわ。」

「貴女がさう仰有るのも無理はありません。」

一月や二月つき合つた位で、又それも始終一緒に生活するといふのではなくて、たまにお目にかゝる位の事ですから、充分分らないと仰有るのは、御尤もだと思ひますけれども、昔から「つまづく石も縁になる」と言ふ通り、唯道で擦れ違つただけでもそれが因縁になつて、結婚する人があります。又同じ家に幾年も同居生活をして、婚約の間柄であつても、思はぬ事ら破れる事もあります。

長い間おつき合ひしたから、それだけより多く理解が出来るとか、又は交際が短かつたから、理解が出来ないといふ様なものではないと思ひます。」

「それはそうでございますけれども……。」

「結局貴女は僕の心を信じて下さるのか、どうかと言ふ事が先決問題になります。」

「貴女はどんなに思つてゐて下さるのです。」

「では貴方は……?」

「そんな事を僕にお聞きになるまでもなく、お分りになる事でせう。」

貴女に對して、眞實の眞心が持てない位なら、今迄交際もして頂きませんし、又今日こんな所まで、一緒に來て頂いて、こんな事をお伺ひしやしないのです。ね、さうでせう。」

「それならば私の心持でも、同じ事だとお考へ下さる事が出来ますでせう。」

貴方に初めから好意が持てませぬ様でしたら、私一度だつてお目にかゝる必要はなかつたのですもの。」

「それはそうです、その心持は充分分つてゐるのです。それならば貴女は將來をお約束して下さいても、良い譯ではありませんか。」

「だけごその事は、私一存ではお答へ出来ませんの、

兩親や叔父や叔母の御意見もある事でございますから……。」

「その方達の御意志なれば、もう確實に定つてゐるではありませんか。」

初めから貴女の御返事だけで、すぐに決定出来る事になつてゐるのですから……。」
「ですけれども、貴方ほごのお方でございましたら、私などの様な者より、もつとすつと立派な御聰明な方と、御結婚なさる事が出来るようになるのですもの。」

餘りお急ぎになつて、私の様な缺點の多いものをお選びになつて、却つて後で御後悔ばすといけませんわ。」

「そんな皮肉な事は言はないで下さい、

お互に大切な事柄ですから、眞面目でよく御相談して下さい、尤も今仰有るのが反對で、貴女は自身が僕の様な、平凡なものより、もつと立派な方と御結婚出来るといふ御自信があつて、好んで僕の様な者を選ぶ必要はないと、お考へになるのですしたら、それは止むを得ない事ですけれども、それでなくて貴女が、僕の様な者でも、信頼して下さつて結婚して下さいれば、僕は一切の眞心を捧げて、貴女を幸福にしようと思つてゐるのです。」

「その心持はよく分つて居ります。」

貴男の御性格や其他の事に就ましても私はこれ以上知る必要はないと思ひますの
貴方は屹度、私を最後まで愛して下さい方だと、信頼する事が出来ますので私
も貴方の御幸福のためには、總べての力を盡す事が出来ると信じます。

けれども只今急に、婚約するといふお約束は、致し度くないのでございます。」

「何故でせう？ 貴女が僕を理解し、信頼出来る者と思つて頂いたら、婚約して頂いても、差支へはなからうと思ひますが……。」

「それでは婚約だけで、結婚はおそいでございますか。」

「婚約を今年して頂けば、結婚は僕が學校を卒業して、歸つてからでなければ困りませんから、明年の三月になるだらうと思ひます。」

「さうすれば貴女も學校を御卒業なさる事が出来るでせう。」

「私學校は卒業出来ましても、結婚は明年春なんて、そんなに早くては困ると思ひますの。」

「それは何故ですか？」

「でも學校を出たばかりで、世の中の事も家庭の實際の事なども、少しも分りませんから、少くとも一年や二年は、叔母のそばで家庭上の色々な常識を、教へて貰はなければ、役に立ちませんのもので。」

「そんな事なら、ちつとも心配はありません。」

「僕一人の所へ来て頂くのなら、初めから何も彼も貴女に切り廻して頂かねばなりま

せんが、僕のうちには、母がゐますし、女中も置いてありますから、そんなに初めから何も彼も、貴女にして頂かなくても、母に教はつて、ぼつ／＼見習つて下さればよいのです。自分の親の事を賞めて變ですが、僕の母は若い時から父について、方々の官廳を廻つて、様々な階級の方とも交際して、色々な事に力を入れて研究してゐますから、處世上の事については、随分廣い知識を持つて居ります。」

「今でも婦人會や處女會の相談役とか顧問とか言つて、時々引つ張り出されて、色々世話をやつてゐる様ですが、至つて親切者で、人の世話をする事が、大好きな性質ですから、人からも相當信頼されてゐる位ですから、貴女が来て下されば、一生懸命になつて教へて呉れます。よく母は言ふのです。」

「幾ら骨を折つて、命をかけて仕入れても、お腹を痛めて生んだ子でも、外へ出した子は何の爲にもならない。」

「本當に心配と厄介をかけるだけだから、つまらないものだ。」

「今度嫁を貰つたら、自分で生んだ子だと思つて、命懸けで大事にして、何も彼もよく教へ込んで、外所から貰つた嫁だと思はれない位に、可愛がつてうちを圓滿にやる

と言つて、今から大喜びをしてゐる位ですから、来てさえ下されば、何も彼も母が教へて呉れます。却つてなまじつか色々いろくの事を知つてゐて貰ふと、理窟りくつが出て困るから、知らない方がいゝとさえ言つてゐるんです。

母は九分も十分までも貴女あなたに来て頂けると思つて、早や自分のうちの嫁よめに貰つて終つた様な氣で、貴女の事をあの子に来て貰つたら、かう言ふ風ふうにするとか、あゝ言ふ風ふうにするとか言つて、理想や計畫けいかくを立て、喜んでゐますよ。」

「まあ、さやうでございますか。」

と思はず感謝かんしゃに満ちて、微笑ほゑむ顔を見乍ら、

「貴女の叔母さんも、御如才ごぢよさいはないだらうけれど、どうぞ来て頂けるなら、一日も早く来て頂いて、母の傍かたはらで私の家獨特いんどくとくの家風かふうを覺おぼへて頂く方がいゝのです。」

「さう仰有つて頂くのは御尤ごもつともでございますけれども、せてめ明年めうねんの秋頃あきごろまでは、結婚こんは延ばして頂きませんと、私わたし困りますので……。」

「それまで延びたつてかまはないけれど、なるべくならば、卒業そつぎふしたらすぐに來て頂き度たい事情じぜうがあるのです。」

「事情じぜうと仰有おつしやいますと？」

「それは貴女あなたに關係かんけいした事はないんですから、お氣きを悪くして頂くいたゞと困こまりますから、まあ申上げないで止めませう。」

「まあ、仰有つて下さつても、よろしいではございませんか。」

でもお話しになつていけない事なら、伺うかはなくても結構けつこうでございますけれど……。」

「話をしたつて、何も差支さしつかへのない事ですが、別に必要ひつえうのない事ですから、申さない方がいゝと思ひますが……。」

「でも人の心こころつて本當ほんたうに變へんなもので、話さないはないと仰有つて頂くいたゞと、何なんとなく伺うかつて見たい様な心持こころもちが致しますわ。」

「ではお話しませう、それは外ほかではありませんが、僕卒業ぼくそつぎふすると熱田あつたの〇〇會社かいしゃへ勤める事ことになつてゐますから、兩親りうしんが言ふのに、獨身どくしんだとござうしても信用しんようが薄うすいから、卒業そつぎふしたらすぐに家内かないを貰もらつて身を固かためて、落着おちついて勤めなければいけないつて言ふのです。それと今一つは、或る事情じぜうのために、出來できるだけ早く僕ぼくに家内かないを貰もらつて、家庭かのきまりをつけ度たいといふ、これは兩親りうしんよりも妹いもうとが頻しきりに焦あせつてゐるのです。」

「まあ、何故お妹さんがそんなにお急ぎになるのでございませう？」

「それはお話にもならない様な、つまらない話なんです、妹が嫁に行つてゐる、鳴海の黒瀬といふ醫院に、宮子といふ今年十九才になる妹があるのです。」

その娘は相當に容貌も整つてゐるし、頭も聰明な人ださうですが、干支が丁度丙午に當つてゐるのです。そんな事のために、昔から丙午の女は夫の生命に祟るといふ様な、つまらない迷信が傳つてゐるために、世間の人が彼是言ふので、親達も心配して時々色々な事を言ふので、娘も自然に憂鬱な性格に出来上つて終つたのです。

それがために性質も天真爛漫として、朗らかなといふ所が少しもありません。

何時も何かを考へてゐる様な、陰鬱な感じのする娘です。

それを先方の両親が僕の妻に貰つて欲しい様な心持で、それとなく妹にそんな話をされるので、妹は餘り氣が進んでゐる譯ではないのですが、先方の親達の機嫌を害しては、自分が嫁としても居辛いといふ様な風に、自己中心の考へから、両親にも僕にも時々、出来るものならさうして欲しいと言つてゐたのです。

しかし父は相當現代の時勢も理解してゐる人ですけれども、矢つ張り因襲的の迷信

に囚はれて、丙午では困ると言つてごんな事にも承知しないのです。

それに僕は又干支は何でも、そんな事は塵程にも心にかけて居りませんが、娘さんのあの性質では、とても來て貰つた所で、家庭が暗くなるばかりでやり切れないから義理づくで勧められても、それだけは御免を蒙ると言つていつも斷つてゐたのです。

それに體も人並より弱さうで、何時も病氣する事が多いさうですから、どの點から言つても、見込みはないのです。

妹が中に入つて、可成り長い間、色々心配をしてゐたのですが、幸ひに七月頃京都の大學を出た工學士で、相當立派な人から縁談の申込みがあつて、その人と婚約が出来たさうですから、みんな僕の事なんかは、すっかり忘れて終つた様に、其の方に夢中になつて騒いでゐるさうですが、それが矢張り來年の三月に、結婚式を擧げるさうですから、丁度幸ひにさういふ風に、先方が都合よく縁談が纏つた時に、こちらでもはつきりと婚約をしておいて、三月に結婚式をして終へば、向ふにごんな事情が起つても、二度とそんな問題も苦情も起らないんだから、一日も早く、婚約して下さいと言つて、妹が頻りに頼むのです。

だから両親も尙更あはて、終つて、とても急いでゐるのです。

好枝はちつと、うつむいて聞いてゐましたが、

「私そんなお話を伺ふと、何だか宮子様といふ方が、お可愛さうな様な気がしてなりません。そんな丙午が悪いなどと言ふ事が、本當にあるものでございませうか。」

「そんな馬鹿な事があるものですか。そんな事は全然根據のない、迷信でありますから、僕はそんな事を父が申したつて、それで彼是言ふのではありません。

けれども僕はごうしても、あの人の様な性格では、氣に合はないんですから、義理が悪くてもごうする事も出来ないのです。」

「それでは御性格が、お静か過ぎるのでございませうか。」

「さあ、静かなと言へば、大變耳あたりがいののですが、悪く言へば何となく陰氣で、その娘と一緒に座つてゐると、自然に淋しい様な暗い氣持に、引き入れられて終ふ様な氣がして來ますね。僕は御覽の通り、何でも明るい氣持で、賑やかに暮し度い性分ですから、陰氣な性格の人とは、友達でも氣が合ひません。」

「本當に貴方はさうでゐらつしやいませう。」

さういふ風でしたら、仕方がございませぬわね。」

「對絶に駄目です、無理に貫つた所が、ごちらも不幸になりますから。」

「御尤もでございます。それでもその娘さんは、御都合よく御話がおまごまりになつて、よろしうございましたわね。」

「まあ、今の所では、大變都合よく行きさうですが、因縁がないと又どんな事に向ふの縁談が、違つて來ないとも分りませんから、絶対に安心も出來ません。それは誰でも同じ事ですけれど……。」

「それでは今度御婚約をなすつた、向ふの方は、干支の事なんか、ちつとも御氣にしてはゐらつしやいませぬのでせうね。」

「さうでせう、現代の教育を受けた人ですから、そんな因襲的な、迷信に囚はれる様な事はないでせう。」

「本當にさうだと結構でございますが……。」

私本當にその方の、御將來の御幸福を、心から祈らせて頂きますわ。
丙午の干支の人は、主人に祟るなごゝいふ事は、全くいはれのない迷信でございま

すものね。」

「勿論迷信ですよ、昔の人はよい格言も諺も、澤山残して居りますが、悪い迷信も又澤山残して、無知な人達を迷はせるので困つたものです。」

「私丙午の干支が悪いと言ひ初められた、迷信のもどのお話を、つい先日或る書物で見ました。それにはこんな事が書いてございました。」

和宮様も丙午であらせられて、色々な御事情のため、止むを得ず徳川家へ御降嫁になりました。間もなく背の君様に當らせられる、徳川家茂公が早く亡くなられて、和宮様は若盛りで、未亡人におなり遊ばされて、髪まで下してお終ひになりました。

餘り和宮様が世に知られた、御高德のお方様でありますから、その方が丙午であつたために、そんな事を誰言ふとなく言ひ出したのだ、今一つは芝居や浄瑠璃でよく致します、八百屋お七も丙午だと言はれて居りますので、不幸なものは皆丙午である様にしてしまつて、因縁をつけたのでございます。

丙午の方は本當に、みんな運が悪いのかと思つて、よくおちい様やおばあ様に聞いて見ましたが、却つて性質は清らかで、外の干支の人より運がよかつた人が多いと

言つて居りました。丙午でない人でも、随分早く親にも別れ、子にも別れ夫にも別れて、苦勞する人が幾らでもございますもの。

丙午だけに悪い因縁をつけるなんて、ひどいと思ひますわ。

貴方がその方の御性格が、お氣に召さないと仰言るなら、ごうする事も出来ませんけれども、若しお父様の仰有る様に、干支を氣にしてゐらつしやるのでしたら、是非御結婚なすつて頂く様に、私からも願ひし度いのですけれど……。」

「それは貴女から言はれるまでもなく、僕は決して丙午の事など、塵程も心にかけては居りませんから、それだけの事なら早速貰ふのですが、僕の好まない原因は、干支ではなくて、體質と性質なんですから、ごうも致し方がないのです。

しかしそんな事も、今となつては問題ではありません。

さうした譯があるものですから、貴女のお心持を伺つた上で、成る事なら今年の中に婚約しておいて、明年の春婚禮式を擧げて終ひ度いと思ふのです。

僕の方からこんな勝手な事を申しては、失禮だと思ひますけれども、貴女が眞實に僕を理解して下さつたら、豫め御承諾して頂き度いのですが……如何でせうか。」

好枝はさう言つて、突き詰めて問ひかけられると、何とも言はれなくなつて、唯うつむいて、何とも返事をしませんでした。俊夫はいよ／＼焦つて、

「それとも貴女は、まだ本當に僕を、心から信用して下さらないのですか。それなら止むを得ない事ですけれども。」

と少し興奮した面持で、言葉せはしく問ひつめますと、

「その御返事は、今暫く御待ち下さいませんか。」

「暫くつて、何時頃まで待てばいゝのでせうか。」

「それもこゝで今はきつりとは申上げられませんが、そんなに長くはお待ちせ致さないつもりで御座居ます。」

「分かりました。ではもうこんなお話は、これで止めにして、何時もの様な、明るい氣持になつて、愉快に遊んで歸りませう。」

「はい 本當にさうして頂きませう。」

と二人は重苦しい、行き詰つた様な氣分から、明るい朗かな氣分に歸ると、足を早めて歩き出しましたが、桃太郎出生地のあとを探り、桃太郎神社に詣で、栗栖の里から

一艘の小船を買ひ切つて、それに乗りました。船は瀬に添つて、さら／＼と川下へ流れる様に走つて參ります。船頭は川底へ棹さし乍ら、色々説明をして聞かせます。

「お客さん。昔はよくこの邊りで、筏が岩につき當つて破壊れて、よく人が死んだものです。この頃では餘り筏は流しませんが、その代り春から秋にかけて、ライン下りのお客さんがありますので、随分賑ひます。」

「君、こゝういふ船が覆つた事はないか。」

「ありますとも、ついこの間もこの下流で、船が破壊れまして、三人亡くなつて終ひました。」

好枝は一寸驚いて、俊夫の方に寄り添ひ乍ら、

「まあ 怖いことを仰有るわね。船頭さん私氣味が悪いわ。」

「君、そんな事を言つておどかさなよ。女は氣が小さいから怖がるからハハハハ、。」「アハハハハ、この船が若し覆つても、貴女方は好いた同志だから、結構ですけれども、私は一人でつまりませんから、決して覆す様な事はしません。」

どうぞ御安心なすつて下さい。」

「皮肉な事を言ふなよ 君、これは僕の妹なんだよ。」

「さうでせうね、この頃は毎日妹さんをつれたお客さんが、随分澤山遊びにお出でになりますよ。」

「さうかね、アハハ、、、、。却々各地から、いろ／＼なお客が遊びに来るだらうね、景色がとてもいゝから……。」

「來ます／＼。もう紅葉も終りですけれど、この一月ばかりの間は、東京方面からも澤山ゐらつしやいましたし、京都や大阪の方からも、澤山團體で來られて、船など全部出切つた日が、大分續きましたよ。」

「さうかね、矢張りこの景色は、全く素晴らしいからね。」

日本ラインの名にあこがれて、遠くから來る人が多いたらうね。」

「さうですよ、私達の様に毎日、何遍となく上つたり下つたりしてゐますと、何處が、いゝのか山を見ても、岩を見ても、ちつともいゝとも何とも思ひませんが、いつもこの邊りを通る時には、都會から來たお客は、皆手を叩いて喜びます。そりや面白いですよ。」

こんな話をしてゐる中に、船は清らかな山の裾を縫つて、間もなく犬山橋の乗船所へ着きました。二人は船頭に船賃を拂ふと、大道へ出て暫く歩いてから、タクシーで名古屋へ歸りました。好枝は自動車、古知野邊りを走る頃、急に言葉を改めて、

「あのさつきお約束しました事の、御返事を致しますわ。」

突然好枝にさう言はれて、俊夫は吃驚し乍ら、

「えゝ？ それは何の事でしたせう？」

「お忘れになりましたの？ あんなに仰有つて居らした事を。」

俊夫ははつとして、少しのみすまいを直すど

「あゝさうでした、ではお伺ひませう。」

「私……両親や叔父や叔母が承諾して呉れましたら、貴方の仰有つて下さる通りに、

お願ひしてもいゝと思ひますの。」

「あゝさうですか。では貴女は、御承知下さるんですね。」

餘り俊夫が聲に力を入れて言つたので、運轉手が思はず振返つて後を見たので、好枝は顔を赤らめて、うつむいて終りました。俊夫はさも安心した様になつたりとして、

「でもさつきは貴女、あんなに言つてゐられたのに、どうしてそんなに早く御決心が
つきましたの？ 僕は又一ヶ月も待たねばならないかと思ひましたよ。」
「私船に乗つて川を下ります中に、何だかそれが本當に、人生といふ長い川を、貴
方と御一緒に流れて渡らなければならないといふ、兆しの様に思ひました。
そして大きな目に見えない自然の力か、私達をさう言ふ運命に導いて、同じ船に
乗せられた様に思ひますの。」

あの船に乗つてゐた時の氣持の様に、絶對的に私は、貴方のお力に縋らなくては、
安心して生きて行かれない様な氣持を、心の奥に深く感じたのでございます。」

「あゝさうですか。矢張り今日の日が来るまでは、二人の本當の心持が相接して一つ
心に融け合ふ事が出来なかつたのです。」

その意味に於て、今日のライン下りは、永遠に記念すべき日ですよ。明春結婚の式
を挙げましたら、又ラインに来て船で下つて、又違つた意味で楽しく遊びませう。

その頃にはあの岸の櫻が綺麗に咲いてゐませう。」
と語り乍ら、本當に満ち足りた幸福な心持で、二人は絶對的に信賴する事の出来る人

生の同伴者を與へられた事を、深く心に感謝しつゝ、半ば夢見る様な心持で、叔母の
家に歸つて來ました。

俊夫は好枝を宮崎家へ送り届けておいて、そのまゝ我が家へ歸りましたが、間もな
く話は順調に進んで、師走半ばには、吉日を選んで結納の取交せもすまし、その翌年
の三月廿八日に、婚禮の式を擧げる事に決定致しました。

女の道

一旦は大震災のために、廢滅に歸した學校も、バラツクの假建築ながら、授業が出
來るまでになつたので、俊夫も好枝も上京して、最後の勉強を續けましたが、三月半
ば頃には、二人共目出度く學校を卒業して、俊夫は稻澤の生家へ、好枝は名古屋の叔
母の家へ歸つて參りました。

好枝が何時も自分の部屋に與へられてある、八疊の間に入つて見ますと、その中は
座る事も出来ない程、色々な衣類や装身具や小道具等、一杯に擴げてありまして、次
の間には箆笥だの長持鏡臺その他の道具が、一杯に積み込んでありますので、吃驚し

て終ひました。叔母の家には、故郷から両親が揃つて出向いてゐて、色々な準備のため、大忙しの有様です。好枝はこの様を見て思はず驚嘆して、

「まあ叔母さん。これはどうした事なんですか？」

「こんなに色々な物を一杯に擴げたりして……。」

道枝は笑つて

「お前はまあ、何て呑氣なんでせう。そんなに人の事みたいな事を言つて……これはみんなお前が、お嫁に行く時に持つて行く、仕立物やお調度品じゃないの。」

好枝は呆れた様に、眼をバチ／＼し乍ら叔母の顔を見て、

「叔母さん。それは本當？ これ私のなんですの、

まあ驚いた、何故こんなに澤山、色々な着物や道具を持つて行かなければならぬのでせう。うちの方では箆笥二つに、布團一組と、鏡臺と長持があれば、上等の仕度でございますわ、ねえお母様。」

それなのに、どうしてこんなに箆笥を四つも買つたり、長持を二つも買つたりしてその上色々小道具なんかまで、持つて行かなければならぬのでせう。

「こんなに何本も箆笥を買つたりして、着物を一杯つめるのに大變でせう、どうしてこんなに澤山買つたんでせう。」

「それはお前、中が空ではいけないから、お金は澤山かゝつても充分詰めなければ持つて行かれやしないのですよ。」

「そんな事したら、着物の仕立だけでも大變でせう。」

「それやお前、品物によるから、お金をかけようと思へば、帯一本だつて千圓以上もするものもあるし、根掛一つ、簪一本だつて、何百圓でも何千圓でもかゝるんだけれどそんな冗な事をして、お金を使ふのは勿體ないと思つて、色々と考へて、成るべくお金をかけない様に、仕度をしたのだけれども、まだあれもこれもと言つて、思ひつき思ひつき買ふうちに五千圓の金も使つて終つたつて、お父さんが仰有つたんですよ。」

「まあ、そんなにお金をかけて、こんなに買つて下さつたんですか。私はこんなに澤山なお金をかけて、道具や着物を買つて頂いて、持つていかなければお嫁入りが出来ぬ位なら、貰つて頂くのじやなかつたんですわ。」

「まあ、お前はこうしてそんな事を言ふの？」

「だつて叔母さん、私今迄お嫁入りと言へば、人間を主にして貰つて頂くんださう思つてばかりゐたんですもの。」

だから私、色々な事を考へてゐたんですけれど、こんなに色々なものを持つて行く位なら、まるつきり人間よりも、仕立や道具が主になつてゐる様で、結婚する意義も張合もない様な、嫌な氣持が致しますの。」

「お前がさう思ふのも尤もだよ。私も實はそれをおもつて、結婚は人間本位で、人間と人間が深い因縁によつて結びつけられて、長い一生を苦樂を共にして、幸福に生きるための自然の法則なんだから、お互の精神が正しく理解し合へば、それで結構なんだし、式は世間に披露すると共に、神様に御報告するために、行ふものだから、その時だけ木綿でも絹布でも、禮式に叶つた紋服であれば、それで充分なのだから、昔とは世柄が變つて、成るべく物事は簡略にして、冗な費用は節約するといふ事を、尊ぶ時代になつたから、昔の様に一代着る程の物を持つたり、又婚禮の日に何回も着替へをする様な事は、無駄な事だから、止めようと思つて、色々川村さんにも相談して見たんだけれど、こちらの思ふ通りにはかりも行かないんですよ。」

色の變つた派手な小袖なんか、ごうせ後では着る時がないんだから、そんなのを數多く買ふより、式に着る着物だけは、一組きちんと造つて、それですまして、平常着や外出着なども、澤山一時に造つておいても、今はすぐに流行が變つて終ふから、二年か三年向ふへ行くと、出して着られなくなつて終ふから、何時までおいても流行の變らぬものは、いゝのだけれど、さうでないものは、當分着るだけ造つておいて、若しお前のために與へたいと思つたら、豫定したゞけのお金を、小遣ひとして持たせておけば、利子だけでも一代流行の物を着て居られるし、そのまゝないものとして預け放しにしておけば、二十年もたてば二萬圓にもなるのだから、子供の教育位はうちの財産に手をつけなくても、樂に出来るからと、仕立をする事には、主人も大分反對したんだよ。

そしてお金で持たせる様にと言つて、お父さんやお母さんにも勧めたものだから、さういふ風にしたと言つてゐらしたけど、川村さんの奥さんが何遍もゐらして、山田さんの方のお母様の御意見では、一旦嫁に貰へば自分の子供だから、小遣ひだつて着物だつて充分與へて決して不自由はさせないし、孫がどれだけ出来ても、教育に困る

様な暮しの家ではないから、成る可くなら仕立てにして貰ひ度い。

それは何のためかと言ふと、お父様の交際が廣いので、相當に立派なお客も來るし親戚も澤山集るし、町の有力者も澤山招待するのだから、さういふ人達にも見られるし、それに今度田舎の方の、お金持の家から、お嫁さんが決つたといふ評判なので、近所では、どんな立派な仕度であらうと言つて、みんな騒いでゐるさうだから、一代に一遍しか貰はない長男の嫁の事だから、出來ないお宅なら仕方がないが出來る力があるのだから、出來るだけ見苦しくない様にして頂き度い。と仰有るからと言つて、川村さんが度々ゐらつしやるものだから、お父さんもお母さんも吃驚して、

「そんな筈ではなかつた。それ程仕度のいる處なら、始から遠慮して斷るのだつた。」と言つて、色々心配して、皆で相談して見たのだが、結納も五百圓受取つてゐる事だし、今更そんな事を言つて、斷る譯にも行かないのだしするからと、困つて終つたんです。それで兎に角習慣も違ふ事だから、どうしていゝか分らないけれども、出來るだけ質素にさせて頂き度いといふ事を、呉々も頼んで、大體どういふ様な袷数を調べ、

又調度品の數も豫め伺つて頂く様に頼んだら、川村さんが行つて下さつて、向ふからこんなにかき出してお寄越しになつたんですよ。

一寸まあ見て御覽。」

と言つて、道枝が自分の机の抽出しから、幾枚かの紙に書き出した仕立の書き出しを渡しますと、好枝はそれを手に取つて、始めから終ひまで全部眼を通しましたが、「叔母さん。私何だかお嫁入りする事が、厭になりましたから、止めさせて頂けませんか。」

道枝は呆れて、

「まあ お前、今更そんな事を言つたので、そんな事が出來るものですか。

こんなにかき出すつかりして終つてから……。」

「ではもう全部この通りに買つて下さつたの？」

「大體はもう買つて終つたと思ふがね。」

でもまだいざとなつて、足りないものが澤山あるだらう。

これからは向ふの御兩親やお婿さんや、弟さんや妹さんへのお土産や、お客様

や御近所へ配るお土産を、買へばいゝ事になつてゐるんだが、それもお前夫々に、御注文がなか／＼むつかしいのだよ。御親戚やお客様や、近所へ差上げるお土産も、本當の錦紗の風呂敷に、松竹梅の模様を染めて、その中に大きく壽といふ字と、又小さくお前の名前を染め込む様にと仰有るのだから、一枚二圓以上かゝるので、風呂敷だけでも二百圓の餘もかゝるのです。

それにお宅の方へのお土産は、お婿さんには百圓近いものを持つて行かなければならないし、他の方にも三四十圓宛の反物位は、持つて行かなければならないさうだしお料理人の祝儀とか、その他色々の雑費を入れると、まだ五百圓位はかゝるんですよ。だからお父さんが、うちの方で嫁入らせたら、こちらのお土産と雑費だけで上等のお嫁入りが出来るのに、大變な事になつたと言つて、滾して見えるんだよ。餘り何度もお父さんが、在所へお金を取りに行くものだから、お祖父さんやお祖母さんも吃驚して、

これじや好枝のお嫁入り支度のために、林を賣らねばならなくなつた。と言つて騒いで見えるさうだ。

それでお母さんは何と言つても女だから、氣が小さいので、これまでになつたんだから、僅かの事でお前に恥をかゝせ度くないし、そんなにお金がいつてはうちが大變だからと言つて、見てゐても氣の毒な程心配して、若しお金が足らなければ、内緒で自分の貯金を出して買ふんだなと言つて、嫁入りしてゐらつしやる時に、里から持つてゐらした古い通帳など出したりして、そんな事を言ひ乍ら心配してゐらつしやるんですよ。本當にお氣の毒になつて終ふ。」

好枝はそれを聞くと、大きな涙を、ほろり／＼と膝の上に落して、

「本當に私は親不孝者でございます。」

これまで何一つうちのためにならず、親孝行もしないでおいて、お金ばかり澤山出して頂いて、色々心配かけた上に、又お嫁に行くためにと言つて、こんなに澤山お金をかけた物を頂いて、みんなに御心配かけたりして……。」

「そんな事は別に心配ないじやないか。何も病氣でお金を使ふとか、思ひもよらぬ災難でお金を無駄に使ふのなら、惜しいとも思ふけれども、可愛い娘のために、假令勿體ないにしても、ごうやら都合のつくお金で仕度をするんだもの、親としては當然の

事だよ。

それで私達は、これでお前が圓滿に向ふへ行つても、治つて呉れさえすれば、何でもないんだけれども、若し不縁にでもなつて歸つてでも来る様な事が出来た場合はそれこそ本當に無駄になつて、後で始末しようと思つても、五分の一のお金にもなるものじやないから、どうかして無駄にならない様に、治つて呉れ、ばい、と思つて、そればかり願つてゐるのだよ。」

何彼と、忙しく立ち働いてゐた好枝の父が、いつの間にか来て、靜かに煙草を吸ひ乍ら、しみりとして言ふと、道枝も、

「本當にお前、私達も今はその事ばかりを心配してゐるんだよ。」

こんなにしてお前に山田家へ行つて貰つて、萬一の事があるよ、私が第一に祖父さんお祖母さんにすまないだけならまだいゝのだが、親類や、近所の手前も恥づかしいから、もうその事の心配で一杯なんですよ。」

好枝は悲しさに、ちつと邊りを眺め乍ら、二人の言ふ事を聞いてゐましたが、

「叔母さん、私貴女がさう仰有るから言ふのではありませんが、折角こんなに御心配

かけておいて、そんな事を言つてはすみませんが、私何だか色々かうして考へて見ますと、折角お嫁にやつて頂いても、何だか機嫌よく、おいて頂けない様な気がしてなりません。」

「何故？ どうしてそんなに思ふの？」

「でもお母様が、そんなに世間態とか近所の方の前とか、御親戚の前とか言ふ様な事を、お氣にかけてゐらつしやる様だと、萬事がさういふ風で、私の様な行届かない者は、とてもお母様のお氣には入つて頂けない。」

直きに内輪もめが出来て、離縁にでもなつて、叔父さんや叔母さんの顔に、泥を塗る様な事が、出来はしまいかと思ひます。それでそんな事になる位なら、今の中に義理は悪くても、斷つて頂く方が、よくはないかと思ふのです。」

「いゝえ。そんな事は決してないよ。」

そりや向ふのお母様が、世間を廣くお歩きになり、社交界でも立派な方々と、派手におつき合ひになつたんだから、幾分表面を飾つて、人にも成るべく立派に見て貰ひ度いといふ、虚榮に近い様な心持は、おありになるか知れないけれど、それとてこち

らに、それだけの力がなければ、そんな事も仰有らないでせうし、又そんな場合なら自分の處で内密に金を出して買つてども、人前を造り度いといふ様なお考へを持つてゐる方らしいが、それも矢張り子供が可愛いのだ、自尊心の強い結果だと思へるので、それかと言つても、形式だけの方じやない。

心から眞剣でお前を可愛がつて仕入れて、人に自慢する程の嫁に仕上げようと言つて、夢中になつて楽しんでゐらつしやるさうです。

さう言ふ事を聞いて見ると、決してお母様のお心持を、悪く取つては勿體ないと思ふのよ。私の思ふのは、僅か唯一日や二日の間の、一邊の披露のために、こんなにお金をかけるより、お金のまゝでおいた方が、後のためによいと思つただけだ……それに私は假令百圓でも結構だから、向ふの小學校か又は青年會か處女會へ、教育事業の基本金とでもして、寄附してお土産代りにすればいい記念になるし、教育事業奨励にもなるからと、お話申上げて見たんだけれど、それは他家のお嫁入りには例がない事だから、うちからさう言ふ事をしては、他家の顔を打つ事になるから、止めて欲しいとお断りがあつたのです。例がないからこそ、尙更先例になつてよいと、私は

思つただけで、ごうもこちらの意志が通じないから仕方がないのですよ。

向ふへやるのですから、こちらの意見は通らないのが當り前ですけれどね。」

好枝はこれを、一々うなづいて聞いてゐましたが、

「でも私……何だかこれから先、向ふへ行つてからの事を考へると、不安でならない氣が致しますの。」

「そんな事思はなくてもいい事だよ。」

假令仕度の事はごうだつて、結婚はお前がするんだから、仕立なんかはそれに附随したもので、それが多からごうとか、少からごうとかいふ様な事で、問題なんか起りはしません。

假令仕度を充分にして貰つたからと言つても、又實家からはお前の欲しい位の小遣や、時の流行の着物位は、不自由させない様に貰つて上げるから、折角みんなしてこれまでになつたんですから、お前は機嫌よく行つてお呉れ。

お前が機嫌よく行つて呉れさえすれば、みんなは何より喜ぶのだから……。それに何より肝腎の、俊夫さんはしつかりして見えるし、勤め先も定つてゐらつしやるんだ

から、行く末は安心なものだから、その點は結構だと思つてゐるのよ。」
道枝にさう言はれると、好枝も漸く不安に曇りかけた心持が、からりと晴れて、もとの朗らかな氣持に復る事が出来ました。
その夜は兩親や叔父叔母と共に、幸福に満ちた心持で、卒禮祝ひにと道枝が、尾頭付きの鯛を、みんなの食膳にも載せたので、一層喜びに満ちた夕食を済まして夜の更けるまで楽しく雑談を續けました。

嫁ぎ行くために

それから慌しい日が五六日過ぎて、愈々結婚も明後日に迫つた日の夕方になると、殆ど支度は萬端調つて、荷物一切も山田家へ送りつけられて終ひました。
當日にはもう好枝の支度をして、自動車で輿入れをすればよい事になつて居りますので、その翌日になると、四五日前から顔の手入れや髪の手入れのために、毎日通つて世話をした附女の人、今日は朝から参りまして、假の衣装附をするために一生懸命になつてゐます。道枝も母の房枝も、明日の晴れ姿を、少しでも立派にして出

し度いと、御飯を食べるのも忘れて、夢中で色々世話をやいて居ります。

時々春光や好枝の父も部屋を覗いては、嬉しさうに時々冗談を言ひますので、

「オホホ、、、。」

「アハハ、、、。」

と皆一緒に大笑ひして、部屋中はどこでも陽氣でございます。

念に念を入れて結つた髪も立派に出来上り、お化粧の方も下からすつかり手を盡して致しましたので、夕方までには丸つきり、見違へる様な美しい花嫁に出来上りました。お父さんやお母さんは、如何にも満足さうに、前へ廻り後へ廻つて、にこくし乍ら眺め入つて居ります。春光は

「兄さん、御自分の娘でも、かうして作り上げて見ると、見違へる位でせう。

他家からひよつこり入つて來られたら、貴女様はごちらからお越しになつたのですかなんて、お聞きになるか知れませんが。」

「アハハ、、、。本當だ。女は髪結び方や、化粧の仕方でもまるつきり化けて終ふから、一寸お酒にでも酔つてゐるときは、自分の家内や、娘を見違へて、頭を下げ

る位の事はありさうですね。」

「まさか……、自分の家内に挨拶する程の間の抜けた人もないでせう。」

「それだつて分らないよ。」

宮崎は又笑つて、

「姉様、もう一度二十年前にかへつて、高島田に結つて、お化粧して御覽なさい。

兄様が吃驚して、ごちら様から……？　なんて仰有るかも分りませんよ。」

「まあ、あんな冗談を仰有つて……。」

ど和氣霽々の中に、夕飯も終へて、みんなが好枝の部屋に集つて來ますと道枝は容を改めて好枝に言ひました。

「ねえ　好枝、今迄に色々のお話は全部してあるから、今更改めて言ひ聞かすといふ事はないのだけれど、お前が娘として此の家にゐるのも、もう今晚限りで、明日は重い責任を持つて、山田さんの方へ行くのだから、最後の言葉として、氣のついた事だけ話しておき度いと思ふのよ。

それにお父さんもお母さんもゐて下さるし、叔父さんも一緒にゐらつしやるのだからこんないゝ時はないと思ふので、私だけではなく、お父さんお母さんからも、叔父さんからも充分聞かせて、貰つておくがいゝと思ひます。」

「はい。」

「此の頃世の中が進んで來るに従つて、みんなが我儘になつて、親のある所を嫌つて假令財産はなくて、貧しい持合財産でも次男の所か、又は親の面倒や弟妹の世話をする必要のない所へ、お嫁入りし度いといふ様な考へになつて、眞に人情が輕薄になつて來た事は、お前も氣がついてゐるでせう。」

「はい。」

「それはごういふ譯かといふと、何等理由のない事です。」

夫婦二人切りで、我儘勝手な暮しがし度いといふ、横着な心から、そんな事を望むのですが、凡そ世の中の人で、親のない子はないのだから、親のある家へ嫁いで行つて、親に仕へ兄弟の事も親切に世話して、みんなを幸福にしてよい子供を生んで育てその家と又國の相續者を立派に仕上げるのが、女の眞の道であるといふ事は、間違ひのない事實です。我儘勝手がし度いために、好んで親のない處を選ぶといふ事は、全

然間違つてゐる事なのです。」

「はいさうでございます。」

「さうは言ふものゝ、此の頃の若い人達が、親のある家庭を嫌つて、親のない處へ行き度いといふ事を願ふのも、一概に我儘勝手がしたいためばかりと言つて終ふ譯にも行かない點もあると思ひます。」

それは日本の家庭は、世界に誇るに足る程の、立派な家族制度になつてゐるのだけれども、昔から随分嫁姑の間柄が、利害關係や感情問題や、嫉妬心といふ様なものゝために、いつも悶着を起して、暗い家庭を造り出して、お互に疑ひ合つたり、蔭口を言たり罵り合つたりするといふ様な、ひどい事もあつて、他人様に恥をかい、時々仲裁して貰ふといふ様な事があつたり、それが尙一層ひどくなると、離縁話まで持ち上つて、大騒ぎをして、それがために、婿さんは一方は血肉を分けて親なり兄弟なり、一方は一生苦樂を共にするために、一身同體の誓ひを立て、親しみ合つてゐる妻との間に立つて、随分苦んだり心配したりする方が、世の中に澤山あります。そんな場合夫が親兄弟につけば、子まである妻を離縁して、罪もない我が子を、一

生不幸にする場合もあります。

又妻の方へつければ、天地にかけがへのない、海山以上の恩の深い父母、血肉を別けた兄弟にそむいて、自分に家を出たり、又親を隠居させたりして親不孝の子となる事も、世間にはよく見受ける事ですわね。」

「はい。」

「さういふ事は、ずっと昔からあつた事で、よく子姑は鬼千疋に當るなどと言ふ、悪い言葉も傳つてゐます。ごうして嫁が來ると、そんなにその家庭が暗くなつたり、難かしくなつたりして、みんなが不幸になるかと言ふと、それは總べての人が人間として持たねばならぬ、心懸けの根本が違つてゐるからだ、私は思ひます。」

親にして見れば、息子や娘は自分の腹を痛めて生み、苦勞して育てたのだから、眼に入れても痛くない程可愛い。

人の子の死んだのを見るよりも、自分の子の轉んだのを見る方が、身に浸みて悲しいといふ程、自分の子の愛には引かされるのに、嫁は人が生んで人が育てた子だから可愛いと思へない。

自分の息子と娘とは、結婚させておけないから、厭々ながら娘は他家へ嫁入らせて他人の娘をうちへ貰ふんだ。といふ考へから、我が子の事は可愛い〜で、心が迷ふから、どんなに行届かない娘でも、親の眼から見れば、上出来に見えて、嫁はどれ程行届てゐても、する事なす事、一々悪く見えて、叱言を言はなければ我慢が出来ない。といふ様な氣持になるのが、家のもめ出す原因になるのです。そこが考へ所です。そんな心持でなくそれを裏返しに考へたら、嫁姑の間柄は、うるはしいものになると思ひます。先づ自分の子供の事から考へて、十月十日の間お腹にゐるうちの事から、大きくなる迄の、數へ切れない程の世話を思ひ、子供一人を育てるには、並大抵の心配や、苦勞では育たない。

それが育つのは、親は子が可愛いから、自分を忘れて、一生懸命で世話をするからこそ育つものだと思へば、自分だけでなく、ごこの娘も同じ事、嫁に貰つたその嫁の親も、矢張り自分と同じ様に、片時も忘れないで可愛く思ひ、仕合せになる事を命懸けで祈つてゐるんだから、それを思へばその嫁に對しては、始めて入つた家庭では實家と違つて、萬事が家風と共に違ふんだから、懇ろに教へて、何も彼も満足に出来る

様にして、安心して可愛い息子の一生を托し、又可愛い孫を生ませ、御先祖のお祀りも行はせ、自分に年が寄つてから成るべく親切に面倒を見て貰へる様に心がけて、生みの我が子以上の心持で、嫁に親切にしておけば、嫁もその真心を汲み取つて、生みの親よりも、舅姑を大切に、我が血肉の兄弟達よりも、小姑達を一層深く親愛して世間の人も羨む程、圓滿に治り家運も榮える様になるのだが、情ない事には、本當に宗教的の信仰がないために、

「己が〜」

の慾に迷つて、人の子と我が子との差別を、深くつけすぎるために、家内中みんなが不幸になるのです。

これが本當の信仰があつたなら、假令生れる時には、別々の親の子として生れて來ても、その生れる前には、同じ親神様から別れて來た事が分ると、人間だけではなく、總べてのものに對する區別も、それ程極端に考へなくなつて、馬鹿慾とか強慾とか言ふ様な、見苦しいものがなくなつて、人の心が應暢になるんだが、眞の信仰的の悟りが眞心に開けないと、物の慾に迷つて、少しの物でも自分のだとか人のだとか言つて、

争ひを始めるのですが、私がいつも繰返し／＼みんなにお話する事ですが、世の中の
人の中には、物持もあれば貧しい人もありますが、澤山金や財産を持つてゐるから、
自分は富んでゐると言つて、威張るのも迷ひだし、又自分は貧しいと言つて悲むのも
迷ひです。ごんなお大盡も貧しいものも、生れる時は裸でした。

何代前もの先祖に溯つて調べても、皆裸で生れた人ばかりです。

これだから、ある者もない者も、命が終つて終へば、何一つ持つて、後の世へ引越
せるものではない。さうすれば自分の髪の毛一本でも、最後まで自分のものだと言ひ
切るものは、ない筈ですから、それを考へると、よく分ると思ひます。

學者がごんなに研究して、ごんな機械を發明して、文明開化の世になつたと言つて
威張つて見た所が、それも自分一人の力ではありません。

昔からこの世にあるもので、人の知識が進まぬために、分らぬまゝに隠れてゐたの
が漸く研究の結果、見付けて、人間の生活上に活用する様にしたといふだけで、それ
以上の何の力もないでせう。さういふ風に考へて見ると、この世にありとあらゆるも
のは、人間が造つたものではない。

いつの世の事か知らないが、神様が造つて下さつて、そこに人間も生み、森羅萬象
皆御創造になつて、地上に生きるもの、生活様式總べてを皆、完全に神様が法則を定
めて、下さつてあるのだから、總べての物事は、宇宙の眞理に、生活の總べては立脚
しなければならぬ筈でしたけれども、此の世は形の生存だから、それに囚はれて、間
違つた慾のために、奪ひ合つても、譲り合つても同じもので、お互に徳を譲り合へば
幸福に喜んで、仲よく生きて行かれるものを、奪ひ合ふものだから争ひが起つて、憎
み合ひ罵り合ひ、甚しきは口で殺す眼で殺すだけでなく、生命までも奪ふ様な慘虐な
事もするのです。

皆そのもとは、慾の迷ひであるといふ事を、知らねばなりません。

人間が此の世で生きて行く間は、その健康を維持し、體面を保つためには、衣食住
が缺けてはなりませんから、身分相應の衣食を得るために、力を盡すのは當り前の事
ですから、悪い事ではないのですけれども、馬鹿慾強慾を出してまで、限りもなく手
を伸して、人の分までも奪ひ取らうとする様な、慾を出すのは怖ろしい事ですよ。

さうすれば別に餘分に天から降りも、地から湧きもしないものを、奪ひ取ると、そ

の人にそのものが殖えたゞけ、奪はれた方が缺乏して不自由をしますから、生きて行くに必要なだけは、天が自然にその人の分として、與へて呉れるのだから、喜んで所^{しよ}有^{いう}して、譯^{わけ}ですが、必要のない物までも奪ふと、他の者の幸福を奪ひますから、惡^{わる}い事^{こと}だと思^{おも}ひます。

かういふ風に、此の世の生活様式と眞理の法則とを、はつきり照らし合せると、人間に不満不平を言つたり、強慾^{がうよく}などは、假初^{かりそめ}にもその心に起らないで、唯報恩感謝^{たいはうおんかんしゃ}の氣持^{きもち}が、一杯^{はいみ}満ちて、喜んで生きて行けると思ふんですが、残念乍^{ざんねんながら}今の世には、それまでみんなが考へないで、宗教^{しうきやう}だつて、大分は形式になつて、一つの商賣職業^{せうばいしよくげふ}の様^{やう}な風になつて終^{しま}ひました。

それですから、本當の道を説いて、眞理を悟らせる宗教家が、少くなつたから、尙^{なほ}更世^{さらよ}の中^{なか}が荒^{すさ}んで、唯金^{たかね}や物品^{ぶつぴん}ばかり欲^ほしががる、慾氣^{よくき}狂^{ちが}ひの様^{やう}にその心^{こころ}が荒^{すさ}むと、總^すべての家庭^{かてい}も荒^{すさ}み、村^{むら}も荒^{すさ}み國^{くに}も荒^{すさ}んで行くのです。これではどうしてもいけないと思^{おも}ひます。だからかうした惡^{わる}い習慣^{しゆかん}を治^{なほ}すのには、長^{なが}い間^{あひだ}さうした習慣^{しゆかん}にこだはつて來^きた、中^{ちゆうねい}年以上^{いじゆう}になつてゐる、舅姑^{しうとめ}格^{かく}の人^{ひと}では治^{なほ}りません。

今^{いま}時の若^{わか}い、進^{すす}んだ教育^{けいよく}を受けた娘^{むすめ}達^{たち}が、色^{いろ}々な學問^{がくもん}を覺^{おぼ}えると共に、魂^{たましひ}の修養^{しゆやう}をしつかりとして、家庭^{かてい}へ入^{はい}つたらあらん限^{かぎ}りの眞心^{まごころ}を盡^{つく}して、親^{おや}や夫^{をとと}に仕^{つか}へ、小姑^{こじうと}にも親^{したし}んで、徹^{てつ}底^{てい}し切^きつた眞心^{まごころ}を以^{もつ}て、間^ま違^{ちが}つた迷^{まよ}ひも憎^{にく}みも、慾^{よく}も感^{かん}情^{じやう}も消滅^{せうめつ}させて、その家庭^{かてい}を明^{あか}るくして、舅姑^{しうと}を救^{すく}ひ夫^{をとと}を救^{すく}ひ、兄弟^{けうだい}を救^{すく}ひ我^わが子^こを立派^{りつぱ}に育^{そだ}て、心^{こころ}も體^{からだ}も立派^{りつぱ}な人^{ひと}を、世^よの中^{なか}に造^{つく}り出^だすといふ事^{こと}が、大^{たい}切^{せつ}な事^{こと}だと思^{おも}ひます。

今^{いま}は餘^{あま}りに明^{めい}治^ちの初^{はじ}めから、四^よ五^ご十年^{ねん}間^{かん}急^{きゆう}足^{そく}に世^よの中^{なか}が進^{すす}んで、外^{がい}國^{こく}の思^し想^{さう}も文^{ぶん}化^{くわ}も暫^{しばらく}の間^{あひだ}に輸^ゆ入^{にゅう}して、混^{こん}亂^{らん}して終^{しま}つたし、國^{くに}の中^{なか}でも家^{いえ}の中^{なか}でも、二^に千^{せん}年^{ねん}も前^{まへ}の様^{やう}な事^{こと}を考^{かんが}へてゐる、おぢいさんやおばあさんが生^{せい}存^{ぞん}して見^みえる。

又^{また}御^ご維^い新^{しん}前^{ぜん}の時^じ代^{だい}の生^{せい}活^{かつ}そのものを維^か持^ぢして、却^{かえ}々^く動^{どう}か^かない舅姑^{しうとめ}、そこへ現^{げん}代^{だい}の思^し想^{さう}を持^もつた若^{わか}い者^{もの}あり、そこへ嫁^{よめ}が加^{くは}るといふ風^{ふう}で、まるでごちやくになつて終^{しま}つたから、今^{いま}は家^か族^{ぞく}制^{せい}度^どの國^{くに}の日^{にっ}本^{ぽん}の家^か庭^{てい}生^{せい}活^{かつ}が一^{いっ}番^{ばん}難^{なん}か^かしい時^{とき}になつて來^きたのです。それでも日^{にっ}本^{ぽん}に家^か族^{ぞく}制^{せい}度^どが壊^{こわ}れたら、古^こ來^{らい}の國^{こく}體^{たい}の精^{せい}華^かといふものはなくなつて終^{しま}ふから、飽^{あく}迄^{まで}これは改^{かい}革^{かく}して、家^か庭^{てい}を人^{じん}生^{せい}の一大^{だい}樂^{らく}園^{えん}としなければなりません。それがために私^{わたくし}なんかは、これといふ力^{ちから}はなくても、多^た少^{せう}でもさうした方^{ほう}面^{めん}に貢^{こう}獻^{けん}

したいと思つて、出来るだけ盡力してゐる事は、お前も知つてゐて呉れる通りだが、さういふ立場から、お前に注文する譯ではないが、山田さんのお母さんは、お前よりも一層頭が新しく、現代の世相によく通じてゐらつしやる、聰明なお方だと思ふから私の今言つた様な事柄は、絶対にないと思ふけれど、それでも人間である以上、我が子と嫁と全く差別なく、平等に愛して行けるかどうかといふ事は、保証は出来ません。だから若し多少お前に對して、冷いと思ふ素振りや言葉があつたとしても、そんな事は決して心にかけないで、お前としては眞實の眞心を持つて、先様のお父様お母様は、こゝにゐらつしやるお父さんお母さんより、一層大切にして孝養を盡し、弟さんや妹さんに對しても、自分の兄弟以上に眞心を持つて、お世話して上げなければいけません。

俊夫さんとの事は、夫婦の間柄だから、親密にしやうと心がけないでも、自然に親しくなつて行くだらうと思ふから、親様や兄弟衆の前で、餘り親しくするのは、却つて感情を悪くする事もあるから、嫁としては注意しなければなりません。自分の生れたうちゐたどて、色々世話を焼かれても、却々親の氣に入る様に出來

るものではないから、まして全然違つた家庭へ行くんだから、お前の實家とは家風がまるつきり違ふから、少しでも實家の事を考へたり、口を出したりしてはいけないから、充分にその事は氣をつけて下さい。そしてどんな小さな事でも、一々お母さんに伺つて、教へて頂いて、よく覚えて行かねばいけません。こんな事位は聞かないでもよからうと、勝手にするとお母様の感情を害する様な事が出来すからね。好枝。」

「はい」

房枝も好枝の顔を見て、眼に涙を浮かべ乍ら、

「好枝！ 叔母さんの言ひ聞かせて下さる事を、よく腹に呑み込んで、その通りにしつかり務めて呉れなくては駄目ですよ。

私達はこちらの習慣も分らぬし、又分つてゐても、家風が何も彼も違ふから、何も分らないし、田舎へ歸つて終へば、どんな事が起つても、一々相談に来る事も、お詫びに行く事も出来ないから、そんな事のない様に、よく注意してお呉れ。

叔母様もかうした廣い世間を相手にして、教育事業をしてゐらつしやるんだから、

その家に育ち姪として行けば、お前の行がよければ、叔母さんの教育がしつかりして
ゐたご、世間の人に賞められるし、その反對にお前の出来が悪くて、内輪揉めがして
離縁でもされると、お前が恥をかくだけじやすまない。

叔父様や叔母様まで、世間の物笑ひになるから、よく／＼氣をつけて、真劍で嫁と
しての務めを果して、お父さんお母さんや、御兄弟達にもお氣に入つて、御親戚や近
所の方々からも、よく出来た嫁だと言つて、賞めて頂ける様にして呉れなくちやいけ
ないよ。」

と最後の言葉は聲がふるへて、涙がホロ／＼と頬を傳はつて落ちるのを、襦袢の袖口
を引き出して拭ふのを見ると、親心に感じて好枝も、思はず涙をこぼしました。

父も宮崎も男だけに、涙はこぼさないが、目頭を熱くして、膝に手を組んだまゝ最
後まで一言も洩らさぬ様に聞いてゐました。

宮崎は餘りに氣分が行き詰つたので、

「大丈夫、好枝はその位の事はよく考へてゐる。それに向ふの家も、普通の家庭と違
つて、賢い人ばかりが揃つてゐるんだから、何のそんな心配があるものか。」

だが参考のために、道枝の話を聞いておく事も、無駄じやないんだけれど……。」

「本當にさうだ。道枝！ よう色々と注意してやつて呉れた。わし達親では、そこま
で注意が届かぬのだよ。」

色々心配はするんだけど、好枝も叔母さんからよく懇ろに聞かせて貰つた今の話を
しつかりと覚えておいて、一生懸命で努めて、いゝ嫁だと言はれてお呉れ。

幾らかけても、充分といふ事はないんだが、まあ親としては、出来るだけの骨を折
つて、折角かうして仕立てもしたんだから……。」

「本當にさうでございます。これが無駄になる様な事があつては、大變でございます
から……。」

「それで好枝！ たつた一つ最後に言つておくが、三年間位は、假令無理な事を仰有
るかと思つても、決して口答へをしてはいけないよ。」

そしてどんなに叱られても、悪い顔なんか決してしないで、悲しさうな口惜しい様
な思ひを、顔に出さない様にしてお呉れ。そしていつも、努めてニコ／＼として、お
小言のあつた時なんか、殊更機嫌よくハキ／＼として、立廻らないといけません。

そして近所の人にも親切にして、禮儀を缺さない様にして、又お客様の見えた時の言葉遣や、取扱ひなどは餘程注意して、真心からおもてなしをしないといけません。殊に先方の御親戚の方などが、お客に見えた時には、お茶一杯出すのでも、真心こめて差上げて、形式的な行爲なんか、決してしてはいけません。お前の身内などが若し行つた時は、別に喜んでてもなさなくてもいゝし、又そんな素振りがあつては悪いから、さういふ事もよく考へておゝきなさい。

もう一つ手紙なんか、お友達とやり取りするのにも、豫めお父様お母様、俊夫さんにも申上げて、お許しを願つておくがよろしいよ。又結婚してからは、ごんな潔白な關係の人でも、男の人などと決して通信してはいけませんよ。」

「はい、よく分りました。」

「ではこれで、私がお前に注意しておき度いと思つた事は、全部すみしました。さあ皆さん、お茶でも入れて呑みませう、幸ひおいしいお菓子もありますから。」

と道枝は茶棚からお菓子を取り出さうと、立上りました。皆は朗かな氣分に歸りましたが、好枝はきちんと膝の上で手を組んで、深くうなだ

れたまゝ、いつまでも考へ込んで終ひました。

花 嫁

女一代の中一番目出度いと言ふ、今日の喜びの日に、好枝の両親の正雄や房枝、叔父叔母の春光と道枝等は、二十八日の朝早くから、夢中でその準備に忙しがつて居りましたが、その顔には言ひ知れない喜びが浮んで、言葉にもそれが表れてゐますのに肝腎の好枝は、前日あまりに幾度も髪を結び直したり、長風呂をしたり、夜更しをしたりしたのが體に障つたのか、朝から頭痛がすると言つて、朝飯も食べませんのでみんなが心配して、

「肝腎のお前が氣分が悪くては、それこそ困つて終ふから、少し位は苦しくても、今日一日は氣をしつかり持つてゐて呉れなければいけないよ。」

「好枝! ごんな氣持なんだえ、大變頭が痛むのか。」

と口々に心配さうに尋ねます。好枝は無理に軽く笑つて、

「いゝえ、大した事はありませんの、少し風邪を引いたらしく、頭痛がするだけです